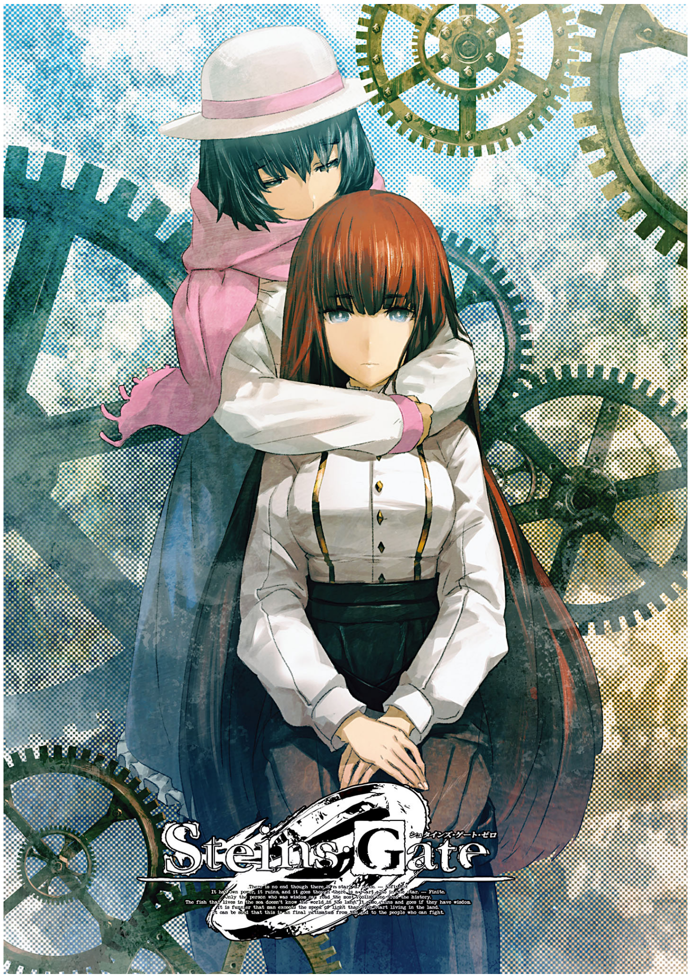

盟誓のリナシメント 下
STEINS;GATE 0
シュタインズ・ゲート・ゼロ
There is no end though there is a start in space. --- Infinity.
It has own power, it ruins, and it goes though there is a start also in the star. --- Finite.
Only the person who was wisdom can read the most foolish one from the history.
The fish that lives in the sea doesn't know the world in the land. It also ruins and goes if they have wisdom.
It is funnier that man exceeds the speed of light than fish start living in the land.
It can be said that this is an final ultimatum from the god to the people who can fight.
原作：志倉千代丸／MAGES.
著：浜崎達也
カバーイラスト：huke
本文イラスト：池田靖宏（MAGES.）
角川スニーカー文庫


Steins;Gate
シュタインズ・ゲート・ゼロ
原作:志倉千代丸/MAGES.
著:浜崎達也
カバーイラスト:huke
本文イラスト:池田靖宏(MAGES.)
盟誓のリナシメント 下
角川スニーカー文庫


Steins;Gate
シュタインズ・ゲート・ゼロ


フェイリス、るか、まゆり、かがり、
そして鈴羽まで——5人が並んでいた。巫女服で。
「私はどうかな？似合ってるかな？」
「あ、オカリン！」
「あ……あけましておめでとうございます」
「あけましておめでとうございます、みなさん」
「こっち、こっちだニャ！」


黄昏時。牧瀬紅莉栖は、
斜陽のなか、うつむいていた――。


牧瀬紅莉栖
別の世界線で、自身とひきかえに
まゆりを救った天才少女。
漆原るか
柳林神社の、巫女服が似合う男の娘。
フェイリス・ニャンニャン
女子高生でメイド喫茶を経営。
橋田至
ラボメンたちからは〝ダル〟と呼ばれる凄腕のハッカー。
阿万音由季
まゆりのコスプレ友達で、未来のダルの妻。
椎名かがり
未来で、まゆりが養子としてひきとった少女。
阿万音鈴羽
2036年から訪れたタイムトラベラー。
椎名まゆり
岡部の幼なじみであり、よき理解者。
岡部倫太郎
未来ガジェット研究所のリーダー。
桐生萌郁
編プロのバイト、無口で携帯電話依存症。
比屋定真帆
脳科学研究所の研究員で、
紅莉栖の先輩。


岡部――凶真は白衣をひるがえした。
「そう、これだ！　これこそが我が聖なる白銀の鎧！
いまこのとき鳳凰院凶真は復活した！　長い眠りから甦ったのだ！
フゥーハハハハハ！」

STEINS;GATE 0-シュタインズ・ゲート ゼロ-

盟誓のリナシメント 下

原作：志倉千代丸／MAGES.

著：浜崎達也

角川スニーカー文庫

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

1章　軌道秩序のエクリプス　15
2章　二律背反のデュアル・α　132
3章　二律背反のデュアル・β・前　165
4章　二律背反のデュアル・β・後　275
5章　盟誓のリナシメント・前　331
6章　盟誓のリナシメント・後　373
あとがき　506

Illustration：huke　池田靖宏（MAGES.）
Design work：木村デザイン・ラボ

目次

1章　軌道秩序のエクリプス
2章　二律背反のデュアル・α
3章　二律背反のデュアル・β・前
4章　二律背反のデュアル・β・後
5章　盟誓のリナシメント・前
6章　盟誓のリナシメント・後
あとがき

断章　断片化のエクスシア（1）

彼女に関する公的記録は2027年、戦災孤児として、政府の養護施設に収容されたときからはじまる。そこで二等養護官として配属された椎名（しいな）まゆりと出会い、育てられた。彼女を、かがりと名づけたのはまゆりだった。その名前にこめられた願いについて記録はない。

実の両親やストリートチルドレン時代のことは、人に聞いた話を覚えているだけにすぎない。それが事実かどうかも、たしかなものではなかった。年齢さえ——保護されたときの成長具合から、書類上の都合で2026年生まれと決められただけだ。

だから椎名かがりにとって、自分の出生にたいした価値などなかった。

2032年、正式にまゆりの養子となって椎名姓となり、施設を出てふたりで暮らしはじめる。

かがりにとって、椎名まゆりは血のつながりを除いたあらゆる意味で母親だった。

そして、彼女が育った養護施設には、かがりにとって、もうひとり大切な人がいた。

——せんせい。

あの人は、養護施設にある治療所の、かかりつけの医師だった。

やさしくて、ほかの孤児たちにも慕われていた。

――きょうじゅ。
みんなの父親代わりのようであり、幼いかがりも信頼していた人だ。
教授の特別な授業（セミナー）を受けるために、バスに乗って、山奥の別の施設に行ったこともある。遠足だ。ほとんど唯一の、遠出をした旅行の思い出。

かがりは、そこで〝カミサマ〟の言葉を聞く。

覚えていることは多くはない。7つまでは神のウチと――誰だって、そんな幼いころのことで思いだせることはかぎられている。
カミサマはとても物知りで、でも、もっともっと、たくさんのことを知りたいと願っていた。
かがりたち選ばれた孤児は、そのお手伝いをするのだ。
愛に見放されて育った孤児たちにとって、はじめて〝家（イエ）〟を与えてくれたカミサマに、期待されて役目を与えられること、必要とされたことは、まさに幸せだった。
祝福だったのだ。だから、ちゃんとやらないといけなかった。

――情報とは。

家（イエ）に招かれた孤児たちは、この言葉を何度も復唱して、だから、たぶん一生忘れずにいる。

――正しく、正しく、正しく、正しく。

――それを正しく使える者が、正しく管理し、正しいタイミングで、正しい場所へ提供すべきである。

難しいことはわからない。でも、それはよいことなのだ。だから正しくない、悪い人が勝手なことをすることを防がなくちゃいけない。そのために孤児たちはカミサマの家に招かれた。

満足に学校にも通えなかった孤児であっても。

ひとりひとりが、目となり耳となって〝伝える〟こと。それくらいならできた。

カミサマの目となり耳となる。

大切な役割を与えられたとき、かがりやほかの孤児たちはカミサマの〝天使〟となった。

そうして十字架（ロザリオ）の代わりに、あの携帯端末をわたされてカミサマと契約（やくそく）すると、信仰を胸に、それぞれの新しい家に帰っていった。

椎名かがりはカミサマとの約束を胸に秘め、母親のまゆりと暮らしはじめる。

かがりは幸せだった。

家があった。家族がいたからだ。まゆりママがいたから。そして心にはいつも父（カミサマ）がいた。

はじめから、なにも持っていなかったかがりにとって、たとえ日本が滅ぼうとも失うものなどなにもない。

ただ、まゆりママと暮らすことが幸せだった。

失ってはいけない、すべてだった。まゆりママを守るために。そのためになすべき正しいことは、ぜんぶ声が――カミサマが教えてくれた。

かがりは、自分の知ったことすべてをカミサマに報告した。伝えたことが役に立つかどうかなんて、考える必要はなかった。伝えた情報（こと）を、どうやって使うか、正しく使うかはカミサマが考えてくれる。

まゆりにとって日常とは、母であるまゆりにかかわる世界だった。

母の昔からの友人――ダル、鈴羽（すずは）、るか、留未穂（フェイリス）……そう呼ばれている人たちのこと。母の友人たちがやっていること、その〝組織〟のことは、かがりはよくわからなかった。理解はできなかったが、見たこと聞いたことを、そのまま携帯端末でカミサマに伝えることはできた。

２０３５年、大戦は終結、日本は内戦の泥沼へと沈んでいく。

〈ワルキューレ〉という名前はレジスタンスとして、戦後の政府、その背後にいる超大国のあいだでも密かに意識されはじめる。

かがりも戦士として銃を握るかという年頃になっていた。

かがり自身は組織――〈ワルキューレ〉のメンバーではなかったが、まゆりと暮らしている以上、無関係でもいられなかった。

銃弾と爆発にさらされて、逃げまわる日々。そんななかでも、かがりは伝えつづけた。東京のインフラが半ば壊滅状態となっても、カミサマとの連絡手段だけは保たれていた。

カミサマは〈ワルキューレ〉の存在に強い関心を持っていたようだ。

かがりは、天使たちのなかでも特別だと褒められた。そのことは素直にうれしかった。

——彼らの研究について伝えなさい。

カミサマは、かがりに言った。

無理をして探ろうとしてはいけない。いつもどおりにふるまい、でも、もし〈ワルキューレ〉が作ろうとしているもの……タイムマシンのありかがわかったら、まっ先に伝えなさい。

携帯電話の位置情報機能で場所は伝えられる。そうすればカミサマの天使たちが、すぐに駆けつけてくる、と。

——タイムマシンは悪いものだ。

カミサマは、つねづね、かがりに言っていた。勝手に過去を変えるなんて、いけないことだと。

ダルおじさんや鈴羽おねーちゃんは、悪いことをしている。

かがりの子供らしい正義感は刺激された。あのとき——２０３６年８月13日、秋葉原のラジ館にある〈ワルキューレ〉の秘密の研究所の存在を知ったとき、かがりは携帯電話でカミサマに伝えた。

——タイムマシンはここにある。

でも、間にあわなかった。そればかりか、かがりはタイムマシンに押しこめられて、過去に送られてしまった。

母とはぐれ、時間の迷子になった椎名かがり……。

1975年から1998年へ。そして阿万音（あまね）鈴羽と〈ワルキューレ〉の目的が、未来を変えることであると確信したかがりは自分の意志で決断する。

鈴羽は、かがりを組織の部下としてあつかうと言った。たしかに10歳といえば一人前だ。大人だ。母を――まゆりママを救うために。家（イエ）を守るために。失ってはならないものをタイムマシンによって消させないために。かがりは彼女にできるすべてを破壊した。奪った拳銃（グロック17）で小型量子コンピューターを撃ち、『2000年問題』を回避するミッションを失敗させたかがりは、阿万音鈴羽と袂（たもと）を分かった。

そして父たる存在を頼って、千葉の山中にある約束の〝家（イエ）〟を訪れた。

――声でわかる！　かがり、ちゃんと、ここに来たよ！　ちゃんと言われたこと守ったの！

数十年も昔の、ずっと若いころのカミサマ――教授（せんせい）。

――私は……知らない。カミサマちがう。どこかで会った？

でも、若いカミサマはかがりを覚えていなかった。いいや知らなかったのだ。かがりは1998年には、まだ生まれてさえいない。カミサマとも会っていない。会っていない相手のことを覚えているはずもない。

約束を守ったのに。伝えたのに。伝えつづけ、戦ったのに。…………

母とはぐれ、父にも会えなかった。

かがりを待っていたのは、暗闇ともちがう、どこにも、誰ともつながることのない無視という沈黙の、長い長い時間だった。

……みんな正しかったのに。正しいのに――

＊

20＊＊／＊＊／＊＊

――助けて……誰か……誰か、ここから出して！
――助けて、ママ！　どうして来てくれないの？　ママ！　ママぁ！　…………
眠り、食い、排泄（はいせつ）するだけの場所。
手足をのばせば両側の壁に届いてしまうほどの狭い個室で、椎名かがりは10代のすべてをすごしてきた。
空が見える窓はなく、ドアは厳重にロックされていた。それでも、彼女の脳と記憶を塗りつぶしていく濁った時の流れのなかでは、いくらかマシな場所だった。

緑の〝うーぱ〟のキーホルダーを握りしめて。

少なくとも、そうしてベッドにうずくまっていれば、それ以上ひどいめに遭うことはなかった。

鉄格子のフロアゲートがひらく気配を感じた。

ややあって、窓のついたドアのむこうに見知った顔が現れた。

ニヤニヤと……笑みを浮かべた白人の男。かがりがこの千葉の施設を訪れたとき、正門で応対した守衛だった。

「——よう、しばらくだな」

この1年近く、守衛は施設にいなかった。理由を、かがりが知るはずもない。

かがりは便器に坐(すわ)っていた。

カーテンもない剝(む)きだしのトイレだ。排泄を見られたことに羞恥を示すよりも、かがりは、なりふりかまわずといった様子で彼に駆け寄った。

ドアに体をぶつけて拳で叩(たた)く、すがりつく姿勢で跪(ひざまず)いて叫ぶ。

「…………！　…………！」

膝をついたかがりの目線の先には、守衛の腕にのぞいた刺青(いれずみ)があった。

天使の。

「なんだ……しばらく見ないうちに、ずいぶん育ったじゃねぇか」

守衛はかがりの体を目でなぞる。

　ふたりがはじめて出会ったとき、かがりは瘦せっぽちで栄養状態のよくない子供だった。あれから数年——施設にいる他の実験動物、ラットやモルモット、イヌ、サルやらと同様に飼われていた少女は、性徴を迎えて、身体だけは本来の年相応に成長していた。

「…………！　…………！」

「喚いたって、なにを言ってるのかさっぱりだ。あいかわらず……」

　守衛はガラス窓ごしに小馬鹿にした反応をかえす。

　つづいて数人の研究スタッフが現れた。個室の前にある機器の並んだブースで、なにかの準備をはじめる。

「——そういや、アメリカであの人と会ったぜ」

「！」

　守衛の言葉に、かがりが目を見ひらいた。

「〝カミサマ〟……だよ、タイムトラベラーちゃんよ」

「…………！　…………！」

　かがりは扉を激しく叩いて、天使の刺青の男に訴えつづける。

　でも、かがりが、なにを言おうと研究スタッフたちは興味を示さなかった。人間としてあつかわれてはいなかったから。すべての声は意味をなさない獣の呻（うめ）きでしかない。

「カミサマは近々、教授になるらしいぜ。すげぇな、おい未来人様の予言どおりだ」

守衛はわざとらしく感心してみせた。

そうした意味では、この守衛などは、かがりのことをギリギリで人間あつかいはしていたのかもしれない。頭のおかしな哀れな子供として、女として。

準備が整い、研究スタッフたちが守衛をうながした。

かがりは、びくっとしてドアから離れると、部屋の奥のトイレの脇にしゃがみこんだ。怯（おび）えてガクガクと脚をふるわせる。シャンプーを嫌がる猫みたいに。

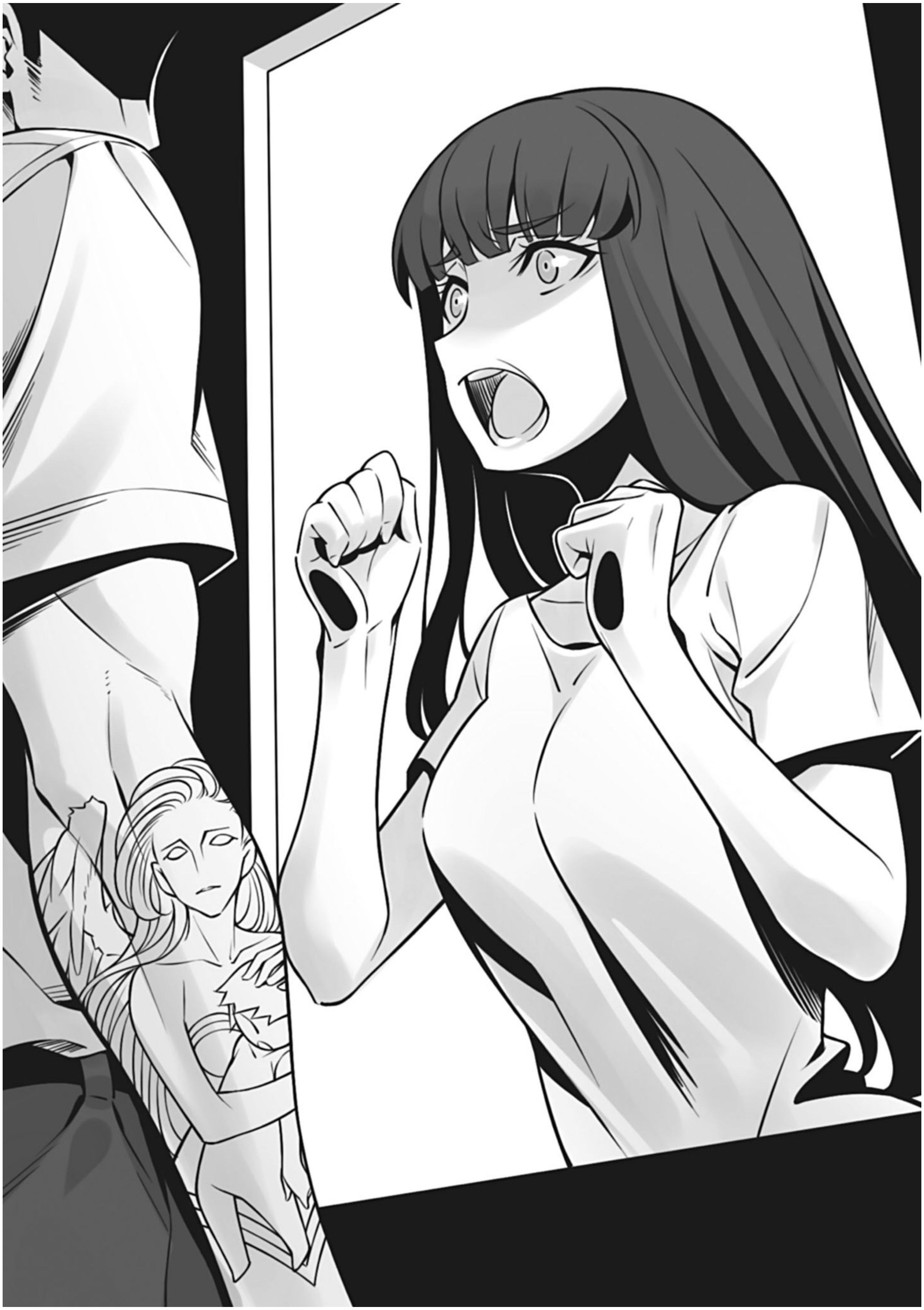
「じゃ、新しい実験……いや、授業をはじめるぜ。よろこべよ……！　これはもともと、おまえのカミサマのアイデアらしい。音楽の授業だ」

守衛は収納箱に入っていたＣＤケースを何枚か、無造作に手にした。

「…………？」

「クラシック……ええと、モーツァルト？　どれがいい？　おまえの曲は……」

カードを選ぶようにＣＤケースを指でふれていく。かがりが答えるのを待つ気もなく、１枚を選んだ。



——『魔笛』。
「これにするか。おまえの曲だ、カガリ」
守衛は選んだCDを研究スタッフにわたした。
研究スタッフがたしかめ、端末にデータを入力する。CDには交響楽団や指揮者の名前などが記載されていたが、誰も、そこに興味はなかった。
「ケッヘル620の5……それが、こいつの番号か」
守衛は、たいして興味もなさそうにつぶやいた。
研究スタッフが実験器具を用意する。かがりにむかって、事務的に、おとなしく指示に従うよう命じる。
ドアロックが外された。研究スタッフたちは部屋に入る。
その瞬間、
「！」
かがりは低い姿勢のまま、壁を蹴った。
虚を衝かれた研究スタッフたちを突き飛ばして、部屋から逃げだそうとする。
激しくぶつかる音。
「なにやってんだ」
ぶざまに倒れた研究スタッフたちを見おろして、守衛はあきれた。

かがりの首根っこをつかんで壁に押しつけると、太い腕で組み伏せる。
「…………！」
骨が軋(きし)むほどの強い圧力をかけられて、かがりは息を吐き、声にならない悲鳴をあげた。
「まったく獣とおなじだな……！　この部屋から出たって外にはゲートがあるんだ。逃げられねぇって何度言えばわかる。痛いめに遭いたくなけりゃ、おとなしく……いや――」
守衛はかがりを拘束したまま背後から腕をまわした。
刺青の腕で、かがりの首を締めあげる。
「おまえのカミサマに会いたければ、俺の天使に逆らうな。いいな、カガリ……Ｋ６２０５(ケー・シックス・ツー・ゼロ・ファイフ)」
天使。
戦いの犠牲となった子供を抱き、嘆き、天を仰ぐ神の使徒は、傷つき羽を散らしていた。

――我が名は鳳凰院(ほうおういん) 凶真(きょうま)！　世界の支配構造を覆し、混沌(こんとん)に陥れる男！

1章　軌道秩序のエクリプス

STEINS;GATE 0

1

2010／12／23

発明サークル・未来ガジェット研究所を主宰する東京電機大学1回生、岡部倫太郎（おかべりんたろう）のもとに、漆原（うるしばら）るかが記憶喪失の女性・カナ（仮名）を連れてきた。

ところが事態は意外な方向にむかう。

タイムトラベラー・阿万音鈴羽（あまねすずは）は、カナの唯一の所持品だったキーホルダーを見るなり、驚きの反応を見せた。

――あたしは、知ってる。その〝うーぱ〟……それ……。

5

時計は午後6時半。

「それでは、あらためまして……あけまして、おめでとうございま～す」

まゆりの音頭で「あけましておめでとうございます」の大合唱。

ラボの人口密度が一気に上昇した。

岡部倫太郎、橋田至、椎名まゆり、阿万音鈴羽、秋葉留未穂(フェイリス)、漆原るか、比屋定真帆、中瀬克美(フブキ)、来嶋かえで(カエデ)、天王寺綯、そして椎名かがり。

11人だ。よくも、こんなに入ったものだ。これが男ばかりだったら地獄絵図だ。

まゆりが、お重をつつきはじめた。

「ん～、るかくん家(ち)のおせち、美味(おい)しいね～」

「ほんと？　ボクと、かがりさんも手伝ったんだけど、そう言ってもらえてよかった」

「エッヘン！　なーんて、私は盛りつけただけなんだけど」

綯は、至と鈴羽の横で、おせちを頬張(ほおば)っている。

「私、この甘い卵焼きだいすき。くるくるってなってるの」

2章　二律背反のデュアル・α

STEINS;GATE 0

1

岡部倫太郎（おかべりんたろう）は彼女を殺し、彼女への想いを殺した。彼女との約束を守るために。

2

黄昏時（たそがれどき）。

牧瀬紅莉栖（まきせくりす）は、斜陽のなか、うつむいていた。

幻か。

彼女は死んだ。紅莉栖に会いたいと祈るほど、募る想いが幻覚を生みだしたとでも……。

岡部の体は石になったように動かない。

断章　断片化のエクスシア(2)

声は届かぬまま。

2010／11／＊＊

握りしめた〝うーぱ〟のキーホルダーの塗装が、すっかり剝げてしまうほどの時間。
タイムマシンの少女が千葉の施設に監禁されてから、12年がすぎていた。
椎名(しいな)かがりは、ここで暗闇の10代を生きた。会いたい人とは誰とも会えず、彼女を人間としてあつかってくれる相手もなく。
誰も助けてはくれなかった。どんなに声をあげても、あんなにやさしかったママは来てくれなかった。
でも、それは仕方がないのだ。あの池袋の家で暮らしている小さいころのまゆりママは、かがりのことを知らない。たった一度、この施設で声だけを聞いた若いカミサマも、かがりが約束を守ったことを知らない。
タイムマシンは悪いものだ。

3章　二律背反のデュアル・β・前

1

目眩(めまい)。〈リーディングシュタイナー〉の発動と、岡部(おかべ)の生理的サイン(バイタル)。
それがなくとも、再び、世界線が変動したことは自明だった。
目をひらく。
ブラックアウトしていた視界は、ゆっくりと色彩をとりもどしていく。
見慣れた――ラボの景色だ。
もう一度だけ瞼(まぶた)を閉じた。
記憶の残滓(ざんし)が、いとおしい彼女の輪郭を形作る。そして再び瞼をひらく。
開発室に紅莉栖(くりす)の姿はなかった。

比屋定真帆は、和光のオフィスのデスクで、ぼんやりとPCのモニターを眺めていた。

世間は、まだ正月気分だ。日本の仕事はじめには、まだ早い。

前回、真帆が日本に来たのは、まだ残暑の厳しいころだった。牧瀬紅莉栖の突然の死。かわいそうな後輩が、無残に命を絶たれた現場を弔問するために訪れた秋葉原で、岡部倫太郎という青年と出会った。

真帆の、紅莉栖に対する感情は複雑だったのかもしれない。

紅莉栖がおなじ職場に来るまで、真帆は自分をそれなりにできる——天才と驕(おご)っていた。

真帆もまた飛び級を重ねて10代で大学の研究室に入った。だから、そう思っても無理はなかった。なにより、まわりが真帆を天才あつかいしたから。

当時の自分の思いあがりは、顔から火がでるほど恥ずかしい。

牧瀬紅莉栖の登場によって、真帆の自尊心は打ち砕かれた。

彼女は本物だった。それと比べれば、自分は、はっきりと一段劣る。それは周囲の反応からあきらかだった。

ああ敵わない——そう思った。

いっそ憎むことができれば楽だった。せめて別の研究所、別のチームであれば無視することもできたのに。紅莉栖は真帆に、それすら許さなかった。

――私になにかできることがあれば、手伝いますから言ってくださいね。

――先輩。先輩のその研究、上手くいけば革命的な成果が得られると思います。

いつか紅莉栖を越えてやりたい、そう思った。先輩には敵いませんと言わせてやりたかった。

でも、そんな真帆の願いは永久にかなわぬものとなった。

彼女は、どこまでも公正で、真摯な科学者で、真帆に対してまっすぐだった。

紅莉栖への複雑な気持ちを抱えたまま、真帆は、自分が紅莉栖をどう思っていたのか、よくわからなくなってしまっている。真帆が紅莉栖の研究を継ごうとしているのは、そんな自分の気持ちに整理をつけるためだ、と言われれば否定できない。

不幸な紅莉栖が、中途半端に投げだすしかなかった研究で成果をあげることができれば、真帆は、やっと紅莉栖の存在を乗り越えられるだろう。いいや越えずとも、亡き人に心を乱されることはなくなる。

アマデウス(Amadeus)。

側頭葉に蓄積された記憶に関する神経パルス信号。

記憶のデジタルデータ化。紅莉栖は論文で、それが可能だと証明してみせた。

その技術は真帆たちの手で、人工知能として実用段階にまで迫っている。レスキネン教授のはからいで日本に留学した紅莉栖が研究所にもどるころには、医学分野などへの転用まで見据えた結果を出し、そのときこそ、ふさわしい学会などで発表するはずだった。

それも紅莉栖の死とともに潰えた。

突然、大学の上層部から伝達されたプロジェクトの中止。文句を言おうと、教授にくってかかろうと決定は覆らなかった。

アマデウス・システムは脳科学研究所のサーバーに封印された。サンプリングされた記憶データも、そこで眠っているはずだ。

紅莉栖の記憶データ。

そして、いまになって紅莉栖の記憶を持つという女性が現れた。椎名かがり。

なぜ、そんなことが……。

可能性があるとすれば、それは、あの少し奇妙な印象の青年・岡部倫太郎の仮説どおり――

「おや？　マホ」

オフィスのゲートがひらいて、大柄な白人男性が入ってきた。

「教授」

「どうしたんだい？　まだニューイヤー・ホリデイのはずだが？」

真帆の上司である、アレクシス・レスキネン教授だった。

「そういう教授こそ、休みの日に出てきてるじゃないですか」
「特にすることも無いからね。ホテルにこもっていても息が詰まるだけだし、それなら、ここへ来て仕事をしていたほうがいい」
「だったら私も似たようなものです」
研究者というのは、好きなように研究することが人生なのだ。
こうしてレスキネン教授がオフィスに顔を出すことを見越して、真帆はわざわざ来ていた。
「マホ、きみには、いろいろとやることがあるだろう。たとえばデートとか……」
「教授。あんまりしつこいとセクハラで訴えますよ」
「おっと、それだけは勘弁してくれ」
レスキネン教授は大げさに肩をすくめてみせた。
真帆と岡部倫太郎は、互いに紅莉栖の友人だったという縁もあり、偶然の出会いから、いろいろと話をする仲になった。
それだけだ。ところが真帆に日本人の学生のボーイフレンドができたと曲解したレスキネン教授は、以来、そのオカベという青年とマホを、くっつけようとしてくる。
「……それじゃあ、お詫び（わ）びというわけじゃないですが。ひとつ訊（き）いてもいいですか?」
「訴訟されないですむのなら、なんなりと」
「じゃあ訊きますけど……アマデウスは、いま、どうなっているんですか?」

アマデウス・プロジェクトの統括責任者はレスキネン教授だ。

「どうもなにも……いまのところ再開できる目処がたっていないことは、きみだってよく知っているはずだよ」

「それはわかってます。私が訊きたいのは、アマデウスのデータは、いま、どうなっているかということです」

「研究室のサーバーに保管されているね」

「誰かがアクセスしたり、持ちだしたりは？」

真帆の言葉に、レスキネン教授は眉根を寄せて、ゆっくりと首を左右にふった。

「マホ……きみが、なぜそんな疑問を持ったのか私にはわからない。アマデウスは凍結され、不正にアクセスされたという事案も起こっていない」

はずだ、と。少なくともレスキネン教授の耳には入っていなかった。

「私や、紅莉栖の記憶データも？」

「もちろん」

「じゃあ、ほかに　私が知らない人工知能のプロジェクトが動いているなんてことも、ありませんか？」

アマデウスのデータを流用して、研究がつづけられている可能性はないのか。

「あるわけがない……！　我々の研究チームには、マホ……きみのチカラが必要不可欠だ。私たちはクリスという才能を失った。それは大いなる損失だったが、彼女のいなくなった穴を埋められるのは、きみだけだと思っている。そんなきみの知らないところで、新たなプロジェクトなど進めるはずがないだろう？」

研究者には他人をだしぬこうとする者が少なくない。手柄を横取りされて先に発表されてしまえば、何年もかけた研究がムダになってしまう。おなじチームの人間であってもだ。信頼を置ける人物はかぎられている。

レスキネンに対する真帆の信頼は、まさに全幅の──真帆は助手として、アマデウス・プロジェクトについての栄誉のすべてを、この教授にこそ受けとってほしいと願っていた。だから何人であれ剽窃（ひょうせつ）は許さない。

真帆の、椎名かがりの記憶の件に関する疑念と焦燥の大半は、そうしたレスキネン教授への感情の上にあった。

「マホ、質問に対する答えはこれでいいかな？　では私からの質問もいいかい。どうして急に、そんなことを訊くんだい？」

「それは……」

「もしかして自分の秘密が、誰かに漏れていないか心配にでもなったのかな？」

「……まあ、そんなところです」

質問したレスキネン教授の口から、それらしい答えが出てきたので、真帆は乗っかっておいた。

「それなら心配ない。アマデウスは本人が秘密にしたいことはしゃべらない。きみだって知っているはずだよ。仮に、何者かがデータを盗んだところで、本人が知られたくない部分はブラックボックスになっている。アマデウスから記憶データをとりだすことは不可能だ」

サンプリングした記憶データは、アマデウス・システムで実行することで人工知能として機能する。記憶データそれだけを解析することはできないし、システムごと盗んだとしても、AIのマホはオリジナルの比屋定真帆の性格まで再現していた。オリジナルの不利益になる情報を漏らすことはないし、人工知能であるから、肉体的な拷問、薬物による自白、精神的な脅迫、そのほかの手段によって証言の強要はできない。

「秘密が漏れるとしたら、記憶を持つ生身の人間からだけだね」

「生身の人間……」

「つまり本人だけということだ。どうだい、少しは安心したかい？」

レスキネン教授の回答は明快だった。

ただ、そうなると結局、椎名かがりのなかにある紅莉栖らしき記憶については、謎のままだった。

と、またまたオフィスのゲートがひらいた。

「あら？　ふたりともいたのね」

ジュディ・レイエス教授だ。彼女も研究会がらみで来日していた。

「――せっかくのホリデイだというのに、もの好きね」

「レイエス教授こそ」

「ワタシはホテルにいてもやることなんてないから」

レイエス教授の答えを聞いて、真帆はレスキネン教授と視線を交わすと、肩をすくめた。

「なになに、なんなのよ?」
「Hahaha」
「ふふ……なんでもないです」
ここにも似たもの同士がいたのだった。真帆たちのリアクションに、レイエス教授は大きなクエスチョンマークを頭の上に浮かべた。

11

2011/1/6

かがりの脳のなかに紅莉栖の記憶がある。
岡部が、そんな仮説をひらめいてから数日が経った。
「ごめんなさい。オカリンさんには、いろいろ迷惑かけちゃって」
「迷惑だなんて思ってない。俺なんかよりもルカ子やまゆりのほうが、いろいろと気を配ってくれてるはずだ」
その日のラボには岡部とかがり、まゆり、るかがいた。
「そんな……ボクなんて、ただ話し相手になるくらいで……」

「まゆしぃこそ、なんの役にも立ってあげられなくて、ごめんね？」

「ううん！　そんなことないよ！　るかくんはすごくよくしてくれてるし、ママはいてくれるだけでうれしいし」

　ママと呼ばれて、まゆりはくすぐったそうに身をよじった。

　女子高生が年上の女性からママなんて呼ばれれば、ふしぎな気分になるはずだ。至など先日、なにやら新しい可能性を発見したとかで、ふたりがジャレるのを観てはハァハァして、ママァ……とか甘えた声を出していた。

「ねぇ、ママ？」

「なぁに？」

「ぎゅってしていい？」

「ぎゅ？」

「子供のころに、ママがよくやってくれたみたいに、ぎゅってしてもいい？」

　世界線がズレてから、かがりは、ますます子供っぽい性格になった。大きな10歳児だ。

「ふえぇ～？　わわ～、テレちゃうな～」

「だめ？」

「ううん……いいよ？」

　はにかみながら肯（うなず）いたまゆりに、かがりは顔を輝かせて抱きついた。

「えっへへ～」
「かがりちゃん、いい子いい子～♪」
　まゆりはタイムマシンのことは知っていても、深い事情は知らないし聞いてもこない。ただ、戦災孤児だったかがりの気持ちを、感じてはいるはずだ。
「ママ……」
　ふしぎなもので、実年齢はかがりが5歳くらいは上だが、こうしていると母娘に見えてくる。
「ありがと、ママ」
　まゆりママのおかげで、かがりの精神状態は、以前よりもおちついていた。
　いまなら話していいだろうか……岡部は、かがりにむきなおった。
「それで、かがり。調子はどうだ？」
「調子、かぁ……んとね、なんだかよくわからない、かな？」
「よくわからないとは？」
「ふとしたとき思いだすことがあるんだけど、それが自分のものなのか、紅莉栖さんのものなのかわかんないの。難しい数式とか、実験とか……理解はできてないんだけど知ってる、覚えてる、みたいな」
　かがりの12年間は空白なのではなく、そこに紅莉栖の記憶が上書きされてしまったのだとしたら。それが、どんな感覚なのか想像することさえできない。

「んとね、この前もね、パパのことを思いだしたの。子供のころパパに褒められたときの記憶。それを思いだして、なんだか、すごくうれしかったんだけどね……　でも、私、赤ちゃんのころに戦争で両親死んじゃったし、パパなんて知らないんだよね。だけど、自分が経験したことじゃないのに、褒められてうれしいっていう感情はたしかにあって……そう考えてると頭のなかがごちゃーってなっちゃって……」

かがりは頭を抱えてみせる。

くるくると表情が変わり、ややオーバー気味なリアクション。なんだか、まゆりによく似ていた。そういうのも未来の母親による影響なのか。

「その……紅莉栖の記憶は、よく出てくるのか？」

「うん。まえに比べると、しょっちゅうになったかも……」

紅莉栖の記憶を、頻繁に読みだしてしまう。



「ねぇ、オカリン。かがりちゃん、どうなっちゃうのかな?」
まゆりが漠然とした不安を訴えた。
「本来なら、ちゃんとした専門機関で検査してもらうのがいいんだろうが……」
身元不明のかがりは病院にかかることも難しかった。この12年間、まったく病院にかかっていないということはないだろうし、どこかに記録が残っているかもしれないが……。
「あんまり検査はしたくないなあ。子供のころもね、検査ばっかりしてたから」
「そうなのか?」
未来のまゆりが勤めていたという養護施設にいたときだろうか。
「うん、PTSDを治すためだって言って。イスに座って、頭に装置を被ってね……」
戦災孤児の心のケア。岡部も受けた催眠療法のようなことをしていたのかもしれない。
もし——このまま、かがりのなかで紅莉栖の記憶が「ON」になる時間が長くなると、彼女はどうなるのか。
牧瀬紅莉栖の記憶を持つ、椎名かがりになるのか。
それとも……牧瀬紅莉栖になってしまう?
記憶だけが人格を形作るわけではないだろう。しかし、人格を形成する大きな要素ではある。
紅莉栖の記憶を有したかがりは、どんな存在になるのか。まったくわからなかった。誰かの記憶を脳内で共有するなんていう状況が、おそらく他に類を見ないことだ。

「あ、まゆりちゃん。時間」
るかが部屋の時計を見た。
「あ……ねぇ、オカリン。このあと、かがりちゃんのこと任せていいかな？　これから学校で説明会があるんだ～。まゆしぃたち、どうしても出なくちゃいけなくて」
「すみません……」
高校2年生ともなると、進路とか、そんな時期なのだ。岡部のなかでは高校生のときの記憶さえ急速に風化しはじめていた。だいたい日頃、接する友人が入れ替わると、そうなってしまうものだ。
「心配しなくていい。かがりは、ちゃんと家まで送っていくから」
岡部は請け負った。
「それじゃあ、かがりちゃん。また明日ね」
「うん、ママ。また明日」
まゆりとるかを見送ると、ラボには岡部とかがりのふたりだけになった。
先日から、かがりの『ブラウン管工房』でのバイトは見あわせてもらっていた。とはいえ、なにかがあってはいけないので、昼間はラボに来てもらっていた。これで下の店にいる天王寺と鈴羽に護衛してもらえる。
「んー……」
「どうした？」
岡部はかがりを見かえした。

「んとね……あらためて考えると、こうしてオカリンさんと話してるのが、ふしぎだなーって」
「ふしぎ？　どうして？」
「だって私にとってのオカリンさんは、お話のなかの人だったんだもん」
「お話……」
「うん。ダルおじさんやママから聞く、お話のなかの人」
　2025年に死ぬ岡部とかがりは、未来でも面識はない。
「──ママはね、いっつもオカリンさんの話をしてたよ。オカリンがママを助けてくれた。オカリンがママの彦星様なんだよ、って」
　彦星……。
「あいつ未来になっても、そんなことを言っているのか」
　こんどは岡部が、こそばゆくなる番だった。
　岡部とまゆりの関係を決定づけた出来事──まゆりが小学生のときだ。大好きだった祖母の死を受けて、ショックのあまり、まゆりは心身喪失のようになってしまった。毎日、祖母の墓前で空に手をのばすばかりで、言葉さえ失ってしまったまゆりの心をつなぎとめるために、岡部は、はじめて鳳凰院凶真という人格をまとった。
　──まゆりは俺の人質だ。
　だから勝手に、どこかに行ってしまうことは許さない、と。岡部が中学生のときの話だ。

以来、まゆりは岡部である鳳凰院凶真を慕っていた。

いまでも——まゆりは、ふと前ぶれもなく空に手をのばす癖はなおっていない。

——昼でも、お星様はあるんだよ。

以前とは、手をのばした先はちがっているのかもしれない。あのときは亡き祖母の面影を探って。いまは……大切な人たちとのつながりをたしかめるため？　まゆりの心中はわからないし言葉にする必要もない。ただ、そんなまゆりの癖を、鳳凰院凶真は〈スターダスト・シェイクハンド〉と名づけた。意味は……たいした意味はない。

「——だからね。私もずーっと気になってたんだ。ママがそんなに大切に思ってるオカリンさんって、どんな人なんだろ、って。みんなが話題にする岡部倫太郎っていう人は、どんな人なんだろうって。もしかしたら……ちょっと憧れてたかも？」

かがりは、もじっとしてみせる。

「からかうのはよしてくれ」

「あははっ、オカリンさんったらテレちゃってる」

すっかり、かがりのいいようにやられていた。

外見は年上の女性に、おしゃまな10歳児のテンションでこられるのだ。とても岡部の手に負える相手ではなかった。

「あ、んとね……でも、そういう意味では牧瀬紅莉栖って人も、そうかな」

「紅莉栖が？」

β世界線の紅莉栖はラボとは無関係の人物のはずだ。至やまゆりとも直接の面識はない。知っているとすれば生前、岡部が話した……くらいしか考えられないが。

「牧瀬紅莉栖っていう人の名前も、ママやダルおじさんがよく口にしていたから。ずっと昔に亡くなっちゃったのに、そんなに影響力のある人って、どんな人だろうって」

「その……」岡部は、つい未来のことを訊いてしまった。「まゆりは、紅莉栖のことをなんて？」

「オカリンさんの大切な人だって」

「………！」

未来の自分、なにをバカ正直にしゃべっている……。

20年以上たっても、岡部は、まゆりにそんな思いを抱かせているのか。

「──そうだ……かがり。いまから買い物に行くんだが、よかったらいっしょに来ないか？」

「買い物？　いいの？」

「もちろんだ」

「やった。実はね、いろいろ欲しいものもあったんだ」

無用な外出は避けたほうがいいが、まだ昼日中だ。人通りの多いところを選んで歩けば大丈夫だろう。

「欲しいもの？」

「うん。日用品とかいろいろね」

「ルカ子が用意してくれてるんじゃないのか？」
「そうだけど、でもほら……るかくんだって男の子でしょ？　だから、いろいろ頼んじゃうのもわるいなって」
どれほど可憐（かれん）といっても、るかは男だ。知識がなかったり頼みづらいことはあるだろう。

12

秋葉原、中央通り。
「――人も多いし、お店もたくさんあるし。ここが、あの秋葉原とおなじ街だとは思えないな」
かがりは目を輝かせた。
ラボへ行き来する道すがら、歩きながら店を眺めたりはしていた。ただ、るかや鈴羽に遠慮して、ゆっくりショッピングなどはしたことがないという。
「未来の秋葉原は、どんなところなんだ？」
「ひと言でいうと、んとね……ガレキの山かな。秋葉原にかぎったことじゃないんだけど」
近い将来、第３次世界大戦が起きる。
かがりは戦争のもっとも激しい、大空襲後の日本しか知らない。ガレキの山ということは、空爆で駅前のＵＰＸビルやらも崩れ落ちてしまったのか。以前、鈴羽は放射能汚染という言葉を使っていた。どこかの

核施設で事故が起きたか、この東京で戦術核兵器が使用されたのかもしれない。
――それも、すべて俺のせい……。
岡部がもう一度、7月28日にもどれば……そこで上手くやれば、戦争が起こらない世界線になるのだろうか。
「!」
「あ、オカリンさん、もしかして自分のせいだ、なんて思っちゃってる?」
いいや、世界線の収束には逆らえない。β世界線にいるかぎり……。
ズバリ言いあてられて、岡部はドキリとした。
「その反応は図星だね。でも、その考えはダメ……バッテンなのだ」
「ばってん……」
「ママもダルおじさんも、誰もオカリンさんを責めてなんていなかったよ! だって、ママたちは、みんな信じてたから。オカリンさんならいつかやってくれるって」
すでに死んだ岡部に対して、いつかやってくれると期待し、未来の至たちはタイムマシンを完成させた。
そして、わが子たちを託した。
「んとね、そのシュタインズゲートだっけ? オカリンさんは、そこに世界を導いてくれるって」
まゆりや至は知っている。だから決して岡部を責めない。いまも、未来でも、死んだあとも。
「でも、かがりは……シュタインズゲートは嫌なんじゃなかったか?」

　未来が変わったらママと会えなくなる。だから、かがりは鈴羽の作戦を妨害して、逃げた。
「あのときは、そう思ってたよ。でも……まゆりママに会えたから」
かがりの心はつなぎとめられた。女子高生のまゆりは、未来の自分の期待に、しっかりと応えたわけだ。
みんな誰かを頼っていた。
　岡部だって、きっと死ぬときには至やまゆり、仲間たちを頼って、そして……。
――次は、俺の番ということか……。
　未来の岡部倫太郎は、ラボの仲間たちを介して、いまのこの自分になにを託したのか。
「すとっぷ、すとっぷ！　今日はそういうのはナシ！　せっかく外に出たんだから、もっと楽しい話しよ、ね？」
「ああ……」
　どうやら岡部は、だいぶ深刻な表情をしていたらしい。
　かがりが育ったのは辛い戦争の時代。なのに、こうして岡部のことを気遣ってくれる。心根は、とてもやさしい子なのだ。血はつながっていなくても彼女は、まちがいなく椎名まゆりの子だ。
「楽しい話か」
　いちいち、なにを話せばいいか考えてしまうようだから、岡部は気難しい印象なのだが。
「んとね……そうだな、ママの若いころの話を聞きたいな」
「まゆりの？」

「若いって言っても、いまでも若いんだけど。でも、もっと若いころの話。たとえば……〝人質〟の話とか?」
「まゆりはそんなことまで、きみに話したのか……」
　脇の下から足の裏まで、全身くすぐられた気分だ。
「私ね、オカリンさんの話をするときのママの顔、だーいすきだったの。とっても大切な宝箱をそーっと開けるみたいな、そんな顔っていうのかな?　その顔と、そのときの声と……それを思いだすだけで、すっごくあったかい気持ちになれるんだ」
　母親の口から語られたものだからこそ、かがりのなかでは岡部の存在が、やや美化されすぎてしまっている。
　彦星――人々が短冊に願い事を書く夜の、あの星に喩えられるとは。
「別にたいした話じゃない。まゆりが大好きだった祖母(ばあ)さんが亡くなって。ずっと悲しんでたあいつが、いまにも消えてしまいそうで……それで口から出た、痛い台詞(せりふ)だ……」
「まゆりは俺の人質だ、って?」
　第三者の口からそれを聞かされると、恥ずかしすぎて頭に布団をかぶりたくなる。
「若かったんだ。若さゆえのあやまちというやつさ」
「それでも、その言葉はママを救ってくれたんだよね?」
「……どうだろうな」

もし、あの出来事のせいで岡部がずっと──未来にわたってまゆりを束縛してしまったのだとしたら。とんでもないことを……してしまった。
「オカリンさん？」
「そんなことより腹が減らないか？　なにか食べに行こう」
「え……うん！」
　岡部はあてもなく歩きだした。
「なにか食べたいものあるか？」
「んとね……私は、なんでもいいかなっ」
「そういうのがいちばん困るんだ」
　岡部はデートでの対応力のなさを露呈した。
「だって、この時代の食べものってなんでも美味しいんだもん。ビックリするくらい」
　るかの母親は、おせち料理の見事さでわかるように、料理は上手なはずだ。
「未来じゃ、なにを食べてたんだ？」
「お芋とか、そういうのばっかりかなぁ」
　鈴羽の話だと、あとは糧食や支援物資の横流しなど、とにかく戦争末期と、その後の内戦の時代になるほど食生活は貧しくなった。
「あ、でも、ママが毎日ちがう味つけしてくれてたから」

「まゆりが……」岡部は意外だった。「まゆりの料理は、その……美味かったのか？」
「うんっ」
「そう……そうか……」
人間とは成長する生き物である。まゆりは由季に料理を教わっているが、その教えが生かされたのだ。
すばらしい。
「だから、私はなんでもいいよ」
というわけで岡部は、結局、行きつけの店にむかった。

＊

「――お帰りニャさいませ、ご主人様♪　あ、オカリン。それにかがりニャンも！」
『メイクイーン+ニャン^2』に入ると、オーナー兼メイドの留未穂（フェイリス）が出迎えた。
「今日は混んでるな」
店内に席待ちの列ができていた。
「そうなのニャ。今日からアニメとのタイアップキャンペーンがはじまったのニャ」
街中でも見かけたことがあるキャラクターの立て看板、等身大POPなどが店内に設置されていた。
「――おかげで大繁盛で満席なのニャ……30分くらい待ってもらったら、入れるようになるんニャけど」

「そういうことなら、また今度にするよ。な？」
「うん。もっとゆっくりできそうなときに出なおしてくるね」
「せっかく来てもらったのに、ゴメンニャ〜」

あちこちの店に寄ってみたが、ちょうど昼時ということもあって、どこも満席だった。
「すごいね。どこも人だらけ」
「まったくだ。わざわざ外で飯なんか食わずに、家で済ませればいいものを」
自分たちのことはさておき、岡部は文句を言った。
さて、どうしたものか。駅の反対側、ヨドバシカメラのあたりまで歩いてきてしまった。
「ラボで食べよっか」
かがりが提案した。
「言っとくが、俺は料理なんてできないぞ」
「私も私も〜♪」
「じゃあダメじゃないか……」
岡部は腕を組んだ。
「簡単なものでいいよ。ほら、お湯かけて食べるヌードル的なの」
「カップ麺か？　あんなものでいいのか？」

「んとね、未来だとね、工場がなくなっちゃって、なかなか手に入らなくなっちゃったんだ。ダルおじさんが、いっつも食べたい食べたいって言ってて」

コンビニでカップ麺を大量に買いこんだ岡部とかがりは、UPXビルにつながる陸橋をわたった。

「すっごいね。カップ麺って、あんなにいっぱい種類あるんだ」

「いまは飽食の時代だからな。コンビニなんかでは毎週のように新商品が出る」

買い置きしておけば、至が食べるだろう。

「そうなんだねー。ね、このなかの、どれを食べてもいいの？」

かがりは岡部が持ったコンビニ袋をのぞきこんだ。

「もちろん。好きなのを選んでくれ」

「それじゃ、どれにしようかなぁ。んとね、んとねー……」

唇に人差し指を当てて目を輝かせる。無邪気という破壊力だ。

「──私、これにする！　塩味の！」

「なんなら、ふたつでも3つでも食べてもいいぞ」

「ほんと⁉　あー……でも、食べすぎちゃうと太っちゃうしなー……」

表情が豊かで、見ていて飽きない。

しかし、食べすぎると太るなんていう痩せ願望はメディアが作りあげた価値観だ。戦中戦後の食糧難の時代であれば、食えるときに食っておけ、となりそうなものだが。

岡部はコンビニ袋から、プラスチック製のそれをとりだして、かがりにわたした。
「これって……」
「フォークだ。箸じゃ食べづらいんじゃないかと思ってな。おまえ用にしてラボに置いておけばいい」
「いいの？　もらっちゃって」
「別に、たいしたものじゃない」
牧瀬紅莉栖が欲しがっていたマイフォーク。
感傷ではない。仮に、かがりの脳に紅莉栖の記憶があったとして、彼女にマイフォークをプレゼントしても意味はない。ただ岡部がそうしたかっただけだ。
そういえば紅莉栖は、意外だがカップ麺が好きだった。
以前、るかの買い物袋にゲームやＤＶＤといっしょにカップ麺が大量に入っていたが……いまは、そのことを問い質（ただ）したりはしなかった。
「やった！　ありがとう！　実はね、私、お箸使うの苦手なんだ。ママからもいっつも注意されてて……あ、これ先っぽにうさぎさんがついてる！　かわいー！　えっへへ～、私専用のフォーク。私のもの、これでふたつめだ～」
ひとつめは……まゆりがくれたうーぱのキーホルダーか。
「──でも、なんでかな？　私、これ、ずっと欲しかったような気がする」
「…………」

「もしかして、これも紅莉栖さんの記憶なのかな？」
「さあ、どうだろうな……」
岡部は言葉を濁した。
かがりの脳に紅莉栖の記憶データが上書きされている。その仮説が正しければ、そういうことになる。もう岡部としては、やれることはやった。あとはかがりを見守りつつ、萌郁と真帆が、なにかしら新情報を入手してくれることを願うほかない。
「ねえオカリンさん。オカリンさんは紅莉栖さんのこと、好きだったんでしょ？」
「げほっ、げほっ！」
予想外の発言に、岡部は咽てしまった。
「大丈夫？」
「いきなり……なんで、そうなる？」
このとき岡部は完全に挙動不審者になってしまった。
「だって、大切な人っていうのは、そういうことでしょ？」
母親のなにげない言葉が、かがりには、そういうニュアンスで伝わっていたのか。
かがりは、まさに興味津々だ。マセた小学生が、年上の、大学生の恋愛に首をつっこみたがる……そのまんまのノリで。
「──で、どうなの？　好きだったの？」

「あいつとの出会いが俺の人生を大きく変えたのは、たしかだな」
岡部はもっともらしく、答えになっていない返事をした。
「あー、ごまかしたー。ずるーい」
「ごまかすとか言うな」
「でも……人生を変えるほどの大切な人、かぁ。なんか憧れるかも」
好意なんていう言葉が霞むほど。
未来も過去も、岡部と紅莉栖がかかわったことで大きく変わってしまった。
それは〝いま〟もゆれ動いている。
牧瀬紅莉栖は、まるで歴史と時間の扉をひらく鍵だ。過去、現在、未来の糸を紡ぎ、計り、切る運命の女神のようにふるまう。
あのとき紅莉栖を抱きしめても。
刹那の癒やしを得ることはできただろう。でも、それは別れの前戯にしかならなかった。岡部倫太郎と牧瀬紅莉栖をめぐる、大きな問題の解決にはならなかった。
見つめあうだけではたりない。好きというだけでは充ちたりない。
できることなら――
「ね、オカリンさんから見て、牧瀬紅莉栖さんってどんな人だったの？」
かがりはくいさがった。

紅莉栖との約束を守ることが、迷える岡部の命をかろうじてつないできた。そしていま岡部は考える。
――紅莉栖なら、どうする。
尊敬する彼女とともに生きていきたいのだ。
ともに、おなじ時間の矢の流れをめざしたい。岡部は、どこまでも貪欲に紅莉栖を求めつづけていたのだろう。彼女の、より深い部分を。だから病んだのかもしれない。約束にすがって、逃げるしかなかったのかもしれない。
「……気になるか？」
「自分の頭のなかにある記憶の持ち主のこと、もっと知りたいよ」
かがりとしては、もう紅莉栖の記憶が自分のなかにあることが前提になっている。そのことは、かがりの「感じかた」だから、嘘（うそ）とか本当とかいうことはない。
「俺が教えなくても、それこそ記憶として、きみの頭のなかにあるんじゃないのか？」
「それがね、自分で思いだそうとしても思いだせないんだよね。ときどき出てくるだけで、それも大抵、難しいことばっかり……だから、もっと人間的な部分っていうの？　そういうの教えてほしいなって」
誰かの記憶を共有しているのだから、その誰かのことを知りたいと思う。
「あいつは……牧瀬紅莉栖は、とにかく好奇心の強いやつだったよ。そのうえ頑固で、自分が正しいと思ったことは、誰に、なにを言われても決して曲げることはなかった」
「ふむふむ」

「強がりで、そのくせ寂しがり屋で」
紅莉栖と交わした会話が岡部の心によみがえる。ここで——駅前の陸橋で話したことも。
「——それに、怒ると怖かった」
「怖い？　どんなふうに」
「『開頭して海馬に電極ぶっ刺す！』なんて物騒なことを言われたりしたよ」
「ふぇ～」
声をあげると、かがりはなにを思ったのか小走りで数歩先に進み、ふりかえった。
——そんなこと言ってると、開頭して海馬に電極ぶっ刺すわよ！
目の前のかがりの姿に、紅莉栖のイメージが重なる。
「なーんて、こんな感じ？」
「…………」
「オカリンさん？」
「あ、いや……」
もし、かがりが紅莉栖の記憶を完全に再現できたとしたら？　椎名かがりという女性は、牧瀬紅莉栖そのものになるのだろうか。

紅莉栖の記憶データの最終更新は昨年3月で、そこに岡部についての記憶はないが……たとえば真帆やレスキネン教授など、近しい人に対する本音などがわかってしまうとしたら。プロフィールや事実だけでなく、その記憶に紐(ひも)付けられた、紅莉栖本人にしかわからない感情まで思いだせるとしたら。

　バカバカしい考えだ。

　だが、もし紅莉栖の記憶が……かがりの記憶を完全に上書きしてしまったとしたら。そして、かがりの肉体で、紅莉栖の記憶が完全に機能するとしたら。

　それは生身のアマデウス――かがり(クリス)。

「オカリンさん……」

　岡部が歩み寄ると、かがりが体を預けてきた。

　呼吸がとまる。

　胸元にふれたぬくもり、髪の匂い、やわらかい異性の感触。

　想起させる。

「紅莉栖……？」

「うぅっ」

　苦しむ声に、岡部は我にかえった。

「っ……どうした、かがり!?」

「頭……頭が……っ」

「頭が痛いのか？」
「う……あぁっ……ぁ…………！」
　腕のなかで、かがりは激しく身をよじった。
　かがりが体を預けてきたのは、立っていられないほどの痛みが襲ったからだった。
「いや……嫌だ……！　もう、あんなとこ帰りたくない……助けて……誰か……誰かここから出して！」
「どうしたんだ、かがり⁉」
「助けて、ママ！　どうして来てくれないの？　ママ！　ママぁ！」
　悪夢にうなされるように。
　かがりは怯(おび)えていた。なにかの幻覚を……母親に助けを求めていた。
「おちつけ……おちつくんだ、かがり！」
　暴れるかがりの腕を押さえつける。陸橋を行き交う人々が、なにごとかと心配そうにするが、そんなことを気にしている場合ではなかった。
「大丈夫、大丈夫だから」
「う、あぁ……はぁっ……あ、あぁ…………！」

かがりの肩を抱えてラボにもどると、岡部は彼女をソファーに寝かせた。

すぐに、かがりは眠ったままになった。時折、うわごとをくりかえしてうなされている。

──もう、あんなとこ帰りたくない……助けて……誰か……誰かここから出して！

──助けて、ママ！　どうして来てくれないの？　ママ！　ママぁ！

さっきの言葉は、なんだったのか。

紅莉栖の記憶……なのか。子供のころ親に、たとえば躾などで狭いところに閉じこめられたことがあったとか。

あるいは、かがりの空白の12年間のことなのか。かがりは鈴羽とはぐれてから、あまり幸せには暮らしていなかったとしたら……。ママ、というだけでは、かがりと紅莉栖、どちらの記憶なのか判断できなかった。

「オカリン！」

玄関がひらいて、まゆりとるかが帰ってきた。

学校の用事は済んだようなので、ＲＩＮＥで連絡して、すぐにラボにもどってもらった。

「かがりさん、大丈夫なんですか？」

「ああ、いまはよく眠っている」

「よかった～」

「ん………」

話し声が聞こえたのか、かがりがうっすらと目を開けた。

「あ……あれ？　ここ……どこ……？」
かがりはキョロキョロあたりを見まわし、怯えた表情になる。
「おちついて、ここはラボですよ」
るかが声をかける。
「ラ……ボ……？　日本……？」
「そうだよ。日本の秋葉原だよ」
まゆりがやさしく言った。
「日本……私、日本に……あ、そっか……私、交換留学で……そうだ講演の準備は……」
「様子が変です……！」
「留学って？　ねえ、オカリン……？」
るかとまゆりは困惑する。
留学、講演──それは牧瀬紅莉栖の記憶だ……！
「あれ？　論文！　論文は!?　パパに見てもらおうと思って、がんばって書いたんだけど！」
「おちつけ、かがり！　それはきみの記憶じゃない！」
岡部が言い聞かせると、かがりは一転してぼんやりした顔になった。
「オカリン……さん……」
「そうだ、おまえは椎名かがりだ、牧瀬紅莉栖じゃない」

「かがり……私は……椎名、かがり……う……あ、あぁっ…………！　あぁああああああああああああ
あ！」

　柳林神社。

　あのあとも、かがりはしばらく混乱していた。少しおちついたタイミングで、岡部はタクシーを呼んで彼女を柳林神社まで送り届けた。

「ルカ子……わるいが、かがりのことを頼む」

「はい」

　やはり、このまま自分たちだけで面倒を見るのは無理なのではないか、病院に連れていくべきではないのか。それを拒んでいるのは岡部のエゴなのではないか。タイムマシンのことが情報流出するリスクと、かがりの命、どちらが大切なのか……ずっとそのことを考えていた。

「今日は、まゆしぃもいっしょに泊まることにするね」

「そうしてもらえると助かる。なるべく、ふだんとおなじように接してやってくれ」

　まゆりママがいれば、かがりも安心できるだろう。

　なにかあれば、すぐに連絡を寄こすように告げて、岡部はラボにもどった。

夜。

ラボには鈴羽、そして真帆が呼ばれていた。

「かがり、酷いの？」

鈴羽がたずねた。あらかじめRINEでかがりの症状は伝えたが、それでも心配だった。

「いまはおちついているが、一時は、かなり混乱していた」

目覚めたかがりが、留学とか論文とか、ある時期の牧瀬紅莉栖の記憶に基づいた言動をしたことを話す。

「やっぱり紅莉栖の記憶……」

「もう、まちがいないだろう」

岡部は真帆に肯(うなず)いた。

いつ、どのように、なぜ……わからないままだが、かがりのなかには牧瀬紅莉栖の記憶がある。まず、かがりの症状にどうやって対処、治療するかだ。

専門家のチカラが必要だ。

という意味では、比屋定真帆は記憶とか脳のメカニズムについて、専門家だった。

問題は……真帆には、かがりが未来人であることを伝えていない。ラボのメンバーたちや、岡部とも以前の世界線ほどは交流がなかったはず。だが、それを気にしているときでもない。

「ねえ、あなたたち……かがりさんとはどうやって知りあったの？　漆原さんのところに来る前、彼女は、どこでなにをしていたのかしら」

「かがりは千葉の山中で倒れていたところを、助けられたんだ。意識をとりもどした時点で、それ以前の記憶はなかった」

鈴羽が説明する。

「うん……記憶喪失とは聞いていたけど。でも……子供のころの記憶はあるんでしょう？　鈴羽さんは彼女と知りあいだったのよね？　子供のころの彼女、つまりあなたはどこにいたのかしら」

「…………」

鈴羽は黙って、岡部のほうをうかがった。

かがりを治し、とりもどしたい。いまの鈴羽には、その気持ちが顔に表れている。

「おじさん、どうする？　比屋定さんに話しても？」

真帆は、科学者だ。

事実を話せば、かがりの記憶のこととは別にタイムマシンに興味を持つ。それをきっかけに研究をはじめてしまうかもしれない。それは、もっとも危惧してきたことだ。

かといって、かがりを誰ともわからない病院の医師に診せるわけにはいかない。
「かがりを救うためには、やむをえないか」
岡部は、ついに首を縦にふった。これは人命にかかわることだ。
鈴羽は真帆にむきあった。
「いまから話すことを知っているのは、ごく一部の人間しかいない。だから比屋定さんも決して、ほかの誰かに漏らさないで」
「なんなの急に……」
漏らせば、あなたもただでは済まない――戦士の殺気に等しい気迫を浴びせられて、真帆は気圧されてしまった。
「冗談に聞こえるかもしれないけど、冗談なんかじゃないんだ。約束できるか否か、答えはふたつにひとつだ」
「っ…………？」
真帆は途惑いの目を岡部にむけてきた。
だが、岡部の真剣な表情から、なにかを言わずとも感じとったのだろう。
「わかったわ……誰にも言わない。約束する」
肯く。その科学者の表情は信用できるはずだ。

「それじゃあ、まずは……さっきの質問。子供のころ、あたしとかがりがどこでなにをしていたか……あたしたちは第3次世界大戦が終わったあとの、いまだ各地で内戦がつづく戦時下の東京で暮らしていた。2036年のね」

「…………」

　鈴羽の言葉に、しばらく無言だった真帆の顔は、やがて紅潮していった。

　怒りで。

「からかわないで……！　人が真剣に訊いてるのに！」

「…………」

　鈴羽は無言。戦士の冷徹な目で相手を見据えている。

「比屋定さん……鈴羽が最初に忠告したはずだ。これは冗談でも作り話でもない。鈴羽とかがりは25年後の未来からやって来たんだ。タイムマシンで」

「タイムマシン？　そんな物が作れるわけが……」

「その理論の大本となったのが牧瀬紅莉栖だと言っても、か？」

「…………っ！」

　紅莉栖の名前を出したとたん、真帆の顔からは怒りが消えた。

　その代わりに――表情から読みとれたのは困惑、そして……興味。牧瀬紅莉栖のことは、比屋定真帆にとって最優先なのだ。

「わかった」彼女が知らないことは、特に。「聞くだけは聞くわ」――

＊

真帆に、ほぼ、すべてを話した。

岡部と紅莉栖との出会い、Dメール、世界線変動、ディストピアに至る世界、SERNのハッキングとタイムリープマシンの開発、まゆりの死、それらα世界線での事実とβ世界線への復帰のこと……。アトラクタフィールド理論、収束と〈リーディングシュタイナー〉。

鈴羽は2036年の状況と、戦災孤児だったかがりの境遇、〈ワルキューレ〉の計画のこと。

ただ、この世界線における牧瀬紅莉栖の死の真相――中鉢の行動と、タイムトラベルした岡部が、紅莉栖を刺してしまったことをのぞいて。

誰がどこまで知っているか。まゆりとるかに対して、これらを絶対に話さないこと。

「とりあえず……話を整理させて……」

長い沈黙のあと、真帆は口をひらいた。

「もちろん」

「つまり鈴羽さんとかがりさんは、岡部さんに、戦争が起きる未来を変えてもらうために、タイムマシンで2036年からやってきた、と。そう言うのね」

「そうだよ」
　鈴羽が肯く。真帆はソファーに身を沈めて、ため息をついた。
「岡部さんに、そんな大層なことができるとは思えないわ。たったひとりの人間に全人類の命運がかかっているなんて」
「俺だって無理だと思っている」
　岡部は正直に吐露した。
「とうてい信じられない話ではある。あるけど……」
　真帆は立ちあがった。
　話に出てきた『電話レンジ（仮）』が置いてあった開発室を眺め、下の『ブラウン管工房』にある大型ブラウン管テレビ、ヘッドセット、SERNの大型ハドロン粒子加速器（LHC）との専用回線……ラボのホワイトボードに模式図を描いていく。
「──でも、あなたの言ったその理論なら、たしかにタイムリープは可能かもしれない。それになにより、その理論の基を作ったのは紅莉栖なんでしょう？　だったら検証に値するわ」
　真帆にとって、紅莉栖は、
「だって、あのコは……天才だもの」
　小さく呟（つぶや）いた言葉には、尊敬と羨望と嫉妬、あらゆる感情が綯（な）い交（ま）ぜになっている。
　最優先の人というのは──心と思考のほとんどを独占し、行動、その人の未来すら支配してしまう。

記憶のデジタルデータ化は、アマデウス・プロジェクトに直結するものだ。真帆にとって検証すべきは、『電話レンジ(仮)』による過去へのデータ送信の再現性だろう。

「じゃあ、信じるんだな」

「その代わり……見せてほしいわね、そのタイムマシンを。乗ってきたっていうなら、あるんでしょ？　どこかに」

　真帆は、岡部と鈴羽を交互に見た。証拠を見せろ、と。

　鈴羽は認めた。

「……ある。すぐ近くにね」

「検証作業は必要だけど、とりあえず、あなたたちの話を信じることにする。だから、あなたたちも私に信じさせるよう協力して」

「わかった」

　鈴羽が許可するなら、岡部が口を挟むことはない。

　いまは、かがりの件で真帆の協力が必要だ。

「……話を、かがりの件にもどそう」岡部は仕切りなおした。「さっきも言ったように、タイムトラベルした彼女が鈴羽とはぐれたのは1998年、10歳のときで……　それ以降、先月になって見つかるまでの足取りはつかめていない。俺は……　そのあいだにかがりが、なんらかのカタチでアマデウスと接触したと考えている」

プロジェクトのシステム管理者だった真帆の知らないところで、つまり非正規の手順で、だ。

裏づけは、今日のかがりの言動だ。

留学、講演──かがりの口から出た紅莉栖の記憶の断片は、昨年春に来日する前に決まっていたであろうことばかりだった。留学後のことを連想させる言葉は、いまのところ、かがりの口からは発せられていない。

「レスキネン教授に確認したんだけど」真帆が言った。「紅莉栖の記憶データは大学のサーバーに凍結されたまま、誰もアクセスしていないはずだと言っていたわ。ただ、それが事実かどうかたしかめる権限は、私にはない。プロジェクトが凍結される前に、何者かがデータを持ちだしたことだって考えられるし……」

「持ちだせる人間は、アマデウスの研究に携わっていた人間だけなんじゃないか」

「外部からサーバーに侵入すれば、誰にだってできることよ」

誰でもと言うが、そこいらの人間には無理だ。それこそスーパーハッカーでもなければ。そしてデータが存在するのであれば、凍結後であっても……。

「──問題は、目的ね。岡部さんの仮説が正しいとして、なぜ、そんなことをする必要があったのか」

「単純に考えれば紅莉栖が必要だったからだな。天才の記憶……知識、紅莉栖しか知り得ない情報。プロジェクトが凍結されたのも、案外、犯人の仕業かもしれない」

「でも、それだけならアマデウスのクリスを利用すればいいわよね？　なにも赤の他人の脳に、紅莉栖の記憶を移植するなんて実験する必要は……」

「……実はな。以前の世界線では、正月にこのラボが襲撃されたんだ」
「？」
岡部の言葉に、真帆は驚いた。
「銃を持った外国人の連中だ。彼らは、かがりを誘拐しようとした」
プロジェクトの凍結、銃器を用いての襲撃。
そこまで強引な手段をもってして、かがりと紅莉栖の記憶データを利用しようとする理由は、なんだ。
そこがつながりさえすれば……。
「──もし」岡部は、どうしてもそこに考えが至る。「紅莉栖の記憶のなかに、タイムマシン理論の基礎があることを何者かが知ったとしたら……」
欲しがる者はいくらでもいる。そうして世界は、タイムマシン開発競争から第３次世界大戦へと転がり落ちていく。
「でも、紅莉栖がそのタイムリープ理論に行きついたのは、あなたの言う別の世界線なんでしょう？　去年の3月の時点の記憶データでは……」
真帆が疑問をぶつけた。
やはり、そこまで説明しなくてはならなかった。
「『中鉢論文』を知ってるか？」
「……中鉢？　それってロシアに亡命した？」

　アメリカでも多少はニュースになっていたようだ。真帆は、中鉢教授の亡命騒ぎを知っていた。
「そうだ」
「例のタイムマシン論文には、私も軽く目を通したけど……とても論文と言えるものではなかったわ」
「あれは劣化コピーだと俺は考えている。オリジナルが別に存在するんだ」
　岡部は断言する。
　中鉢教授の亡命そのものはニュースになってしまったので隠蔽できない。だからロシアは、あの論文の真の価値を隠匿するために、ごていねいにも笑いの種になるような偽物（フェイク）を捏造（ねつぞう）して公開した。
「いったいなんの話をしているの……？　中鉢教授がなんだというの？」
「ドクター中鉢の本名は牧瀬章一。紅莉栖の、実の父だ」
「！」
　思いかえす。
　２０１０年７月28日――岡部は目撃した。ラジ館の倉庫で、紅莉栖は中鉢と話していた。
――私も考えてみたの。タイムマシンは作れるのかどうか。読んで、パパの意見を聞かせてほしい。
――わるくない内容だ。
――本当？　この論文はパパと共同署名でもいいと私は思って……。
――学会には出すな。これは私が預かっておく。

牧瀬夫妻は別居状態で、紅莉栖は母親とともにアメリカに渡った。
でも紅莉栖は家族を愛していた。もちろん父親も。
「そういえば……」真帆が思いだす。「紅莉栖が、日本に行く前に言ってたの。父親に会うって。物理学者の父親が新しい理論の発表会をするから、その招待状が来たって……」
学会ではなく、ラジ館の小さな会議室でタイムマシン理論を発表するとは、さすがに言っていなかったようだ。
ひさしぶりに再会する父親との話題作りのために、紅莉栖は科学者らしく講演のテーマに沿ったタイムマシン論文を書いて、面会に持参した。
どんな気持ちだったのだろう、紅莉栖は。
だが、その娘からの贈り物を中鉢は奪った。
その後、ロシアに亡命した彼が、自分の名で発表したのが『中鉢論文』と呼ばれるものだ。論文の評価は、専門家の井崎准教授が言うように、疑似科学フリークがネタにするにはおあつらえなトンデモ論文と言っていいひどいものだった。
「日本のマスコミは徹底的に中鉢をバッシングした。それも、俺は……ロシアが裏で工作したんだと思っている」
『中鉢論文』はインチキだと印象操作するためだ。

「紅莉栖が書いた論文が、陳腐なものであるはずがないわ」
　真帆は口をキッとむすんだ。
「……第3次世界大戦が起きたきっかけは、EUとロシアによるタイムマシン開発競争の過熱なんだ。そこにアメリカまで横やりをいれて、収拾がつかなくなった」
　鈴羽が言ったように、まさに時代は歴史どおりに動きはじめている。
　以前の世界線でラボを襲った連中は、天王寺によると西側の軍関係者かもしれないとのことだった。
「じゃあ、その『中鉢論文』の真の価値を知った何者かが、紅莉栖の記憶からタイムマシンに関する理論をとりだそうとしてるってこと……？」
　どこかの軍が、紅莉栖のタイムマシン理論を欲している。EUか、アメリカか……もちろんロシアも黙って見ているはずはない。
「…………！　そうだ、紅莉栖だからこそだ」
「岡部さん……？」
　真帆と鈴羽が、声をあげた岡部を見る。
「比屋定さん……アマデウスのクリスは人格を持っていたよな。話したくないこと、話してはならないことを、あのAIは決してしゃべらない」
「ええ、そうよ」
「だが……生身の人間なら？　どうだ」

拷問、薬物や脅迫などによって、自白させることはできるだろう。

「岡部さん……まさか、待って……そんなケースは――」

――自白を強要するために、その人物の記憶データを第三者の脳にダウンロードする。

反論しようとした真帆だったが、その可能性とアマデウス・システムが抱える欠陥(リスク)に直面して、言葉が出なくなってしまった。

「……可能なんだろう?」

「ええ、そうね……可能よ。もともとアマデウスは、記憶データを脳に移植するために作られたんだし」

アルツハイマー治療など医療分野への応用について、真帆は以前のセミナーと同様の説明をした。

「――紅莉栖の考えだしたそのタイムリープマシンだって、記憶のデータ化についてはおなじことよね」

「自分の頭のなかに、自分の記憶を移植する……という目的で作られたものだがな」

それすら危険だと紅莉栖は言っていた。だからタイムリープマシンには、過去に跳べるのは48時間以内という制約がつけられていた。

「比屋定さんは、他人の脳に、記憶を移植するとどうなると考える?」

「単純に、OSのちがうPCのハードディスクに、別のデータをコピー……というわけにはいかないと思う。

そもそも人間の脳のキャパシティがどれくらいあるのかすら、わかっていないの。脳の容量的なことだけを

言えば、20歳前後の女性ふたり分の記憶くらいは余裕で保存できるという研究データはあるけど……」
3・24テラバイト、それがデジタル化された人ひとりの記憶データの容量だという。
「――だけど問題は、それ以外の部分よ。岡部さんの言うとおり、自分自身の頭に記憶をダウンロードすることすら、まだ実用段階には至っていない。それなのに他人の記憶を、となると、いつ齟齬(そご)を起こしてもおかしくないわ。そして実際にいま、そのエラーは起きつつある」
かがりの症状そのものだった。
他人の記憶をダウンロードして脳に上書きすることはできても、被験者が、そのデータを意図的に読みだすことができなければ、脳機能に混乱をきたし、部分的な記憶喪失になってしまうこともある。
かがりは、そうした問題を解決するための人体実験に使われた……？　まさか動物や、ほかの人間、まっさらな赤ん坊の脳などにまで――そんな恐ろしい想像までしてしまった。
まともな人間のやることではない。
しかし相手は、50億人以上を殺す世界大戦を望むような勢力……かもしれないのだ。
「このまま放っておくと、かがりはどうなる？　ひょっとして牧瀬紅莉栖になってしまうのか？」
鈴羽が率直な質問を真帆にぶつけた。
「記憶と人格は別ものよ。脳のなかで記憶をあつかうのは、海馬と大脳皮質。一方で人格は前頭前野の働きによって形成されている。それらの働きは、お互い密接につながっている部分も大きい。脳の働きは、部位によって役割は決まっているけど、それぞれが完全に独立したものとも言いきれない。記憶によって人格

が形成されている部分も大きい。ふたつの記憶が混在することで、脳に対する負担もかなり大きくなってるはず」

　つまり、

「――このまま放っておいた場合、最悪、かがりさんの人格は崩壊を」

「くっ……！」

　鈴羽は膝に拳を打ちつけた。

　責任を感じているのだ。かがりを時間の迷子にしてしまったばかりか、このままでは、かがりの存在がタイムマシン開発競争――第３次世界大戦の発端になりかねない。

「比屋定さん、それを防ぐ手立てはあると思うか？」

「かがりさんの頭のなかから、紅莉栖の記憶だけをとりのぞくしかないでしょうね」

「……できそうか？」

「脳のデータが解析できれば、あるいは……でも、できるようになるとして何年先か……」

　OSのちがうPCのハードディスクにデータをコピー、そのコピーした部分だけをあとから削除……といった簡単な構造ではない。OSとは、人格とはなにかというところで、脳科学は未だに手探りの段階だ。データを丸ごと上書きすることはできても、部分的に消すことは……。

「ひとつ手があるとするなら、かがりさん自身の記憶を、丸ごと上書きすることかしら」

　真帆が思いつきのように言った。

「かがり自身の記憶を……？」

「そもそも、かがりさんの記憶を操作した人間は……　かがりさん自身の記憶を残すつもりはなかったと思うの」

　真帆の言うとおりで、ふたりの記憶をひとつの脳のなかに入れるなんて、素人が考えても不具合が起きることを期待するようなものだ。

　その何者かの目的は、生身の脳と肉体に、牧瀬紅莉栖の記憶データを移すことだったはず。被験者の人格などはもとの記憶ごと消してしまって――それっぽい表現をすれば、別の肉体に転生した牧瀬紅莉栖を作ろうとしていたはずだ。そうしてからタイムマシン論文について尋問し、場合によっては自白を強要する。

　だから、かがりに対する記憶移植実験は、失敗だったのではないか。

「だったら、もう一度かがりさん本人の記憶を、きちんとした装置で脳に上書きしてあげれば、あるいは、もとどおりにできるかもしれない」

「しかし、そのためには、かがりの記憶データが無いと……」

　アマデウス・システムで、あらかじめ、かがりの記憶がデジタルデータ化されていなければならない。

「バックアップがとってあることを期待するしかないわね」

　もし、かがりの記憶データが残っていれば、その時点のかがりの状態にもどすことはできるはずだ。ＰＣでいえばクラッシュした際、あらかじめ外部ストレージに作成しておいた復旧ポイントのデータをもとに、

リカバリーするようなものだ。
　現象としてはタイムリープマシンと似ていて、過去のある時点から未来（現在）にリープすると考えればいい。跳ばしてしまった期間のことは、〈リーディングシュタイナー〉の空白のように忘れてしまうかもしれないが、喪失した12年間の記憶はとりもどせるはずだ。そちらのほうが、はるかに状態としてはよいだろう。
「装置は……」
「ないなら作ればいいわ。紅莉栖は作れたんでしょう？」
「？　ああ……そうか」
　タイムリープマシンの応用なら、岡部にも協力できた。
「だったら私にも作れる。ううん、作ってみせる」
　紅莉栖にできたのなら──真帆にとって最優先すべきタスクだった。
「──問題は、かがりさんの記憶データがどこにあるか、ね。これぱっかりは、なんとかしてつきとめるしか方法がないわ」
　結局は、敵の正体だ。
　情報が少なすぎた。手掛かりは西側の軍隊らしいということだけで、それも根拠はフォネティックコードの発音のみ。鍵を握るのはライダースーツの女だが……。
「なにか、いい方法でも思いついた？」

「いや……」
鈴羽に声をかけられて、岡部は首をふる。
阿万音由季。
その名前を、岡部は思考から追い払った。阿万音由季は〈ワルキューレ〉の戦士として戦い、鈴羽を庇(かば)って死んだという。敵であるはずがない、そんなはずは……。

和光にもどる電車のなかで、比屋定真帆は興奮を抑えきれないでいた。
「信じられない……でも本当なのよね……！」
つい、小さく声が漏れてしまう。
２０３６年から来たタイムトラベラー。
別の世界で、タイムリープをくりかえした観測者。
科学者が１００人いれば、１００人が否定的になるだろう話だ。でも、そのシナリオの礎になっているのが牧瀬紅莉栖の理論だと言われれば、真帆には検証するだけの価値があった。
彼女なら——あの天才なら可能にしてしまう。
紅莉栖とは真帆にとって、あらゆる未知の象徴であり可能性そのもの。

なによりも真帆は目にしたのだ。ラボを出て秋葉原駅にむかう途中、鈴羽に案内された、あのラジ館の屋上で。

タイムマシンを。

詳しく調べることは許されなかったが、一見して、現代のテクノロジーで作られたものでないことはわかった。容量がケタちがいのバッテリーとか量子コンピューターとか、オーバーテクノロジーが詰めこまれているという。機体を完成させたのは未来の橋田至だとも。あの自称HENTAI紳士が、鈴羽の兄ではなく父親だったと聞いて二度、驚いた。

本当なら明日から――徹夜してでも、あの機体を解析して、おなじものを作りたい。

けれども、その前に、真帆にはやらなければならないことがある。

紅莉栖が作ったというタイムリープマシンを再現――その改良版を作ることだ。

別の世界線で、作製現場に立ち会っている岡部が助言をしてくれる。彼は専門家ではないが、マシンの構造は理解しているし、なにより実際に使用していた。そのとき紅莉栖が秋葉原で買い集めた材料なども、おおざっぱには覚えていた。

しばらくは秋葉原のラボに入り浸ることになるだろう。

真帆は準備のため、いったん和光の仕事場にもどった。必要なツールやスケジュールの調整をしなくてはならない。奇妙な興奮――未知の紅莉栖に挑もうとする真帆の心は、滾っていたのだ。

深夜、すでに日付が変わろうとしている。

脳科学総合研究機構のオフィスの窓には、この時間でも、まだ明かりが灯っていた。

＊

セキュリティゲートを通ると、レスキネン、レイエスの両教授が青ざめた顔で待っていた。
「マホ！」
「え……？　なに、これ……」
真帆は声を失った。
オフィスには、あきらかに荒らされた形跡があった。
デスクが並んでいるだけの閑散としたオフィスだったが、真帆とレスキネン教授の机まわりだけが執拗（しつよう）に物色されていた。鍵のかかる抽出が壊されて、中身が床にぶちまけられている。
「何者かが侵入したらしい」
「泥棒ってことですか……！」
「ワタシが来たときには、この状態だったの。もしかしたら企業スパイの類かもしれないわね」
レイエス教授は眉をひそめた。
「スパイ……？　こんな、なにもないところで……」

真帆たちは研究会がらみで来日した。その拠点として、この仮オフィスを間借りしている。ここにあるのは発表済みの、すでに公にしたデータだけだ。こんな研究拠点でもないオフィスを家捜ししたところで、たいしたものはない。近くにある理化学研究所とかを狙うべきではないか。さらに言えば、この仮オフィスの存在を知っている人間なんて数えるほどしかいないのに。

真帆はデスクまわりを片づけた。盗（と）られた物は……なかった。

「教授たちは？」

「こちらも、なにも盗まれてはいないようだわ」

「PCのなかもたしかめてみたが、第三者にアクセスされた形跡は見られない」

真帆もたしかめたが、何者かがログインした形跡はなかった。

「本当になにも盗られてないかい？」

「はい、教授」

「そういえばマホ……きみのノートPCはどうした？　もしかして盗まれたんじゃ」

「あれならホテルに置いてあるから、大丈夫です」

「そうか。ならいいんだが……」

レスキネン教授は肯（うなず）いた。

「どうする？　警察に連絡する？」

レイエス教授が言った。

「なにも盗られていないなら、ことを荒立てる必要はないのかもしれないなあ……」
「そうね……少し様子を見ましょうか」
　ふたりの教授は腕を組んで思案顔だ。
　真帆は、そんないいかげんな対応でいいのか……と思った。でも、警察沙汰が面倒なのは理解できた。なによりも、このふたりは自分の研究以外のことに時間をとられるのが嫌なのだ。そして、それは真帆もおなじだった。
「あの、教授！　実は、お願いがあるんです」――

　レスキネン教授は、あっさり真帆の長期休暇を認めてくれた。正月のあいだもオフィスに通って、残務処理をしていた甲斐（かい）があったものだ。これでラボでの作業に専念できそうだ。
　ホテルの部屋にもどった真帆は、ゴミが散乱した汚部屋で荷物をひっくりかえした。しばらくラボに寝泊まりするので、着替えを持っていくこと。大きなボストンバッグを担ぐと、真帆はもうひとつバッグを手にとった。
　ノートPCとポータブルハードディスク。

形見分けでもらった紅莉栖の遺品だ。ロックがかかっており、何度もパスワードの解析を試みていたが成功していない。

「そうだ、たしか彼……」

真帆は、日本でできた新しい知人のひとりを思い浮かべた。

オフィス荒らしの件もあったし、ホテルに置いていくのはぶっそうだった。作業の役に立つかもしれない。

──もしかしたら、これも亡き紅莉栖の意思なのかな。

そんなふうに考えそうになって、真帆は頭をふった。

死と生は0と1。どちらかでしかない。死んだあと、この世に介在する意思などない。

存在するとすれば、それは真帆の脳のなかにだけあるのだ。

断章　断片化のエクスシア（３）

２０１０年８月。

中鉢教授こと牧瀬（まきせ）章一の亡命によって、前代未聞のタイムマシン論文がロシアの手にわたった。公表された『中鉢論文』は、世界中の科学者が笑いものにするようなトンデモ学説だった。

しかし事実はちがった。『中鉢論文』は盗難されたもので、オリジナルの論文を書いたのは牧瀬紅莉（くり）栖（す）——天才と名高い18歳の日本人少女、殺人事件の被害者だった。中鉢は去る7月28日、秋葉原のラジ館において彼女を殺し、論文を奪って逃走、亡命した……と推測された。この件で中鉢は指名手配もされていない。

２０１０年11月までに、アメリカ合衆国政府および国防総省は、『中鉢論文』が真のタイムマシン理論としての可能性を有していると評価するに至った。

牧瀬紅莉栖は、中鉢教授の実の娘。

この事実がなければ、『中鉢論文』の正当な評価は少なくともずいぶん遅れていたはずだ。ロシアが公表している論文の内容はダミーではないのか。それこそ、日本ではトンデモ科学者枠のコメンテーターとしてテレビ出演をしていた、中鉢本人が書いたようなフェイクなのではないか。

〝影のCIA〟と称された軍事シンクタンクである〝ストラトフォー〟は、これらすべてを、合衆国政府よりも少しずつ先まわりして把握していた。

「――ただ、これだけでは事実と推測、データを集めたにすぎない」

ストラトフォーは組織として考える。

データを収集し、解析し、それらから価値あるストーリーを導きだしたとき、はじめて彼らのあつかうモノは情報(インテリジェンス)となる。

端的には、売り物になるのだ。それらの情報を誰に、幾らで、どの程度まで売るか。そのさじ加減によって、ストラトフォーは世界のパワーバランスすら調整することができる。

――情報とは。

――それを正しく使える者が、正しく管理し、正しいタイミングで、正しい場所へ提供すべきである。

それがストラトフォーの企業理念だ。彼らは選民思想者だった。

「――でも、のんびりとはしていられなくなった。ロシアが気づいた」

「うん」

「ノートPCとハードディスクの件は？」

「形見分けの件は最近まで、把握していなかったんだ。マキセ邸への火付け強盗は空振りに終わったようだが……」

「まさか米国内で、ロシアがあれほどおおっぴらに動くなんて。つまり『ナカバチ・ペーパー』は本物だということ」

「クリスのタイムマシン理論がね」

「カガリを」声を荒らげる。「シイナ・カガリを回収する、すぐに！」

命令。

「それについては何度も説明したはず……」

椎名（しいな）かがりの脳に、牧瀬紅莉栖の記憶データをダウンロードした。

目的は、紅莉栖の記憶にあるはずのタイムマシン理論――『中鉢論文』の原本を得ること。

アマデウス・システムは、その特殊性ゆえに人工知能のクリスに「聞けば答えてくれる」わけではなかった。めんどうくさいシステムだった。たとえ紅莉栖の上司の命令であっても、彼女の思想に反することには抵抗し黙秘するだろう。そしてAIであるからには、肉体的な拷問、自白剤などは無意味だった。記憶データは純粋にサンプリングされたデジタルデータの素材であり、それそのものを変換、言語化して解析することもできない。

だからストラトフォーは考えた。彼らが押さえている紅莉栖の記憶データ（２０１０／３）を、いかにして解析するか。

「記憶データをほかの人間に移植して、その人間から聞きだす……そのプラン自体に異論はない」

人体実験に、類人猿を使おうが、10年以上監禁していた身元不明の女性などを使おうが。

「来日してから、ずっと、この実験にかかりきりだった。ありもしない会合をでっちあげて」

「そして失敗した……モルモットに逃げられるとか」

「ボンクラの日本人スタッフと肥満気味の守衛……でも、それも結果的には興味深い方向に転がったじゃないか」

「気楽でいいわね、学者は」

「あのまま施設のベッドで拘束していても、カガリには、ほかの被験者同様、好ましい変化は見られなかったはずだよ」

「どうだか……」

「カガリの逃げた先は追跡（トレース）していた。施設の近くにある寺から、秋葉原の神社に女性が預けられたことは把握していた。それが脱走したカガリで……そして、あの大学生と接触した」

「オカベ・リンタロ」

「彼はクリスが日本にいたときの親しい友人だったらしい。そしてマホとも知りあいになっていた。偶然というなら、こんなドラマチックなシチュエーション、あると思うかい？」

「…………」

「まさに奇遇（サプライズ）──カガリの脳のなかに上書きされたクリスの記憶に、きっとよい刺激を与えているはずだ。だからこそ彼らをあえて放置して、監視にとどめている。それでもきみはカガリを回収するというのかい？」

「そう」
「拉致してでも？　理由は」
「言ったはず……！　ロシアが介入してきた。最初はアメリカのマキセ邸、そして和光のオフィス……狙いは、いまのところ遺品のノートPCとハードディスクだけど。いつアマデウス・システムとクリスの記憶データの存在に気づくともかぎらない。いいえ、もう気づいているかも」
「アマデウス・プロジェクトは凍結した。アマデウスのデータはストラトフォーのサーバーに移している。安全だ」
「……………ッ！　話にならない。ロシアにとってはノートPCも記憶データも、かならずしも入手しなくてはならないものではない。それが利用されるくらいなら……破壊すればいい」
「ロシアは、すでに『ナカバチ・ペーパー』を手に入れているから、そうなるね」
「わかっているなら……！」
「とにかく……再試をしても、カガリへの記憶移植実験が成功するかどうかはわからない。であれば、このまま泳がせて、まだ読みだせないでいる、カガリのなかのクリスの記憶に働きかけたほうがいいんじゃないかな。これは科学者としての意見だ」
「我々が、あのラボを襲撃してカガリを回収すると言ったら？」
「拒否する」
「民間企業にそんな権限はない。勝手にやるわよ……？」

「そんなことをすれば、我々はロシアと取引しますよ。記憶データはコピーすればいいのだから。SERNや中国にも接触しましょうか……？　全員がそれを所有していれば、その情報に、たいした価値はなくなる」

「あなた……国家のために働こうという気はないの？」

「それが我々の利益になるのであれば、よろこんで」

ダン、と、激しくテーブルが叩かれた。

4章　二律背反のデュアル・β・後

STEINS;GATE 0

1

2011／1／11

椎名かがりに、牧瀬紅莉栖の記憶をダウンロードしたのは何者か。
なんの手掛かりもないまま、また数日がすぎた。
阿万音鈴羽は自分なりに調査をしていて、至には連絡を入れているようだが、ラボにはもどっていなかった。
桐生萌郁も調査をつづけていたが、続報はない。SERNのラウンダーである彼女が、どこまで正直に行動しているかはともかく――かがりとアマデウスをめぐる陰謀の元凶は、超大国レベルの相手かもしれな

い。そんな不安が、岡部倫太郎(おかべりんたろう)の心のなかで〝敵〟を大きく感じさせていた。
　ラボの襲撃事件は未だに起きていない。
　ただ、敵の目的がかがりの誘拐であるなら、事態はいずれそこへと収束する。となると、あとは手段の問題で、あのライダースーツの女に代表される敵は、別の動きをしてくるかもしれない。
　かがりは〝敵〟にとって、なにかしら、かがりでなくてはならない理由があるのだ。
　彼女が記憶移植の被験体――使い捨てのモルモットであるだけなら、情報秘匿のために、誘拐ではなく始末すればいいだけの話だ。
　たとえば、かがり以外の被験者はもっとひどいことになっていて、話をするどころではないとか……。
　敵の正体もわからないままだったが、岡部倫太郎は最善をつくすことを決めた。
　まさに、できることをする。
　その〝時〟が来たときのために準備を怠らず進める。「人事を尽くして天命を待つ」と。
　オペレーションなんたら……とか、以前の鳳凰院凶真(ほうおういんきょうま)であれば命名するところだ。この作戦の目的は過去を改変することではない。だから岡部は迷いなく集中できた。そして、この静かな計画に関与する仲間たち――橋田(はしだ)至と比屋定真帆(ひやじょうまほ)、そして、椎名かがりは協力を惜しまなかった。
「――すみません真帆先輩、私のために」
「ううん……あと少しでできそうだから。それに、これは私のためでもあるんだし」

ラボの開発室から、ふらふらとした足どりで出てきた真帆はソファーに身を沈めた。

目の下には隈（くま）ができている。ここ数日、真帆は寝る間も惜しんで装置の開発にあたっていた。

「それにしても携帯電話を使うだなんて……ふつう考えないわ。考えついたとしても実行に移そうなんて思わない」

「ケータイは話すとき、本体をこめかみあたりに近づける必要がありますからね。こめかみ周辺には大脳前頭葉と大脳側頭葉があります。側頭葉の海馬傍回が記憶を貯蓄する場所だと考えると、妥当な判断かと」

「問題は、どうやって記憶を圧縮させるか、よね」

3・24テラバイトものデータを、そのまま携帯電話回線で送信することは、リスクがあるだろう。

「――それについては目下、僕が、毎日徹夜でがんばっているわけだが」

「すまないな、ダル」

PCとお見合いしている親友に、岡部は感謝の心しかない。

記憶データの圧縮には、SERNの大型ハドロン粒子加速器（LHC）を拝借しなくてはならなかった。

「しかもハッキングが、ここからだって絶対にバレないようになんて言うから大変だっつーの。ほかのバイトだってあるのにさ」

このことで岡部は、もう、禿（は）げるほど悩んだ。

計画がSERNに発覚すれば、またα世界線の悲劇がくりかえされる。天王寺(てんのうじ)と萌郁は、指令が下ったとたん冷徹なラウンダーとして敵にまわるのだ。
だが、SERNがラボに目をつけた発端は、過去に送られたDメールの発覚だった。
『電話レンジ(仮)』は今回、製作中の機材のシステム上は必要としない。そもそも過去にデータを送るわけではないのだから通信傍受網(エシュロン)に捕捉されることはないだろう。必要なやりとりは、すべて至が制作したSNS—RINE上でおこなっている。SERNのハッキングに必要になるIBN5100は、鈴羽がタイムマシンに保管していた。
条件は、思った以上に揃(そろ)っていた。
「——にしてもさオカリン。彼女……ほんと別人みたいなんですけど」
「ああ……」
至の耳打ちに、岡部は小さく肯(うなず)いた。
ここ数日で、かがりは紅莉栖の記憶による侵食が進んでいた。
ラボに泊まりこんでいる真帆と、よく専門的な議論を交わしていた。真帆への呼び名も〝先輩〟で安定してしまった。
真帆も、最初こそ違和感があったようだが、そのうち慣れてしまった。逆に、かがりのなかの紅莉栖の記憶から、装置の作製について助言を求めるように誘導している節さえある。

「こんなラボでタイムリープマシンを作っていたなんて、実際にタイムマシンを目にしたいまでも信じられないわ」
　真帆はかがりに言った。
「でも、人間の記憶をまるごとデータ化して、飛ばすなんて発想はすごいですよね。さすがは真帆先輩」
「その言葉、そっくりそのまま、あなたにかえしてあげるわ」
「はい？」
「あなたは天才で、所詮、私はサリエリだったたってことよ」
　それは真帆の本音だったのだろうか。
　モーツァルトとサリエリ、『アマデウス』……。
　サリエリという人物は、ある時代のハプスブルグ＝オーストリアでもっとも成功した音楽家ではあったが、天才モーツァルトとの比較において歴史的な評価は受けられず、埋もれてしまった人物だ。
　真帆も、まさか紅莉栖本人にむかって、そんな自虐的な皮肉は言うまい。亡き後輩の記憶を持った別人という常識外の相手に対して、寝不足で作業に集中するあまりテンションもあがって、つい口が滑ってしまったのか。
　でも、ふたりの会話を聞いていると、岡部はヴィクトル・コンドリア大学での真帆と紅莉栖の日常が、目に浮かぶのだった。
「なぁ、かがり」

岡部は会話に割りこもうとした。
「――そうだ！　サリエリで思いだしましたけど、アマデウス・プロジェクトはどうなってるんですか？」
「残念ながら凍結されたわ」
「凍結……？　どうして！　レスキネン教授が決めたんですか」
「私にもわからないわ。教授は、もっと上からの指示だって言ってたけど」
真帆は、かがりに対して紅莉栖に接するように話し、そのことに抵抗もなくなっていた。
「そんなぁ……せっかく順調だったのに」
「なあ、紅莉栖」
「はい？」
紅莉栖、と岡部が呼びかけると、やっと、かがりは反応した。
「…………」
「あ……あれ？　私、いま……」
応じたあとで、かがりは途惑いの反応をかえした。
「きみは、かがり……椎名かがりだよな？」
「椎名……かがり……」不安からか、両手で自分を抱きしめる。「そう……私は椎名かがり……私は、でも、それじゃあ……これは……この頭のなかにある記憶は、なに？」
「それは牧瀬紅莉栖の記憶だ。きみの記憶じゃない」

「そんなこと言われても……わかんないよっ！」
　かがりは癇癪を起こした。
「――だって私にとっては私の記憶でしかないんだもん！　私のなかにある、まゆりママたちとの記憶も、子供のころのパパとの記憶も、アメリカの大学での出来事も、ぜんぶ私のなかにあるんだもん！　どれが本当でどれが嘘かなんて、私……わかんない、よ……！」
　声は、やがて嗚咽に。
　かがりにしてみれば、ぜんぶが本当のこと。脳が記憶していること。
　嘘であるはずがない。
　そもそも嘘とはなにか。真実とは。事実とは。現実とは。
　たしかなことは……これは人間がそうだと信じていたものを、根底からゆるがす事象であること。
　自分の心をしっかり持て――そんな精神論の出番はない。
　タイムリープマシンを完成させたとき、紅莉栖はこうも言っていたはずだ。
――別の人の頭のなかに、記憶を送りこむことは絶対にやってはならない。人格の崩壊を起こす。
　もしも……もしも、だ。
　このままにしておけば、どうなる？

かがりの記憶がなくなり——思いだせなくなり、牧瀬紅莉栖の記憶だけが残ったら。
そうなったとき、岡部の目の前にいる彼女は何者だ。
椎名かがりか？　牧瀬紅莉栖か？
もし、それが紅莉栖であったなら——岡部の脳が、そう認めてしまえば。
考えてはいけない。
けれども、そう思えば思うほど、悪魔じみた考えが頭に浮かんで、誘惑を拒むことで精一杯になる。
——私のこと覚えてて……くれる？
——私のことは忘れなさい。
岡部にとって牧瀬紅莉栖とは……あの瞬間、好きという感情をたしかめた、たしかめあった……あの記憶を共有する相手であるはず。
でも……好きだからこそ岡部は紅莉栖とともに生きたい。生きてゆきたい。ぬくもりを感じたい。未熟な肉に宿ってでも、ともに未来を見つめたい。それは欲なのか。
「ねぇ……私、どうしたらいいの？　助けて……ママ……パパ……」
かがりは頭を抱えた。
こうした発作も、ここ数日は、よくあることになっていた。
とくに父親という存在——紅莉栖の中鉢への想いが、戦災孤児であるかがりの充たされない部分を浸食しているのかもしれない。

まゆりママが、ここにいてくれたらよかったが。あいにく、もう学校がはじまってしまった。
まゆりも、るかも、かがりを心配して、なにかあればすぐ連絡するとは言っていた。でも、だからといって高校生に負担をかけすぎるわけにはいかなかった。
「かがりたん。ちょっと気分転換に散歩でもしてきたらどう？」
至が言った。
「そうね。人間、じっとしてるとよけいなこと考えちゃうものよ。少しくらい身体動かしたほうがいいかもしれないわね」
「……うん」
「というわけで、オカリン。かがりたんを頼んだ」
ふたりには仕事がある。そのほかの雑務と患者のケアは、岡部の役目だ。

2

秋葉原、中央通り。
岡部とかがりは並んで歩く。傍から見れば、年上のお姉さんをなぜか引率する、無精髭(ひげ)のさえない大学生といった感じか。
外の空気を吸ったおかげか、かがりは少しおちついた。

「どこか行きたいところ、あるかな？」
「……どこでもいいの？」
「ああ。きみの行きたいところでいい」
「じゃあ、紅莉栖さんと行ったところに連れていってほしい」
これには岡部のほうが途惑った。
「…………え？」
「オカリンさんが、紅莉栖さんと歩いたことのある場所に連れていって」
岡部と紅莉栖がいっしょに行ったところ……。
たとえば近所のコインランドリー、芳林公園、牛丼の『サンポ』……気晴らしになるような場所ではない。思い出深いといえばラボでの議論や開発のこと。どこかへ遊びに行くというような時間は、ほとんど共有していなかった。そう……青森に行くという約束も、結局は果たされないまま。
――紅莉栖(あいつ)とは。
いくつもの時間をともにしてきたが、それらは無数の世界線とアトラクタフィールドの縒(よ)り糸(いと)のなかに紛れてしまった。
過去になったのでなく、なかったことになった。
でも岡部は記憶していた。紅莉栖は岡部にとって、過去でも未来でもなく〝いま〟でありつづけている。
それが望みであり約束であり……忘れなさいと言われながら忘れないことであり、ふとしたきっかけで先

日のように、ふらっと再会することさえある。
「オカリンさんが紅莉栖さんとはじめて会ったのは、どこ?」
「はじめて会った場所……」
かがりの質問に、岡部は思いかえす。
「私、そこに行きたい」
岡部と紅莉栖がはじめて会った場所。それは、もちろん――

＊

ラジ館。
駅前の雑踏のなか、建て替え前のビルが、いっそう寒々しく晒(さら)されている。
「ここが……?」
かがりは岡部をうかがった。
――はじまりの場所。
瞼(まぶた)を閉じれば、彼女の、あの挑みかかるような強気な瞳がよみがえる。
「…………」

はじまりの場所。そして岡部が〈リーディングシュタイナー〉の記憶のなかで、β世界線の紅莉栖と最後に逢った場所。

刺してしまった。

「っ――」

立ったまま頭を抱える。

意味もなく叫びかけて、不安をかき消そうとして、だが、あたりの人目を気にして息を殺し、ただ……必死に耐える。

「オカリンさん？　どうしたの」

「すまない……」

最近は、かがりのことであわただしかったせいか、少しは精神状態もましになったと感じていた。やることがあれば気は紛れる。でも、それだけだった。

「汗、すごい……ごめん、もしかして私のせい？」

「いや、そうじゃないんだ」

否が応でも、ここに来ると思いだしてしまった。だから先日、真帆にタイムマシンを見せたときも鈴羽に任せたのだが。

真帆とは、夏にラジ館で偶然出会ったことになっているようだが……建物のなかではなかったはずだ。なんの覚悟もなく、ここに入れるわけがない。

「行こう……」
前に進みたい。願った。もう足踏みは……。
「いいの？　具合、わるいんでしょ？」
「大丈夫だ」
そうであってほしい。このままでは、いつまでも、まゆりたちを心配させてしまう。いつかは克服しなければならないことなら……いま。
仰ぐ。
ラジ館の屋上。失敗してタイムマシンの前から逃げだしたときのまま、岡部の〝いま〟は、あそこに釘付（くぎづ）けにされているのだ。
「わかった！　じゃ、行こう」
かがりは岡部の手をしっかりと握った。
「ありがとう……」
友達とか、仲間とか、恋人とか、そういうのは――どれだけ、どこまで頼っていい相手かだ。
――未来の自分が見ている。
仲間であるかがりに手を添えられて、岡部はラジ館に足を踏みいれた。
まっすぐエレベーターの前にむかった。

手を握ってくれたおかげで、岡部はおちついていられた。とはいえ、あの独特の構造をしたラジ館の階段──紅莉栖との記憶が濃密なあの場所を通っていく気にはなれなかった。

屋上へと直行する。

鍵は留未穂（るみほ）から預かっていたが、使うのははじめてだ。

階段室から、外へ。

夏以来となるラジ館の屋上に出て、まず目に入ったのは人工衛星──タイムマシンだった。

「わぁ、なつかしい！　これこれ！　私、これに乗ってきたんだよ！」

かがりはタイムマシンに駆け寄った。

「…………」

「はじめてこのビルの上に降りたときにね、お空がすっごくキレイでビックリしたの」

見あげた空は……鉛色だ。

それでも、かがりは透きとおった青空を仰ぐみたいに。

「──私、ママと別れるのが嫌で、ずっとマシンのなかで泣いてた。ママに会いたいよって……そんなことじゃダメだ、いつまでも泣くんじゃないって鈴羽おねーちゃんに言われて、それでも哀しくて……。そんなときに開いたハッチの外に見えたのが、青い空だったの」

「２０３６年の空は、青くないのか」

「うん。戦争の影響でね、ずっと黒くて暗い空。それに外にも、なかなか出してもらえないし」

　1970年代半ば……昭和50年ごろといえば高度成長期も終わり、光化学スモッグなどが問題になっていた時期のはずだ。それでも空が美しく思えたというなら、未来の大気はよほど汚染されているのだ。生命活動に支障があるレベルで。

「オカリンさんは、ここで紅莉栖さんとはじめて会ったの?」

「いや、屋上(ここ)じゃない。ここは――」

「あ」

　鼻先に冷たい雫(しずく)が落ちた。

　冬の雨。

「降ってきちゃった」

「そうだな」

　そう……。

――そっか、ここだと、あんたと会っちゃう可能性があること、忘れてた。

　あのときも雨が降ってきた。

　α世界線で。

　岡部は、まゆりの命を救うことができず、タイムリープの泥沼にはまってしまった。

　まゆりと紅莉栖は、どちらかを助ければ、どちらかが死んでしまう運命にあった。紅莉栖は、あの日も屋上(ここ)で空を見あげていた。

――考えごと。

あのとき紅莉栖が考えていたこと。

「うわっ！　すごい降ってきたよ～！　オカリンさん、なかに――」

「…………」

泣きだした空に、手をのべる。

隠れてしまった太陽に手のひらを透かす。

自分だけが辛いめに遭う。誰も幸せにならない選択を強いられつづけている。そう感じてきた。

ラボのみんなも、でも、それぞれが多くのものを抱えていた。

それでも、きっと彼らは歩きつづけるのだろう。不確かな未来――時間の矢の方向をむいて。

〈リーディングシュタイナー〉なんて能力、迷いを増やすだけなのだ。

あれはどうだ、これはどうだと……品揃え（しなぞろ）が多すぎる店で、逆に、どれを買えばいいのか選べなくなるみたいに。やりなおせばやりなおすほど、どうすればいいのかわからなくなる。

できることは数多いだろう。だが、人ひとりが為すべきことはかぎられる。

アマデウス・モーツァルトは楽曲を残した。

岡部倫太郎とは……何者だ。

未来の岡部が遺（のこ）したものを、至たちが継ぎ、鈴羽とかがりが橋渡しをして、ボールは岡部のもとにもどってきた。

——考えごと。
あのとき、ここで紅莉栖が考えていたこと。
それが約束のすべてだった。紅莉栖が遺したものは、未来をめぐりめぐって、いま、ここで岡部に託されようとしている。
手をかざす。
昼でも、たとえ雲が覆っていても空に星はある。
滞った……糞詰まりの下水管みたいな役立たずの心を、つき動かすには。降りしきる雨に打たれるがまま。
「オカリンさんったら!」
いきなり、岡部の腕が強くひっぱられた。
「…………?」
「このままじゃ風邪ひいちゃうよ!」
かがりにひっぱられて、岡部は建物のなかにもどった。
階段にしゃがみこんだ。ずぶ濡れになった服が体を冷やしていく。凍えるようだ。いまは冬、あのときは夏……。
「はぁ~、ビックリ」
あの日も豪雨に降られたあと……この踊り場で、岡部と紅莉栖は寄り添って話をした。

「ここだよ」
「え……？」
〈リーディングシュタイナー〉が記憶する順序で言えば。

――さっき、私に、なにを言おうとしたんですか？
――ほんの15分くらい前。
――私に、なにか言おうとしましたよね？　すごく悲しそうな顔をして。
――まるで、いまにも泣きだしそうで、それにすごく辛そうでした。
――どうして？　私、前にあなたと会ったことありますか？

紅莉栖と出逢（であ）わなければよかった。出逢えて、よかった。
　心はゆれる。ゆれつづける。

「オカリンさん」
　手のひらが、やさしく濡れた髪にふれた。
「かがり……」
「私が怖がっていると、ママが、よくこうしてくれたの」
　まゆりが……。

「どう、して」
「だってオカリンさん、すごく辛そうで……いまにも泣きだしそうなんだもん」
子供をあやすように、かがりは岡部の髪を撫(な)でた。
岡部は、されるがままにして語った。
「あいつと……紅莉栖と会った。最初の印象は最悪……はじめて会ったっていうのに、上から目線だわ、にらみつけてくるわで、かわいさのかけらもなかった」
むこうも、おなじようなことを思っていたはずだ。
あのときの岡部は、機関の陰謀だのエージェントだのと痛々しい単語を、どこにもつながっていない携帯電話にむかって口走るようなやつだった。
「でも……それでも紅莉栖さんは、オカリンさんにとって大切な人になった」
「ああ」
「そんな人の記憶が、私のなかにあるなんて……それも運命なのかなー」
運命――
いつだって、そうだった。世界線の収束という運命が、岡部を弄び、嘲笑(あざわら)う。
かがりの髪先から落ちた雫が、床に跳ねる。
「ねえ、もし……もしもね、椎名かがりの記憶がなくなって、完全に紅莉栖さんの記憶に入れかわるとしたら。そしたら私は、牧瀬紅莉栖になっちゃうのかな?」

「そう、簡単なものじゃないよ」
　手を握りかえして、岡部は答える。
　かがりも岡部とおなじことを考えていた。
　他人の記憶だけしか読出しができなくなれば、彼女自身は、自分が椎名かがりであるとは認識できなくなるだろう。椎名かがりとして我にかえることがなくなる。
　すると、人格というものが他者との交わりのなかで形成されるとすれば、近しい人間がかがりをどうあつかうか……牧瀬夫人が彼女を紅莉栖（むすめ）と呼び、真帆やレスキネン教授が天才少女にふさわしい待遇で彼女と接すれば、椎名かがりだった彼女は、紅莉栖の記憶に紐（ひも）付けられた感情によって現状を肯定できれば、それを望む者が多勢なら、牧瀬紅莉栖として生きていくことはできるかもしれない。
　一方で、娘を奪われたまゆりは悲しむことになるだろう。
　故意に記憶を消すなんて行為は、個人の人格の侵害で、殺人に等しいのではないか。もっとも、それを正しく裁く法律はあるまい。
「でも、もしもだよ？　もしもそうなるなら……オカリンさんはうれしい？　私が紅莉栖さんになったらオカリンさんはうれしい？」
　岡部は、そんなことを――
「俺は……」
　望んでいないと言えるのか…………？

「でも、私はやっぱり嫌だな」かがりは濡れた自分の髪を撫でた。「このまま、自分がどうやって生きてきたのかもわからないまま、誰からも必要とされないまま消えちゃうなんて」
「かがり……」
「私、どうなっちゃうのかな……私は……私は…………」
ふるえていた。寒さのせいだけではなかったはずだ。
――ごめん……ね……。
かがりの「ごめんね」の意味が、このとき岡部にはわからなかった。
わからないまま、濡れたズボンが貼りついた膝をのばして、かがりの手をひいて立ちあがった。
「このままじゃ風邪をひく。帰ろう」

3

雨脚は弱まる様子がなく、岡部はラボよりも近い柳林神社にむかった。
「とにかく、あがってください」
るかが出迎えた。
はじめて入ったるかの部屋は……やはりというか、女子高校生の部屋みたいだった。
「ふたりともずぶ濡れ……着替えなきゃ」

まゆりも来てくれていた。ちょうどRINEに連絡が入ったので、柳林神社で待ちあわせることにしたのだ。

「ママ……」

「寒かったでしょ～？」

まゆりはタオルで、かがりの髪をごしごしと拭いた。

「お風呂、沸かしてきますね！」

るかが部屋を出ていく。

「お風呂……ママといっしょがいい……」

「まゆしぃと？　うん、いいよ。あ、でもオカリンはどうする？」

「俺はいい」

風呂まで世話になることはない。ここにいても、かがりの着替えのジャマになるだけだ。

「オカリンも風邪ひいちゃうから、着替えだけでもしてね？」

「ええと……なんとかする」

ラボにTシャツくらいはあったはずだ。考えつつ、とにかく部屋を出ようとした。

「かがり……ちゃん？」

まゆりが途惑いの声をあげた。

着替えを手伝おうとしたまゆりの顔を、かがりが、ふしぎそうに見つめている。

「……だれ？」
「え？」
「あなたは、だれ……？」
　言葉を、とっさに受けいれられなかった。
「まゆしぃだよ……ママだよ、かがりちゃん」
「かがり……？　ちが……う……私、わたしは……誰……？　誰なの？　私は……！　う……」

——うあぁっ……ああああああああああああああああああああああああああああああああああ！
かがりは頭を掻（か）き毟（むし）った。
発作。まるで憑物（つきもの）でも憑（つ）いたかのように。
あまりの豹変（ひょうへん）ぶりに、まゆりはショックから声を失ってしまう。岡部は、かがりの名を叫んだ。呼びかけつづけた。
——痛い……痛いよママ……助けて……パパ……助けて……！
——誰か……助けて……私を助けてよぉ……。
助けて。助けて。助けて。
心の病みがひどかったときなど、岡部も、誰にでもなく助けてと叫んだことはあった。

だが、このかがりの状態は……。

「誰か……たす、け……て………………」

「かがりちゃんっ」

まゆりが娘に抱きつき、すがりつく。

かがりは――糸が切れたように、その場に崩れ落ちた。

4

柳林神社を出るころには、雨はやんでいた。

あのあと、しばらく様子を見たが、気を失ったかがりは目を覚まさなかった。眠っているかがりの呼吸と脈はおちついていた。ひとまず、その場をまゆりたちに任せて、岡部はラボにもどることにした。

るかの話では、かがりはこれまでにも不意に叫ぶことはあったという。ただ、今回のように激しく泣き喚き、気絶してしまうことはなかった。

「かがりの状態について、まだ軽く考えすぎていた……」

すぐにも対処しなくては。気の急くままに岡部は走った。

＊

「できたわ！」

「キター！」

岡部がラボの玄関を開けるなり、至と真帆の歓喜の声が響いた。

できた……完成した？

「本当か！」

濡れたままの靴を脱ぎ散らかして部屋にあがる。

「お？　オカリン、なんつーグッドタイミング！」

「岡部さん、びしょ濡れじゃない！」

ふたりとも雨が降っていたことにも気づかず、一心不乱に仕事をしていたようだ。

「そんなことはどうでもいい！　それよりも……やったのか！」

「むふっ」

至は親指を立てた。

「でかした、ダル！」

「スーパーハッカーなのだぜ。これくらい当然だっつーの」

SERNのハッキングに成功したのだ。

朝飯前のように言っているが、SERNといえば現在のインターネットの規格を設計したとされる、全欧州の叡智を結集したような組織なのだ。アトラクタフィールドが異なれば、管理社会ディストピアをもたらし世界を支配するほどの機関だ。そんなヤバいところをハッキングするのに、どれだけの能力と労力が必要か……。

スーパーハッカーの呼び名はダテじゃない、のだ。

「比屋定さんは……？　完成したのか！」

「私だって、これくらいどうってことなかったわ」

真帆も、おなじように指を立ててサムズアップしてみせる。

開発室では、タイムリープマシンの理論を応用した装置が完成していた。

「さすがだな……」

岡部は賞賛するしかない。

「ま、これもぜんぶ、あなたやかがりさんから情報を得られたからなんだけど。そういう意味では、かがりさんのなかに紅莉栖の記憶が残っていて、助かったわね」

「いや、完成させたのは比屋定さんのチカラだ」

「ありがとう。その言葉、素直に受けとっておくわ。あとは実際に、きちんと機能するかどうかが問題だけど……こればっかりは試してみるわけにもいかないのよね」

記憶の移植なんて、おいそれと実験するわけにはいかない。

α世界線で、さらに複雑なタイムリープマシンを何百回と使っておいてなんだが、装置に不具合やノイズがあれば、どうなってしまうかわからない。

「僕はキッチンジロー3回な」

至が見かえりを要求する。メシをおごるくらいならお安い御用だ。

ともかく、これでなにかあったときの準備は整った。

あとはアマデウス・システムを悪用して、記憶移植実験を施した連中をつきとめ、保存されているであろう、かがり本人の記憶データのバックアップを入手すること。

それが……いちばんの難題なのだったが。

「ふう、それじゃ私は、ちょっと眠らせてもらうわ。さすがに疲れ……」

真帆の言葉をさえぎって、着信音が響いた。

「――もう、誰よ？　人がこれから寝ようってときに……はい、もしもし」

文句を垂れながら、スマホを手に開発室の奥へとむかう。

「で、かがりたんのほうは、どうなん？」

至が言ったとき、岡部のスマホにRINEが届いた。

――ルカ子：かがりさん、目を覚ましました。いまはおちついています。

ＲＩＮＥの文面をたしかめると、岡部は至にむきなおった。
「実は、あまりよくない。今日なんて、まゆりのことすらわからなくなった」
「マジで……？」
「それだけじゃない。そのあと意識を失った」
「それ、マズくね？」
「まずいな。なんとかしないと……」
肝心の〝敵（あいて）〟がわからなければ手が打てないのがもどかしい。
と、開発室から声があがった。
「ええ！　本当ですか⁉」
「真帆たん、どしたん？」
「なにかあったのか⁉」
至と岡部は開発室に目をやった。
真帆はスマホを手に、やや呆然（ぼうぜん）とした様子で伝えた。
「荒らされたって……私のホテルの部屋……」

＊

電話は、なんと警察からだった。
真帆は和光市のビジネスホテルに滞在しているが、ここ数日留守にしていたあいだに、部屋がホテル荒らしにあったらしいのだ。カードキーはフロントで預かっていたが、ドアが開錠された形跡があり、いま本人に確認の上で警察が部屋を調べているという。
「それで？　詳しい状況はわかったのか？」
「なにが盗まれてるか調べるためにも、早くもどってこいって」
警察が来ているのでは、もどらないわけにはいかない。
「じゃ、じゃ、じゃあ……なにが盗られたかわからんってこと？　ももも、も、もしかして下着とかも⁉」
「そういうのはぜんぶ持ってきてるわよ！　セクハラで訴えましょうか？」
「うひぃ、それだけは勘弁」
数日間、ふたりはラボで顔をつきあわせていた。ずいぶん仲がよくなったのだろう、たぶん。
「ま……私の部屋ってふだんから散らかってるから、荒らされてるように見えただけって可能性もある。楽観的に考えれば、ね。鍵が開けられてたっていうから、誰かが入ったのはまちがいないでしょうけど。実は、ついこのあいだもオフィスのほうが荒らされたことがあって……」
「本当か……？」岡部はうなった。「じゃあ単なる偶然じゃないな。何者かが、比屋定さんの持っているなにかを捜しているんだ」

「そうね。でも、私の部屋も荒らされたってことなら、なにを捜しているのかは見当がつくわ。紅莉栖のノートPCよ」

あれか……岡部は思いあたる。以前、真帆はノートPCのパスワードについて心あたりがないか、岡部にたずねていた。

紅莉栖のノートPCとハードディスクには、『中鉢論文』のオリジナルの文書データが残されている可能性がある。紅莉栖の記憶データに等しい価値があるのだ。アメリカなどの西側にせよ、タイムマシン論文を独占したいロシアにとっても。

「──つか、そのPCとハードディスクって、この前、真帆たんが僕に預けたやつ？」

「なに？」

至の言葉に、岡部はふたりにむきなおった。

「実はね……どうしてもパスワードを解析したくて。ラボにこもるようになってから、橋田さんにお願いしたの」

「それじゃあ、ノートPCとハードディスクは……」

「無事のはずよ。ね？」

「もちろん。いまは僕のヒミツのアジトにあるのだぜ」

不幸中の幸いだ。岡部はひとまず安堵(あんど)する。

「──ずっとSERNのハッキングにかかりきりだったから、まだパスワードは解析できてないけどね」

それはそれで安心する。下手にパスワードを解析されて、真帆がオリジナルの『中鉢論文』に目を通したら、いずれ本物のタイムマシンを完成させてしまいかねない。

真帆の部屋を荒らした犯人を、警察がつきとめてくれれば話は前進するが……敵が軍がらみだとすると簡単にはいかないだろう。

ただ、警察沙汰になるような行動に出たということは、連中も焦っているはずだ。

次はどんな手でくるか……いよいよラボを襲撃するような荒っぽいことになるかもしれない。

──待てよ……。

岡部はひらめいた。

もしかしたら、このネタは使える。岡部はスマホで連絡をとった。

*

5

数日後──

椎名かがりの容体は、悪化の一途をたどっていた。

２０１１／１／15

秋葉原の夜。街の眠りは存外に早い。昼間、賑わっていた家電量販店、同人誌書店、メイド喫茶店などは夜の9時ともなるとシャッターを閉じてしまう。いわゆるサラリーマン、勤め人がたむろするような居酒屋はもともと少なく、中央通り近くの路地でさえ、ビルの影に覆われて薄闇と静寂に包まれる。

そんな裏路のひとつを、靴音が。

女だ。急ぎ足で……帽子を目深に被って、人目を避けるようにして。

まるで何者かから身を隠すように――

追われているかのように。女が曲がり角にさしかかったとき、不意に、

「…………」

女は驚いた様子で立ちどまった。

数人の男に行く手を塞がれた。背後にも男たちの影が待ち構える。

――椎名かがりだな。

男のひとりが質した。流暢ではあったが外国語の訛りがある。

女は、声もなく、といった感じで立ち竦む。

――楽な仕事だ。

その反応を見たとき、男たちは思ったはずだ。

小娘ひとり、さらっていくだけでいい。こんなに目立つ大人数で来る必要もなかった、と。

女が怯えたのを見て、男たちは告げた。

――おとなしくしていれば手荒なまねはしない。

やさしささえ滲ませて。リーダーらしき男の合図で、ふたりが女のもとに近づく。

怯えた女など、生まれたばかりの赤ん坊よりも簡単だ。男のひとりが無造作に手をのばす。

そのとき――

街灯を反射し、銀色の筋が奔る。

女が風を切って身をひるがえした。のばした手を押さえて、男はうずくまった。

路地に加工肉のような物体が3つ、転がった。

――ぎゃっ!

男の指だった。もうひとりの男はハイキックを顔にくらって、もんどり打って倒された。

一瞬。

いきなり刃物を抜いた女を前に、ナメてかかっていた男たちは猛り立った。

――You fuckin' bitch!

母国語で罵り、一斉に女に襲いかかる。だが――

再度の悲鳴。

「おいおい」ビルの陰から現れた大男は告げた。「静かにしな。あんまりうるさくすると、おまえらも困るんじゃねぇのか?」

天王寺裕吾(ゆうご)だった。帽子を脱いだ女は、阿万音鈴羽だ。

*

路地裏は暴力が支配する戦場と化し、そして……静寂がとりもどされた。

「すごいな」

敵は、訓練を受けた男たちだったはずだ。

それこそ軍とか諜報(ちょうほう)機関といった。そんな玄人さんの集団が、次々と倒され沈黙したのを見せつけられて、岡部は映画のアクションシーンでも観賞した思いがした。

喩(たと)えるなら、無敵の肉体派コマンドと未来から来た女エージェント。主役級のふたりを相手にさせられた、その他大勢のザコ。SERNのラウンダーである天王寺が荒事に強いことは、あの体格からも想像がついたが……岡部が驚いたのは鈴羽だ。

体格的に際立って恵まれているわけではない。しかし鈴羽は複数の男を相手に、格闘術で圧倒した。躊躇(ちゅうちょ)がない、というのか。中学生のとき日本軍に入隊し、脱退後もレジスタンスとして実戦を積んできたことは知っていたが、〝戦士〟という言葉の意味を岡部は思い知らされた。

「っ！」

戦場では有効とは思えないハイキックで、さらに襲撃者をひとり路上に沈める。言葉はわるいが〝遊ぶ〟余裕さえあった。

「やるじゃねえか、バイト」

「店長もね」

ナイフや銃を抜くことすらさせず、天王寺と鈴羽はすべてを制圧した。



——数日前のことだ。

真帆が泊まっていたホテル荒らしをきっかけに、敵も焦っている——そう考えた岡部は、オプションとしてひとつの作戦を実行した。

以前、桐生萌郁は言っていた。外国人をふくむグループが秋葉原で椎名かがりを捜しているらしいと。

世界線は変わったが、とどのつまり、タイムマシン開発競争から第3次世界大戦が勃発することはゆるがない。その核心となる『中鉢論文』にかがりが関係しているのであれば。この世界線でも、ライダースーツの女をふくめた軍関係者が、誘拐を狙っているのではないか。そう考えた岡部は、萌郁に頼んで、こちらから偽情報を流した。

椎名かがりと思しき女が、毎日このくらいの時間に、この道を通るらしい——と。

罠（わな）だ。

もちろん本物のかがりではなく、それっぽく変装した鈴羽に、毎晩この路地を歩いてもらった。

そして今夜、連中はまんまと岡部の撒（ま）いた餌にくらいついた。

立案者の岡部が、こうやって路地に身を隠して、見ているだけというのは情けない話だったが。下手に加勢なんかしても、足をひっぱるだけだから仕方がない。

『——そっちはどう？』

岡部のインカムから至の声が聞こえた。スマホは、ずっと通話状態にしてある。

「心配いらない。片づいた」
『鈴羽は大丈夫？　ケガしてない？』
至は、鈴羽が囮になることに最後まで反対していた。親心というやつだ。どんな妙案であっても、娘を危険にさらすことをよしとする親などいない。至は父親としての自覚があった。阿万音由季の夫となる覚悟は、まるでないのだったが。
「おまえの娘は、想像よりずっとすごいよ」
『そりゃあ僕の娘だからね。でも傷物になんかされたらオカリン一生恨むからな』
傷物──心配してやるべきは敵のほうだった。
突然、指笛が甲高く響きわたった。
それを合図に、残った襲撃者たちが一斉に背をむけた。罠と察し、撤退を決めたのだ。
「おっと、そうは行くかよ」
天王寺の丸太のような腕が男の腕を捕らえた。
が──
「！」
乾いた、抑えられた破裂音。
天王寺が確保した男は膝から崩れ落ちた。
「チッ」

天王寺が舌打ちする。岡部は声を失った。

「バカな……」

死んだ。みずから消音器のついた拳銃で命を絶った。

「おじさんっ、そっち!!」

鈴羽の声に、岡部は我にかえった。襲撃者のひとりが岡部のほうにむかってきた。

この作戦の目的は、ここで敵を捕らえて、連中が何者かを自白させることだ。つかんだ尻尾を放すわけにはいかない。

岡部は、大胆にも敵の前に身を躍らせた。

不意に現れた岡部に、その男は一瞬、躊躇した。

しかし、構わずそのまま突進してきた。腰だめにした手に、なにかが光った気がした。

まさかナイフ――

「ぐっ!」

岡部は棒立ちのままなにもできない。そのまま男と正面から激突し、ふっ飛ばされた。

それでも足止めくらいの役には立った。追いついてきた鈴羽が、男に跳び蹴りをくらわせる。

「おっと」

バランスを崩して、たたらを踏んだ男の前に待っていたのは仁王のごとき天王寺だった。

男の身柄を押さえる。自殺などできないように両腕を固めた。

「おじさん、ケガは？」
　鈴羽が駆け寄った。
「っ…………！　なんともない……」
　眉間をつねる。男がナイフを持っていたせいで、一瞬、あのときの紅莉栖の記憶が蘇（よみがえ）ってしまった。
『――オカリン！　どしたん⁉　なにがあった？』
「心配するな……こっちは、みんな無事だ」
　――んんんんんんーっ！
　天王寺に押さえつけられた男が、くぐもった悲鳴を漏らした。口にタオルをつっこまれている。
「おいおい、あんまり暴れるんじゃねぇよ……騒ぎになって困るのは、おまえもだろうが。それにまだ１本目だぜ、情けねぇ。あとまだ９本も残ってる」
　天王寺は、男の指を折っていた。もうラウンダー流の尋問がはじまっていた。
「それが終わったら、目だ。それから両方の耳、鼻……まだまだお楽しみはいっぱいあるんだぜ」
　岡部は知っていた。これが天王寺裕吾――FBの裏の姿だ。
　目を背けたくなる光景だったが、そんな反応をしているのは岡部だけで、鈴羽は顔色ひとつ変えずに様子を見ていた。
「俺だって、めんどうなまねはしたくねぇ。どうせ吐くなら、早めに吐いたほうがお互いのためだと思うぜ？」

指を、折る。

「……ん？　どうだ、もう1本行くか？」

男は、んーんーと苦悶の息を吐きながら、首を左右にふって意思表示をした。

「──最初からそうすりゃいいんだよ」天王寺は唾液まみれのタオルを抜いた。「で、おまえさんたちの元締めは、誰だ？」

拷問で消耗した男は……聞きとれないほどの細い声で尋問官に告げた。

すると、天王寺の顔色が変わった。

「……〝ストラトフォー〟!?　おい、冗談じゃねえだろうな」

天王寺が次の指にチカラをかけると、男は必死の形相で首をふった。

ストラトフォー。

岡部は知っていた。中二病まっさかりだったころネットで調べた。

正式名称は【STRATEGIC・FOCUS】──影のCIAとも呼ばれるアメリカの民間情報会社だ。軍事関係のインテリジェンスに特化していて、1990年代の湾岸戦争、ユーゴスラビア紛争、そして近年のイラク戦争などでも、その情報分析能力は本家CIAを凌ぐほどだったという。

「ストラトフォーか……また、めんどうなやつらが……」

SERNのラウンダーである天王寺に、そこまで言わせる組織だ。おいそれと手出しができる相手ではなかった。

一方で、そのことは、かがりと紅莉栖の記憶データをめぐる岡部の仮説を、大いに補強した。
情報屋のストラトフォーであれば、『中鉢論文』は喉から手が出るほど欲しいに決まっている。ロシアに亡命した中鉢教授と牧瀬紅莉栖の親子関係にもたどりつくだろう。ヴィクトル・コンドリア大学の上層部に圧力をかけて、アマデウス・プロジェクトを中止させて紅莉栖の記憶データを確保。身元不明の被験者を用意して記憶移植の実験を……そんな大それた行為に及ぶことも、ありうるのではないか。
ストラトフォーは情報を売買する、死の商人だ。
調査が本業のシンクタンクではあるだろうが、傭兵とか、この襲撃者たちのような人種を雇ったとしてもおかしくはない。
〝敵〟の尻尾をつかんだ。
「──聞いたか、ダル！　いますぐストラトフォーのサーバーにハッキングをかけてくれ」
『オーキードーキー！』
頼もしいスーパーハッカーは、さっそく作業にかかる。
この作戦を立案したのは岡部だ。協力してくれる仲間たちを危険にまきこんでいる。臆している場合ではなかった。
「……どうしたの、店長？　なにか気にかかることでも」
鈴羽が天王寺を見た。なにか腑に落ちない、といった表情をしている。

「いや……ストラトフォーといやぁ民間の会社だぜ。いわば金によって雇われてる連中だ。そんなやつらが、いくら捕まったからって……自決までするか？」

言われてみれば……妙な気もする。

自決を厭（いと）わない人間といえば、どこかの独裁者に育てられた特殊部隊とか、それこそSERNのラウンダーとか、もっと極端な連中だ。

「おい、おめえ本当に……」

さらに締めあげようとした天王寺だったが、男はすでに気を失っていた。

天王寺は、用意していたロープで男を縛りはじめた。

「――けっ！　だらしねえヤツだ。おい、岡部……後始末は俺に任せて、おめえらは行け」

「いいんですか？」

「これで終わりじゃねえんだろ」

路上には倒されて動けない男たちが数名、転がっている。このあと連中をどう処理するつもりなのか……ラウンダーに召集をかけたりするのだろうか。

「わかりました。あとのことはお願いします！」

岡部と鈴羽はラボへと急いだ。

＊

全速力で走る鈴羽の背中を必死で追いかけて、岡部は大檜山(ひやま)ビルの2階に駆けこんだ。
未来ガジェット研究所のラボには、至、真帆……まゆり、るか、そして留未穂も揃(そろ)っていた。
椎名かがりは、ぐったりとソファーにもたれかかっていた。

6

かがりの息は荒い。
顔から血の気がひいていた。いつ、どうなってもふしぎはない状態だ。
「ダル……どうだ？」
「ちょい待ち。前にハッキングかけたときのルートがあるから、いま探ってる」
至はPCの前で作業にあたる。
「前にって……おまえ、そんな危険なことしてたのか」
「呆(あき)れた……」
真帆はハッキング先がストラトフォーと知って驚いていた。と同時に、アマデウス・プロジェクトの凍結に軍事シンクタンクが関係しているとわかり、ことの大きさと闇の深さに戦慄(おのの)いている。
「友達と賭けでね。どっちが早くハックできるか勝負したんだ。ゴーゴーカレー1年分」

影のCIA相手にハッキング競争とか……。

「……」

「あれ？　どっちが勝ったか聞かないん」

至は鼻の穴をひくひくさせた。結果は聞くまでもないことだろう。

「とにかく急いでくれ」

「了解（らじゃ）」

かがり誘拐が失敗に終わり、しかも罠にかけられた。情報が流出した懸念があるとすれば、ストラトフォーが強硬手段に出てくる可能性がある。もたもたしている時間はない。

「オカリン……？　顔色、わるいよ」

まゆりが気づいた。

「いや、なんでもない」

「なんでもないことないニャ、見せるニャ！」

留未穂が強引に岡部のコートを剝ぎとった。

「岡部さん……血が……！」

るかが声をふるわせた。

「オカリン……！」

「岡部さん？」

「っ……ひどいケガしてるニャ！」
　自分でも見ないようにしていた。さっき襲撃者の男と激突したとき、ナイフで刺された傷だ。出血がシャツの脇腹をどす黒く染めていた。
「……問題ない」
　岡部は死なない。２０２５年までは、とりあえず死なない。それが収束だ。
「問題ないわけないニャ！　ルカニャン、応急手当の用意を！」
「はいっ！」
「俺は大丈夫だ」岡部は気力で立ちつづけた。「まゆり、それよりも……かがりは！」
「っ……は、ぁ………」
「かがりちゃん!?　しっかり！」
　かがりはソファーにもたれかかり、浅い息をくりかえしている。
　ここ数日で、かがりはすっかり衰弱してしまった。食事もろくに摂れていないのだ。
　かがりの手が宙を掻く。
「ママ……ママ、どこにいるの？」
「ママはここだよ。ちゃんとそばにいるよ」
　まゆりが手をしっかり握ってやると、かがりは、ようやく笑みを見せる。
「ねぇ……ママ……私、このまま……消えちゃうの、かな……？」

「大丈夫だよ。オカリンとダルくんが、なんとかしてくれるから」
「オカリン……さん……？」
「そうだよ。オカリン……わかるよね？」
「オカリン……さん……」
　虚ろな目が岡部を見た。
「心配しなくていい。もう少し……もう少しで、もとどおりになる」
　岡部も語りかけた。
「……岡部……さん」
「!?」
「私を、消して……」
「かがり……？」
　ちがう。
　心が粟立つ。
「彼女のなかから……私を消し、て……」
　かがりでは……ない。
　では、まさか――いいや紅莉栖の記憶データは昨年3月のものだ。岡部のことは記憶されていないはずだ。

「このままじゃ……かがり（カノジョ）が……」
だが、それは、まちがいなくクリス——紅莉栖の言葉だった。
人格と記憶はちがうものだ。牧瀬紅莉栖の記憶があるからと言って、かがりのなかに紅莉栖の人格が備わることにはならない。人格とは——他人との関係性のなかで構成される。

——私を……消して……。

たしかに紅莉栖（クリス）が発した言葉だった。
岡部が感じ、そう思ったのだ。
真帆を見て、それから目線で肯きあった。真帆も、やはりアマデウスのクリスの影を感じたらしい。
α世界線で紅莉栖は言った。
まゆりを助けて、と。
まゆりを犠牲にして、自分が生きることなどしないと。牧瀬紅莉栖とは、そうした精神性の持ち主だ。
このままかがりを放置すれば、紅莉栖の記憶だけが、かがりの脳と肉体に定着するかもしれない。その可能性を否定することはできない。
でも……そうなったとしても聡明（そうめい）な紅莉栖は選ぶだろう。
かがりを助けて、と。

かがりに宿ったまま研究を進めて、装置を開発し、かがりの脳から紅莉栖（じぶん）を消そうとさえするかもしれない。

父親に裏切られ、岡部に刺され、志半ばで亡くなり、記憶データのみになってしまったいまも、どうして紅莉栖は苦しまなければならないのか。

――ごめんね……岡部……。

かがりの瞼（まぶた）の隙間から、涙が頬（ほお）をつたう。

岡部は、もう彼女を見ているだけで胸が苦しくなった。

「ダル……まだか………」

紅莉栖――そう呼びかけたくなるのを必死で抑える。

「待って……もうすぐ、もうすぐ……！」

「まずいよ、おじさん！」窓から外をうかがっていた鈴羽が告げた。「1、2……3……何人か集まってきてる。ストラトフォーだ」

早い。さっき撤退した連中が、再度、集まってきたのかもしれない。

汗が滲（にじ）む。腹の傷の痛みを忘れるほど、全身が、あらゆる緊張に支配された。

「よし、来い、来い、来い！　……………っしゃ！」

「ダル!?」

「っしゃ、っしゃっしゃ、キタキタキター!!　ビンゴー!」

救急箱を持ってきた留未穂を制して、岡部はPCのモニターにくいついた。真帆も画面をのぞく。

ストラトフォーのサーバー内には、多様なファイルが存在している。

「重要そうなファイルのなかから、サイズの大きなものを選んで!」

真帆が叫ぶ。アマデウス・システムの記憶データはひとり分で3・24テラバイト前後だ。

「待ってよ……大きなのっつーと……えーっと、ん?　もしかしてこれかな?　でもファイルネーム『John』って……」

「モーツァルトの洗礼名はJohannes（ヨハネス）!　きっとそれだわ!」

真帆が口走った。

「なんかよくわからんけど、おk。てか、なかにもファイルがいっぱいあるんですけど……」

『John』フォルダのなかには、番号名でソートされたファイルが並んでいた。

「ファイルが増えてる……私たちの研究段階じゃ、こんなに多くなかった……」

プロジェクトが凍結されたあと、その成果はストラトフォーの手にわたり、さらに実験が重ねられていたのか。

サンプリングされたファイルが増えているということは、新しい記憶データをスキャンして保存していたことになる。重要な被験体であるかがりの記憶は、通常ならバックアップをとるだろう。

「このファイルのどれかが、かがりさんの記憶データのはずだけど……」

真帆がフォルダ内を捜すが、名前のつけかたが大学とはちがっていた。アルファベットと４桁の数字からなっている。

「ケー・シックス・ツー・ゼロ・ファイフ」岡部は告げた。「〝Ｋ６２０５〟だ」

「え？」

至と真帆がふりむいた。

「Ｋ６２０５番がかがりの記憶だ、ダル！」

ケッヘル６２０の５番――『魔笛』。以前の世界線で、ラボを襲撃したお面のひとりが、かがりを指して口にした番号だ。それがフォネティックコードの発音だったと天王寺が教え、モーツァルトのケッヘル番号ではないかとヒントをくれたのは来嶋（くるしま）かえでだった。

「Ｋ６２０……あった、これだ！」

「あとの手筈（てはず）は、事前に話したとおりに頼む！」

やりかたは、タイムリープマシンに比べればシンプルだ。走査（スキャン）したかがりの記憶データは発見したのでＶＲヘッドセットは不要。データを過去に送信する必要はないから『電話レンジ（仮）』も必要ない。

かがりの記憶データにデコードプログラムを仕込んで、ハッキング済みのＳＥＲＮのＬＨＣで圧縮、圧縮されたデータを転送してスマホに飛ばせば――

「早く！　完全に囲まれた‼」

鈴羽が警告した。

「ダル、準備はいいか！」

「オールオッケー！」

すべての材料が揃い、工程を実行しようとしたとき、真帆が声をあげた。

「……待って！」

真帆は厳しい表情でPCの画面を見た。

「どうした、比屋定さん⁉」

「本当にうまくいくのかしら？　もし失敗したら、かがりさんは……」

自分が作製した装置を、ぶっつけ本番で使うのだ。人体実験だ。不安になったのは無理もない。

岡部は真帆の肩にしっかりと手を乗せた。

「大丈夫だ。俺が保証する……」

「岡部さん……」

この装置を自分に使うとしても、岡部は迷わず実行する。

紅莉栖が──真帆が作ったものだからだ。

「おじさん！」

鈴羽が、たまらずといった感じで玄関に動いた。

まゆりとるか、留未穂たちは一カ所に集まっている。

岡部はＰＣの前を離れて、ソファーに身を預けたかがりの前に膝をついた。

「かがり……！」

「岡部……さん…………？」

濡（ぬ）れた瞼が、うっすらとひらかれた。

その反応、そこにいたのは――

「……いいな？」

岡部は短くたしかめた。

――さようなら。

「うん」

――さようなら、紅莉栖（クリス）。

外の階段を、複数の足音が駆けあがってくる。

「ダル！」

「了解！」

至はエンターキーを叩き、実行した。

すべては光に迫る速度で。

ストラトフォーのサーバーにあった3・24テラバイトのかがりの記憶データ（K6205）は、スイスとフランスの国境地下にあるSERNのLHCで超圧縮、たちまち岡部のスマホに転送された。
着信音が鳴る。
かがりのこめかみにスマホをあてる。あとは応答すれば、デコードプログラムが作動して、かがりの脳にかがり本人の記憶が展開、丸ごとダウンロードされるはずだ。
外で、襲撃犯たちの気配が動く。
騒然と、様々な音が飛び交うなか、かがりは――最後に岡部を見た。
「あのね岡部さん……」
最後に、彼女は。

――私……たぶん、岡部さんのこと……。

それは、かがりの言葉だったのか、紅莉栖（クリス）の言葉だったのか。
玄関扉が打ち破られた。
言葉のつづきは、土足でリビングを踏み荒らす音と怒号にかき消される。

――ゆびきりげんまん、嘘（うそ）ついたら海馬に電極ぶっ刺す。指切った。

あのとき紅莉栖はＤメールを送信するキーを迷いなく押した。

だから、いま、岡部も。

――かがり……よい、目覚めを。

約束。そして再び……。

着信に応答する。スマホが鳴動をとめた直後、

――世界は、

＊

目眩とともに。

歪に、姿を変えた。

そこは黒い黒い闇のなかだった。

音もない。
温度もない。
ただ暗闇と、冷たさと静寂に満ちていた。
誰もいない。
起きているのか眠っているのかもわからない。

ただ漠然と、そこにあるという感覚だけ。

無――。

ただそれだけが無限に広がっていた――。

@倫太郎「!!!!」

@倫太郎「…………」

あれ？

俺はいったい何をしていたんだ？

たしか――。

@紅莉栖「ちょっと岡部、いつまでもそんなところで寝てると、風邪ひくわよ」

@倫太郎「え……？」

声の方向に顔をむける。

開発室のカーテンを開けて、立っていたのは。

@紅莉栖「なによ？」

@倫太郎「なんだ、紅莉栖。いたのか」

@紅莉栖「いたのか、とはずいぶんご挨拶だな。さっきから、ずっとここにいたじゃない」

@倫太郎「そう……だったか？」

@紅莉栖「そうよ。昨日も一昨日も、ずっとここにいたわよ」

言われてみれば、そんなような気がした。
どうにも頭のなかが曖昧で、ぼんやりとしている。
かといって、眠いとか、だるいとか、そういうわけでもない。
意識だけはしっかりと覚醒している。
それなのに、なにかが足りない――それも大切ななにかが――そんな感覚だ。
@倫太郎「そういえば、ダルやまゆりはどうした?」
@紅莉栖「……あんた、本当に大丈夫?　何か不具合でもあったんじゃない?」
@倫太郎「どういう意味だ?」

@紅莉栖「橋田もまゆりも、ほら、そこにいるじゃない」

@倫太郎「え？」

@まゆり「オカリン、トゥットゥルー♪」

@至「僕のこの大きすぎる存在感を見落としてるなんて、どうかしてるぜ、オカリン」

ああ、そうか。

ダルもまゆりも、いつだってそこにいたよな。

いや、ふたりだけじゃない。

@フェイリス「凶真、元気がないニャ？　フェイリスの萌(も)え萌えチャームで元気を取り戻すんだニャン♪」

@るか「凶真さん、ボクにできることがあったら、なんでも言ってくださいね」

フェイリスもルカ子も。

@鈴羽「岡部倫太郎のために、その辺の食べられそうな草で、あたしが特別ジュース作ったげるよ」

@萌郁「私も……いるよ……岡部くん……」

鈴羽に萌郁。

ラボメン全員、いつもこのラボにいたじゃないか。

そうだ。

これが俺の日常だ。

俺はいつも、ここでこうしてすごしているんだ。

@倫太郎「ふむ……全員いるようだな」

@倫太郎「では只今（ただいま）より、第65536回目の円卓会議を行う！　おまえたち、準備はいいか!?」

@紅莉栖「まったく、いつもいつも暑苦しいわね」

@倫太郎「おまえこそ、いい加減そのお澄ましフェイスはやめるんだな、助手」

@紅莉栖「だから、私はあんたの助手になった覚えはないといっとろーが」

@まゆり「オカリンとクリスちゃんは、いつもなかよしだね～」

@至「イチャイチャしやがって。リア充爆発しろ」

@紅莉栖「ちょっと、橋田。私がいつ、こいつとイチャイチャしたっていうのよ」

@フェイリス「仲がいいほど、喧嘩（けんか）するっていうニャ」

@るか「うらやましい……です……」

@鈴羽「漆原（うるしばら）るかもいっしょにイチャイチャすればいいじゃん」

@るか「え？　だ、ダメです！　ボクにはそんなこと、できません……」

@萌郁「イチャイチャ……」

@倫太郎「ええい、おまえたち、いつまでムダ話をしている！　さっさと会議をはじめるぞ！」

@紅莉栖「で、今日の議題はなんなんだ？」

@倫太郎「そんなものは決まっている。今日の議題は——」

なんだ……？

@倫太郎「議題は……」

@紅莉栖「岡部？」

やっぱりなにかがちがう……。

@まゆり「オカリン？」

一見いつもとおなじように思えるが……。

@至「どしたん、オカリン？」

……そうだ、冷たいんだ。

@フェイリス「凶真？」

感じない。

@るか「凶真さん……」

感情も。

@鈴羽「岡部倫太郎」

ぬくもりも。

@萌郁「岡部……くん……」

みんながいる。

それなのに、冷たくて暗くて寒くて……。

寒い——。

＠萌郁「岡部くん……」

寒い。

＠鈴羽「岡部倫太郎……」

身体（からだ）の芯から凍ってしまいそうなほどに寒い。

＠るか「凶真さん……」

まるで骨という骨が鉄でできているかのように。

＠フェイリス「凶真……」

身体中の血管に水銀でも流されているかのように。

@至「オカリン……」

寒い。

今にも凍ってしまいそうだ。

なんだ、これは？

@まゆり「オカリン……」

ここは、どこだ？

俺は……どこにいる？

@紅莉栖「岡部……」

俺は——。

5章　盟誓のリナシメント・前

STEINS;GATE 0

1

アマデウス（A・I・）は夢を見るのか。

瞳は光を失い、
鼓膜は石となり、
舌は干涸（ひか）らび、
指先はぬくもりを忘れた。
ひどく不快な刺激――汚臭が鼻腔にふれ、ピリッと静かな電気が走ると、ゆるゆると覚醒をうながす。
気怠い、生きるという行為を命じた。

*

声を出そうとするが上手くできなかった。体が動かない。金縛り──なのか。焦点がボヤけ脳は像を結ばない。瞼(まぶた)が眼球に貼りついているようだ。不快感から目を擦ろうとするが腕があがらない。

腕が……ない?

そう感じて、焦りだけが増した。浅い息を吐き、芋虫みたいに体をうねらせる。ギシッ、ギシッという音が、なぜか、ずいぶん遠くから聞こえた。ベッドマットレスのスプリング…… 感覚から情報を得て連想したとき、不意に、強い閃光(せんこう)が脳裏を焼いた。

「っ…………!」

頭のなかで、電極でもぶっ刺されたかのような激痛が走る。

背中にあたった硬い感触。目だけを動かしてあたりをうかがう。ぼやけた視界が、長い時間をかけてようやく定まってきた。

ああ……と。

目が覚めたのだ。

ここは……ラボではなかった。自宅でもない。どこだかわからないのは当然で、来たことも見たこともない場所だ。薄暗い照明、家具といえるようなものは、自分が寝かされていたスプリングの軋(きし)んだベッドだ

け。

——俺は、なにをしている？

頭を掻きむしろうにも、横になった姿勢から腕さえあげられなかった。疲労感、倦怠感、虚脱感……あらゆる災難が重しとなって体にのしかかっていた。関節という関節は、変質して凝固したかのように機能しなかった。40度の熱を出したときとおなじで、考えようとしても考えはまとまらず、幻聴に追われて、なにかをしようとしても気力がつきて挫けてしまう。

渾身のチカラをこめて、なんとか寝がえりを打った。

「っ……ぅぁ…………」

つっぱった腕で体を支えて、やっと体を起こす。

ここまでに何分……もっとかかっただろうか。少し体勢を変えようとしただけで、あらゆる筋肉に激痛が走った。さらに時間をかけて、やっとベッドに腰を掛ける。

視線を落とす。

入院患者が着るような、だぶっとした服を被っていた。あまり清潔とは言えず、変色した血や、よくわからないシミだらけだった。

「うっ……」

そして気づく。意識をとりもどしかけたとき、鼻をついた汚臭の源は自分だった。

体がベタベタした。全身にワセリンみたいなクリームが塗られていた。髪の毛がギスギスして、頭にはなにかの装置――ヘッドギアのような物体を被せられていた。装置からのびたケーブルは枕元の機器に接続されている。

「…………？」

スマホは持っておらず、部屋には時計もない。

だんだん……不安になってきた。

喉が渇いた。カラカラだ。ヘッドギアを外して投げる。外したあとで、それが自分にとって必要な医療機器だったのではないかと気づき、また不安になった。

ベッドから降りた。

「っ!?」

転倒。

自分の体ではないようだ。床に這（は）いつくばって、亀のようなぶざまな体勢になる。腕をつっぱって、なんとか上半身を起こし、四苦八苦した末にベッドにつかまり、やっと立つことができた。

それだけで、もう疲労困憊（ひろうこんぱい）だった。このままベッドに突っ伏したい。しかし喉の渇きはいかんともしがたかった。水道は見あたらず、とにかくドアにむかった。

壁に倒れこむように身を預けた。また、そこで休む。もし倒れてしまったら二度と起きあがれる自信はなかった。ドアに手をかけて、握力の衰えた両手でノブをひねり、体重をかけて重たいドアを押すと、やっ

と開けることができた。

通路へ。

また壁に体を預ける。なぜかドアには鍵がかかってしまい部屋から締めだされてしまった。オートロック……？　もちろん、ここがホテルだとは思えない。

薄暗い非常灯を頼りに、壁に身を預けながら通路を進んだ。

すぐに上り階段に行き着いた。窓はなく、ほかに道もない。手すりにつかまって、ゆっくり、ゆっくりと階段をあがった。お年寄りは、いつも、こんな思いをして階段をのぼっているのだろうか。そんなことを考えながら一段一段……転げおちたら終わりだ。必死だった。

やっと階段をのぼりきる。

行きどまりだ。隔壁（シャッター）が行く手を塞いでいた。構造がよくわからず手間取ったが、ロックを外して、あとは背中でシャッターを持ちあげて、やっとできた数十センチの隙間から這いだした。

外——いや、まだ建物のなかだ。

天井のパネルが剥（は）がれ落（お）ちて、床を埋めている。大地震のあとのようなホールを、ガレキを踏みわけながら進む。素足で尖（とが）った破片を踏んだ。苦痛にうめく。やっと出口にたどりついた。

目に飛びこんできた光景。それは——

都市は壊れていた。

「なんだ……これ…………！」

廃墟（はいきょ）と化したビル群。コンクリートの建材は砕け、その断面から捻（ね）じ曲（ま）がった鉄骨が剥（む）きだしになっていた。外壁の窓ガラスは砕け散っていた。建物そのものが傾いでいるようにも見えた。

破局（カタストロフィ）を描いた、映画のワンシーンのような。

だが眼前にあるものは現実（リアル）だった。ガラスや、そのほかの破片が路上を埋めつくしている。素足では不用意に歩くこともできなくなった。

あたりを見やる。

通りに沿って、どこまでもおなじ廃墟の光景がつづいていた。

ぬるい風とオイルの臭いが鼻をついた。燻（いぶ）されたような臭気。空を仰ぐ。やけに薄暗い――最初は日暮れどきなのかと思ったが、空一面を覆っている黒い霧のむこうに、ぼんやりと真昼の太陽の輪郭があった。

「っ……ゲホッ、ゲホッ……」

喉の痛みに咳（せ）きこんだ。

袖で口元を押さえる。空気が……空気がひどい。煙にまかれたときのように、目に鼻に、刺激臭とともに痛みが染みる。

「…………」

なにが起きたのだ。思いだそうとしても、なにもわからない。

そうだ……かがりだ。

彼女の脳から紅莉栖(くりす)の記憶を除去するために――

思いだした。

岡部倫太郎(おかべりんたろう)は我にかえった。

最後の記憶は、目眩(めまい)――〈リーディングシュタイナー〉が発動した感覚。SERNをハッキングした至(いたる)が、ストラトフォーのサーバーに保存されていた記憶データ(K6205)を圧縮送信、そして――スマホで着信を受けて、そのかがりの記憶データが彼女自身の脳に展開された直後、おそらく世界線が変わった。

ひとつ、はっきりしたことは――昨年末から何度か感じた世界線変動には、すべてアマデウス・システムと牧瀬(まきせ)紅莉栖の記憶データ、人工知能のクリスが関係していたこと。つまり『中鉢論文』のオリジナルであるタイムマシン理論だ。あるいは、その紅莉栖の遺産を、誰が、どの時点で保有することになるか――あるいはできなくなるか。それによってタイムマシン開発競争の推移、世界線が複雑に変動しているのかもしれない。

〈リーディングシュタイナー〉を有する岡部であっても、その変化をコントロールすることは困難だろう。Dメールのようなはっきりしたフラグを、意図的に操作できるわけではないからだ。

いずれにせよアトラクタフィールドの大筋として、このβ世界線は第3次世界大戦へとむかう。結果はロシアの戦略的勝利であり、そこに至るまでの過程が、歴史の全体像としてはほんの少しばかり変化す

る……といった程度のことでしかない。

今回は、つまりストラトフォーがアマデウス・システムを凍結押収し、紅莉栖の記憶データを椎名かがりの脳にダウンロードした……その事実は、なかったことになったはずだ。

岡部たちの作戦は成功したのだ。やってやった……そのことに安堵する。

あとは、くりかえすが、とにかく現状をたしかめる。世界線変動の〝差分〟を確認できるのは観測者の岡部だけだ。

この廃墟の光景は、そうして少しばかり……そう少しだけ変動したβ世界線のひとつだ。

「…………」

視界の隅で、ガレキの山から黒ずんだ棒がつきでている。

足元に気をつかいながら、そちらに歩く。

なんだろう、と。顔を近づけて目を凝らした。ガレキからつきだされたそれは、先のほうで5つに枝分かれし——

「ひっ」

不快感が胃からつきあげた。

手だ。炭化した人の手だった。

「っっぷ…………ぐっ……う、おえっ…………」

吐き気をもよおす。たまらず手をつく。しかし腹のなかには吐くものさえない。

なにかが動く気配がした。

誰かいる……。どこだ……。

助けを求めようと、岡部は気配を感じたビルのむこうに歩いた。足を運ぶたびに小さな破片が突き刺さる。

誰か……。

ここは、どこで、いつで、いったいなにがあって、こんなことになっているのか。

岡部は崩れかかったビルのむこうを見た。

たしかに、そこには大勢の人がいた。

いいや、それは、もう人ではなかった。死骸の山だ。血肉を詰めた皮袋――腐ったガスで膨張した人間だったものに数匹の野犬が群がっていた。腹を破り、腸をひきずりだして貪っている。

蛆（うじ）のわいた遺体。腐臭、煩い羽音――夥（おびただ）しい蝿（はえ）、ここは獣と虫が支配する世界だった。

「あ……あぁ……あぁぁ…………！」

地獄絵図。

とうに魂の抜けた死骸のひとつと、目があった気がした。

ふれたわけでもないのに、相手の眼球がどろりと落ちて、眼窩（がんか）の空洞から黒くて細長い虫がすばやく這いだした。

「う、あ……ああああああああああああ！」
岡部は、その場から逃げだした。
もつれる足を必死に前に出して、懸命に走る。
どこか――どこかに、まともな場所はないのか。どこまで走っても、おなじ廃墟の地獄の光景がつづいていた。
「！」
鴉（からす）が頭上をかすめた。何羽も。
まだ……生きている。岡部は生きているのに、もう死ぬとわかっているんだぜとばかりに、利口な鳥どもが集まってきていた。
どこをどう走ったのかもわからない。
岡部は、気がつくと、そこに立っていた。
アスファルトはひび割れ、大きな穴が穿（うが）たれていた。道路を塞いで炎上した車両は、徹底的に破壊されたまま放置されていた。
捻じれて、地面に突き刺さった高架橋。垂れさがっていたのはレールだ。
顔をあげた。
大通り。
数十階建ての巨大なビルが聳（そび）えていた。それが基礎から傾いでいることに気づく。

知っている。

岡部は、この場所を知っている。

「秋葉原…………！」

*

そこは秋葉原の中央通り、駅前のあたりだった。

岡部は廃墟と化した東京にいたのだ。

なにが、どうなった。

「ラボは……」

岡部が気にしたのは仲間たちのことだ。

まゆりは？　至は？　留未穂（るみほ）は？　るかは？　鈴羽（すずは）は？　真帆（まほ）とかがりは……どうしている。

とにかく自分の知っている家に帰りたい。その一心で岡部は足を踏みだした。

ザッ

軍靴の音。

荒々しくガレキを踏み、現れた兵士たちに岡部は発見された。

――貴様、そこでなにをしている！

銃口がむけられた。
2……3人。都市迷彩の戦闘服と自動小銃で武装していた。
「あ………」
自衛隊……？　なにをしているもなにも、こちらが聞きたいことだらけだ。
しかし銃口を前にして頭に浮かんだのは、恐怖――ただ、逃げなければという意思だった。
走りだそうにも体が言うことを聞かない。
――動くな!
怒声と乾いた音が飛んできた。
セミオートで、岡部の足元に3つの穴が穿たれた。
撃った。
本物の銃で岡部は撃たれた。威嚇ではない。ほんの数センチ近ければ命中していた。
「あ……あぁ……」
足が竦む。
兵士たちは銃口をむけたまま近づいてきた。
逃げろ。
だが、体は別人のもののように動かない。病気や体調の問題ではなかった。筋力だ。岡部の全身の筋肉は削げ落ちていた。

銃声。
ふいに兵士のひとりが横殴りにされたように倒れた。
残る2名の兵士は、あきらかに挙動を乱す。狼狽(ろうばい)して——今度は彼らが死の恐怖に襲われて、銃口を左右に泳がせた。
「ジャマだ」
岡部は腕をつかまれて、ひき倒された。
銃声がふたつ、ふたりの兵士がもんどりうって倒された。
死んだ。
目の前で撃ち殺された。尻もちをついて、見ているしかなかった岡部の前には、ブーツで固めた女の足が立っていた。
「おまえ、死にたいのか」
厳しい声。岡部はひぃひぃ言いながら顔をあげた。立っていたのは……。
阿万音(あまね)鈴羽。
「ほら、いつまでボケッと坐(すわ)っているつもりだ」
鈴羽は、立てとうながした。
「おまえ……殺したのか……」
「なにをナマッチョロいこと言ってるんだ、おまえ」

聞いたことがない、冷たい声だった。

「おまえ……鈴羽、だよな……?」

たちまち戦士の表情は警戒を帯びる。

「何者だっ?」

「誰って……わからないのか……?」すがる思いで訴えた。「岡部だよ。岡部倫太郎だ」

その名を口にしたとき、鈴羽の表情には驚愕(きょうがく)が重ねられた。

「……………!?　そんな……バカな……!」

2

鈴羽の先導で、岡部はハンドライトの明かりを頼りに暗い地下道を進んだ。

「——こっちだ」

岡部が名乗ったあと、鈴羽はどこかへ連絡をとった。そして、いっしょに来るように命じた。

この地下道までは目隠しをされていた。だから、ここがどのあたりかはわからないが、歩かされた時間から逆算すると、秋葉原駅前からさほど遠くはない。

しばらく地下道を進んだところで、鈴羽は手で制止し、立ちどまった。

なにもない——かと思えた暗闇の壁のむこうを叩(たた)く。

ノック。
鉄の扉がゴンゴンと鳴った。すると扉のむこうから声が。
「きみに萌え萌え」
「……バッキュンきゅん」
鈴羽が答えると、ロックが外れる音がした。
「入れ」
……どうやら、いまのは合言葉だったらしい。
鉄扉がひらく。
暗闇の地下道のむこうに、広い空間があった。
なんの設備かはわからなかったが、大型の機器が置かれている。その操作盤の前に坐った男が、まっすぐに岡部を見つめて迎えた。
「よかった。やっと目を覚ましたんだな」
「あの、あなたは……？」
顔に深い皺が刻まれていたが、眼鏡の奥の瞳は、やさしい印象がする。
「やだなぁ、僕のこと忘れたん？　そりゃいくらなんでも冷たいぜ、オカリン」
この声……この口調は……！
いや、だが、そんなはずは——

「まさか……ダル、か？」
地下室にいた男――橋田至は破顔した。
「よかった覚えててくれて。てっきり忘れられたのかと思ったのだぜ」
「ダル……本当にダルなのか？」
「こんなナイスガイ、僕以外にいるわけないじゃん。なあ、鈴羽？」
「もうちょっと痩せてくれれば認めなくもないけど」
鈴羽は呆れる。その表情が、はじめて岡部が知る彼女のものになった。
「そう言うなって。これでも若いころに比べれば、ずいぶんと痩せたんだぜ」
な？　と、同意を求めて岡部を見る。
たしかに目の前の至は、ガッチリ体型といった感じで、まるまるとはちきれんばかりの不健康な印象はなかった。

――「きみに萌え萌え」「バッキュンきゅん」
そんな合言葉を決める性癖のやつは、たしかに橋田至くらいだろう。
「というか父さん……言葉づかい、おかしくない？」
「僕もひさびさにこういう話しかたしたよ。オカリンは、このほうが話しやすいだろうと思ってさ」
HENTAI紳士たる者……なんていう、あのダル独特の話法は封印していたようだ。
そんなことより、問題は……至の年齢だ。どう見ても中年のおっさんではないか。

と、部屋の隅にあった棚が目に入った。
ガラスの棚扉に、地下室の照明に浮かびあがった、見知らぬ——やはり40代くらいの中年男性が映っていた。
　痩せこけた陰気な顔が、岡部を、じっと見ている。
　右手を挙げた。するとガラスのなかの中年男も、ゆっくりと左手を持ちあげた。
「ダル……ひとつ、教えてくれ」
「なんでも、どぞ」
「西暦何年だ、いまは……」
　ガラスに映った——自分が自分に問いかける。
「2036年。世界は戦乱のまっただなかだ」

2036／3／7

にわかには信じられない。けれども至の、そして鏡に映った自身の姿が証拠だった。
　2036年。
　第3次世界大戦。全世界で数十億人が死亡し、度重なる空襲で東京は人口が10分の1になるまで破壊、焼きつくされた。ロシアの戦略的勝利で終戦となったあとも、世界の混乱はつづいた。焦土と化した日

本は、超大国の思惑のもと、日本人同士が殺しあうような内戦下にあった。
さっき見た、死体が堆く積まれた廃墟の街。遭遇した政府軍の兵士が、それらを物語っていた。
「だが……どうして俺は、そのことをなにも覚えていないんだ」
〈リーディングシュタイナー〉の空白、それにしても4半世紀ものタイムラグとは……。岡部は、自分の記憶の状態について至に説明した。
「——俺は……2025年に死ぬと、タイムトラベルしてきた鈴羽から聞かされていた。どうして2036年に生きているんだ？」
「それはあたしも聞きたい、父さん」鈴羽が質問をかぶせる。「あたしはオカリンおじさんは死んだって聞かされてきたんだ。だから、すごく驚いた。どういうこと？　もしかして、あたしを騙してたのか？」
「ちゃんと説明するから」
至は娘をなだめると、あらためて語った。
「——オカリンは、2011年の1月半ばまでの記憶しかない……ってことでおk？」
「ああ……1月15日に世界線が変動した。それからのことは、なにも記憶にない」
目覚めると25年がすぎて、不惑をすぎて40代も半ばだった。
受けいれられない。記憶が、老いてしまった肉体を認識できないでいる。
「やっぱ身体のほうに少し問題があるのかな。それとも混乱してるのか……いまのオカリンの頭のなかには、2011年の1月末までの記憶がなきゃいけないんだけど」

「末(まつ)？」岡部は妙な感じがした。「どうして1月末なんだ？」
違和感はさらに増した。
「真帆たんがさ、オカリンの記憶をデータとして保存したのが、２０１１年1月末のことだから。アマデウスの研究の役に立ちたいから記憶サンプルをとってくれって、オカリンから真帆たんに頼んだらしいじゃん」
アマデウス・プロジェクトの一環として、岡部の記憶をデジタルデータ化して保存したのだという。
「比屋定(ひやじょう)さんに？　俺の記憶を、アマデウスの……」
そう、世界線は変動したのだ。
同時に、ストラトフォーによるプロジェクトの凍結が、なかったことになったと推測できた。つまり岡部がテスターとして真帆とレスキネン教授に協力した、その点では、最初の世界線に近いところに移動した。
そして、おそらくは新年会でのラボ襲撃事件もないまま、1月末まで、あのままカレンダーが進んだ。
いや、待て……至の言葉から、岡部はとんでもないことに気がついてしまった。
「ダル……もしかして、いまの俺の脳のなかは……」
「そう。お察しのとおり、いまのオカリンの脳内にある記憶は、そのとき――２０１１年1月末にデータ化された記憶なんだ」
記憶データ。25年前の、19歳のときの……それを40代半ばの肉体にダウンロードした。
…………。

「ちょっと待って、父さん」鈴羽が話に割ってはいった。「話がまったく見えない。そもそも、どうしてオカリンおじさんが生きてるの？　おじさんは２０２５年に死んだって言ってただろ？」

「死んだよ。事実上はね……」

「どういうことだ、ダル」

　事実上という言葉の曖昧さに、岡部はおちつかない。

「タイムマシン開発競争は２０２５年（そのころ）がピークだったんだよね。各国のいろんな機関が、牧瀬紅莉栖が残した論文と彼女の記憶データを欲していた。『中鉢論文』を入手していたロシアは、逆に、それらを抹消しようとしてたのかな。でも……その時点で、牧瀬紅莉栖の遺産はぜんぶストラトフォーの手にわたってたんだよね」

　紅莉栖のノートＰＣか外付けハードディスク、あるいは、その両方か。ロシアに対抗するため、ＳＥＲＮも合衆国も躍起になったはずだ。そしてストラトフォーにとっては千載一遇の商機だったはずだ。

「ただ連中をもってしても、遺品の中身をたしかめることはできなかった。ロックを解除できなかったんでね。ちなみにそのロックを開発したのは僕」

　なんという……。

　つまり真帆に、ノートＰＣのパスワード解析を頼まれるなりした大学生の至は、結果的に、逆にそれらにロックをかけた状態で封印した。

「――だからストラトフォーは、牧瀬紅莉栖をよく知る人物を捕らえて、情報を聞きだそうとしたんだ」

「俺か……！」
　２０２５年……岡部はストラトフォーに拉致された。
「連中はオカリンの記憶から牧瀬紅莉栖についての情報をとりだすために、あらゆる手を使ったらしい。僕たちが助けだしたときには、オカリンの精神はボロボロだった。まともに生きるための能力さえ失ってた。回復する見こみのない、死んだのと変わらない状態だったんだ」
　拷問を受けたということだ。精神崩壊を起こすほどの。
「それじゃあ、肉体は生きていたってこと？」
「そういうこと」至は娘に肯（うなず）いた。「で……死んだことにするのは、オカリン自身の入れ知恵でもあったんだよね。あのころオカリンは自分が狙われてることに危機感を覚えてたから」
　死人は、もう狙われることはないだろう。
「でも、せめて、あたしにくらいは教えてくれてもよかったはずだ」
　鈴羽は納得がいかない。
「敵を騙すには、まず味方からって言うだろ？」
「…………」
　父親に信頼してもらえなかったことがショックだったらしく、鈴羽はしょげてしまった。
「そんな顔するな、鈴羽。このことを知ってたのは〈ワルキューレ〉のなかでも、ごくかぎられた人間だけだ。……話をつづけよう。オカリンは精神を破壊されて、生きるための能力を失っていた。放っておいたら

肉体さえ死んでしまう状態だった。そこで事実を知る一部の人間の手によって、ここは別の施設でずっと面倒を看てきたんだ」

２０２５年から２０３６年まで、11年ものあいだ……一種の植物状態で。

寝たきりといっても栄養補給は必要だし、関節は固まるし、床ずれで皮膚が裂けたりもするだろう。それを防ぐためには、毎日、しっかりと介護してもらわなくてはならなかったはずだ。

「もしかして……まゆりが？」

岡部はたずねた。

「まゆ氏だけじゃない。フェイリスたんや、るか氏、それに真帆たんもだ」

生きている……！

まゆりも留未穂も、るかも、真帆も——

「マホ……？　ねぇ、さっきから、それ誰のこと？」

「ん、ああ……言っちゃった。んと……鈴羽も知ってる人だお」

鈴羽が訊くと、至はしまったと口に手をやった。

廃墟となった東京で、みんなは生きのびて、岡部を看てくれていた。ひと言で介護というが、とんでもない労力だったはずだ。

「なあ、ダル……どうして俺は、いまになって目を覚ましたんだろうか」

「それは単純な話さ。そのオカリンの記憶データは、つい最近まで、どこにあるかわからなかったんだよね。つーかオカリンと牧瀬紅莉栖の記憶データも、ストラトフォーがずっと保管してたんだけど……その保管場所が、ずっとわからなかったわけ」

岡部が記憶データを提供したのは、ヴィクトル・コンドリア大学の正規のプロジェクトに協力するためだった。しかしその後、この世界線でもアマデウス・システムはストラトフォーによって接収されてしまったのか。このあたりは過程の問題でしかないのだろう。

「どこだ？」

「──見つけたのは半月前……どこにあったと思う？　驚くぜ？」

「灯台下暗し。大学だよ、僕たちの」

「まさか……東京電機大学か！」

岡部は声を裏がえした。

「そそ。その地下に連中の支部があったんだ。つってもいまは、ほとんど廃墟になってるけどな」

東京電機大学──神田キャンパスの地下にストラトフォーの支部が……。

「──で、半月前にオカリンの記憶データをサルベージした僕たちは、すぐ、脳にデータをダウンロードした」

もちろんリスクはあった。しかし、ほかに方法はない。

だが、それから10日ほど経っても岡部は覚醒しなかった。無理だった、時間が経ちすぎていた——あきらめかけた矢先、目覚めたということだ。

至たちにとっては11年ぶり。

岡部にとっては、世界線と25年の時を隔てて。

「…………」

両手を見つめた。

ガリガリに痩せ細った手の甲に血管が浮きあがっていた。棚のガラスに映っているのは皺だらけの不健康な顔。頭髪も半ば白くなりかけていた。

「——起きたら25年後だったなんて、とんだ浦島太郎だな」

「気持ちの整理がつかないのも無理ないさ」

そう、ショックだ。

老いのこともある。それよりも、なによりも岡部の、いまの——

「この記憶は一度データになったものなんだな……」

思いだせる。

子供のころの記憶、あの夏の記憶、紅莉栖との記憶……思いだせはするのだ。

でも、それらは3・24テラバイトという容量のなかで、一度0と1（デジタル）に変換されてしまったものだ。

それは……では、ここにいる岡部は、岡部倫太郎であると言えるのか……？

「でも、それを言うなら牧瀬氏のタイムリープマシン技術？　それだっておなじじゃん。オカリンはアレ、別の世界線で何度も経験してるはずっしょ」

たしかに……だが、頭ではわかっていても気持ちの整理がつかないのだ。

タイムリープマシンは「ある時点の過去の自分に、未来の記憶を思いださせる」――気分的には「もどってやりなおせる」という、表現がふさわしいかはともかく、お得感のあるものだ。だが、これは……いわば未来へのタイムリープで、跳ばしたぶんの時間をどこかになくしてしまった、そんな損をした気持ちになる。

「あたしは、やっぱり納得いかない」

鈴羽は機嫌を損ねてしまった。自分が知らないことばかりだったからだ。

「そう言うなって、鈴羽」

「父さんはいい。そうやって世界中を騙していたんだから」

「だから仕方なかったんだってば」

……騙していた。

騙されていたのは岡部もだった。自分は２０２５年に死ぬ運命だと、未来から来た鈴羽に教えられていた。収束――だからこそ、自分は死なないとわかっているからこそ、大胆な行動に出ることもあったのに。

だが、カタチはどうあれ岡部倫太郎は２０２５年に死ななかった。

自分ばかりでなく、世界中が騙されていた。至が、娘にはナイショにしていた……その程度のことで。

「世界が騙される……？」
そのとき部屋の鉄扉がノックされた。鈴羽が声をかえす。
「きみに萌え萌え」
「バッキュンきゅん」
もどったのは幼い声だった。
扉のロックが解除される。地下室に入ってきたのは――10歳くらいの少女だ。
「ダルおじさん、鈴羽おねーちゃん、とぅっとぅるー」
「かがり。ここには用がないなら来るなと言っているだろう」
鈴羽の言葉に、岡部は思わず少女を二度見した。
写真を見せてもらったことはあったが……。
「ごめんなさい。でも、ママたちみんな出かけて、帰ってこないんだもん」
「まあまあ、そう目くじら立てることもないだろ」
「また父さんは、そうやって甘やかす。こういうことは、きちんとしておかなきゃダメなんだ」
「……こんにちは」
岡部は、かがりに挨拶した。
「こんにちは。おじさんは誰？」
「俺か？　俺は……」

答えに躊躇した。

「…………？」

「そうだな……きみのママの友達だ」

岡部は名乗らなかった。岡部倫太郎は死んだと、まゆりは娘に話していたはずだ。

「まゆりママの？　へぇ……」

かがりは特に疑うこともなかった。

「ママは、やさしいか？」

「うんっ！」

「ママのこと、好きか？」

「うんっ、だーいすきっ!!」

かがりの表情は好きという気持ちであふれていた。

けれども……椎名かがりは、このあとタイムマシンで過去に跳ぶことになるはずだ。大好きなママと別れて、過去の世界では鈴羽ともはぐれて、ひとりで……そして経緯はわからないが、やはりストラトフォーによって被験体にされてしまうのか。

「……そういえば父さん。まゆねえさんには伝えたのか？　おじさんが目覚めたこと」

「あ、いかん！　すっかり忘れてた！」至は無線機を手にした。「こちらバレル・タイター。応答せよ、こちらバレル・タイター」

『──こちらスターダスト・シェイクハンドです。どうぞ』

スピーカーから響いたのは、たしかに、まゆりの声だった。

コードネームに〈スターダスト・シェイクハンド〉とは……。岡部は気恥ずかしくなった。

「ママー！」

「うん！」

『あ、かがりちゃん。ダルおじさんのところにいるの？』

『おじさんは大事なお仕事があるから、あんまりジャマしちゃダメだよ？』

「はーい」

母親に言われて、かがりは、ひとりで外の地下道に出ていった。

「……そんなことより、まゆ氏。スペシャルなニュースだ！　心して聞いてくれ。オカリンが……目覚めた！」

至が報告した。

無線機のむこうからは、数秒間、返答がなかった。

『──ほんと、に？　ほんとに……オカリンが……？』

『どうしたの、マユシィ!?』

無線機から別の声が聞こえた。マユシィ……まゆりをそう呼ぶのは。

『オカリンが……オカリンが……』

『もしかして岡部さん……目を覚ましたんですか⁉』
『ホント⁉　オカリン、起きたのニャ⁉』
　留未穂、そして、るか……。
　無線機のむこうから、なじみのある声が次々に飛びこんできた。
　みんな40代になっている。でも声だけを聴くと、岡部が知っている10代の雰囲気と、みんな変わらない。
「そういうわけで3人とも、すぐにもどってきたほうがいい」
『………』
　無線機のむこうでは、かすかな息が聞こえるだけになった。
「まゆ氏？　どうした、まゆ氏⁉」
『ダメ……マユシィはうれしさのあまり涙ぐんで声も出ないみたい』
　留未穂が代わって答えた。
　まゆり………。
　岡部は彼女がこの11年間、植物状態の自分にしてくれたことを想像した。感謝と、いとおしさから胸が熱くなった。
　スターダスト・シェイクハンド。
　そうして植物状態の岡部に、ずっと手をのべて、つなぎとめてくれた。
「とにかく、みんな早くもどったほうがいい」

『わかった。食料を受けとったらすぐにもどるニャ』
　留未穂が応じた。
　みんなが岡部の生還を知ってよろこびに包まれたなかで、ところが、鈴羽だけは不意に表情を曇らせた。
「どうした、鈴羽？」
「父さん……なんで、まゆねえさんたち食料調達に出てる？　今日は予定になかったはずだ」
　至はえっ、と表情を変えた。
　鈴羽の声は無線機ごしに留未穂たちにも届いていた。
『そんなはずないニャ。たしかに今日だって、昨日の夜遅くに連絡が……』
「……マズい！　それは罠だ！　みんな、すぐにもどって──」
　鈴羽が叫んだとき。
　無線機から銃声が轟いた。数珠つなぎの発砲音が響く。
『きゃぁっ!?』
　まゆりの悲鳴。
「どうした!?　なにがあった!?」
　鈴羽が叫んだ。
『襲撃です！　敵襲が──！』

「くそっ！」
　るかの返事に、鈴羽はすぐに装備を手にした。
『まゆりちゃん！　フェイリスさん！　逃げて！　ここはボクが！』
『でも、そんなことしたらルカニャンが！』
『ボクなら大丈夫ですから、早くっ！』
『ダメぇ、るかくんっ！』
　マシンガンの銃声が低く轟く。３人は政府軍の罠にかかって、危機に陥っていた。
「父さんっ！」
「おうっ」
　地下室から駆けだした鈴羽を、至が追う。
「待ってくれ、ダル！　俺も行く！」
「でもオカリン、その身体じゃ……」
「行かせてくれ！　頼む……！」

＊

　地下道を進み、外に出た。

銃弾が飛び交う戦場を覚悟していたが、あたりは静まりかえっていた。
むこうの路上に、数人倒れている。〈ワルキューレ〉と敵対する勢力ということは治安部隊……その兵士たちだろう。
鈴羽は、倒した敵のなかに立っていた。
立ちつくしていた。茫然（ぼうぜん）——といった体で。彼女のそばに、ふたりの女性がしゃがみこんでいる。
まゆり、留未穂か……。そして彼女たちに看取（み）られようとする戦士が横たわっていた。
岡部は至の肩を借りながら、よろよろと歩み寄った。
「ルカ……子……」
ひと目でわかった。漆原（うるしばら）るかであると。
「オカ……リン……?」
「オカリン……ルカニャンが……ルカニャンが……!」
まゆりと留未穂が涙まじりの声をあげる。
「あ……あぁ……」
「岡部……さん……」
るかは精悍（せいかん）な戦士の貌（かお）をむける。
目を奪われるほど美しかった。
でも……それは死を間近にした、血の色を帯びた……。

「――本当に……岡部さん、なんですか……」

るかは焦点の定まらない目で相手の姿を捜した。おそらく、なにも見えていなかった。

「ああ……ルカ子……俺だ……」

「ふふ、その呼びかた……本物の岡部さん……」

ごふっ、と咳きこんだ口元から血が流れだす。

致命傷だった。全身に銃弾を浴び、もう手の施しようがない。

「よかった……さっきの話は……嘘じゃ、なかったん、です、ね…………」

「ああ……！　おまえたちのおかげで、こうして目覚めることができた。ありがとう……」

るかの手が宙を掻く。

その瞳はなにも映してはいない。岡部が握りかえした手は、もう冷たくなりかけていた。

「岡部……さん……」

「どうした……！」

「ボク……やりました……！　凶真さんに……おしえてもらった、清心斬魔流の心得の、おかげ、で……いままで、まゆりちゃんや……みんなを……まもってこられ、まし……た……」

「ぁ、ああ……」

「ボク……仲間に……なれました、よね……？」

それは25年越しの告白だったのか。

るかは、ラボのなかで自分だけがなにも教えてもらえず、お客さんのようにあつかわれていたことに寂しさを感じていた。

「――みなさんの……ほんとうの、なかまに、なれ……ました、よね……？」

「バカ……おまえは最初から、ずっと……俺たちの仲間だ……！」

　岡部の言葉に、戦士は笑みを浮かべる。

　ふるえる手をのばして、やっと岡部を探りあてて、頬(ほお)にふれた。

「えへへ……うれしい、な…………」

　その手が、がくりと地面を叩いた。

「るか……くん……？」

「ルカニャンっ！」

　二度と動かなかった。

　なんてことだ……至も声をふるわせる。

　彼らにとっては４半世紀をともに戦った盟友の――死だった。

「あ……あぁぁ…………」

　世界線を越えて。

　時を越えて、それでも、どこに跳ぼうと、待っているのは近しい人間の死だった。非業の終わりを見届けて、記憶しつづけなくてはならないのか。何度もだ。何度も何度でも……。

「よかった」
まゆりがつぶやく。
耳を……疑った。
よかった……？　そんな悟ったような言葉を口にしたのが、まゆりであったことが、岡部にはひどくショックだった。
「るかくんは、オカリンにずっと会いたがっていたから。最期に会えたのは、よかった……」
まゆりの言葉の意味を考えたとき……岡部が眠っていた11年間が、どれほど残酷な時間だったかを思い知らされる。
死が、たったひとつだけ約束された救いだった……とでも。
「漆原るか……あなたは、とても立派に戦いました。私たちは、あなたに、救われました……どうか安らかに」
あの、まゆりが。親友の死に際して、そんな戦場の牧師じみた言葉を述べる。
これが作法なのか。この時代で生きていくための……。
──こんな、こんな、あんまりだろ……っ！
天を仰ぐ。
死の塵（ちり）で霞（かす）んだ鈍色（にびいろ）の空に。
「う、あぁぁぁぁああああああ…………！」

3

レジスタンスの戦士たちは、失意のうちに地下のアジトにもどった。
「まゆ氏は?」
「泣き疲れて眠ったよ」
鈴羽は消沈して、声を落とす。
「無理もないよな。まゆ氏は、るか氏とずっと仲よかったから……」
「っ……るかにいさんっ!」
鈴羽にとっても頼れる盟友だったのだろう。
るかが……死んだ。
敵の罠にかかり、まゆりや留未穂を守って、戦場で命を落とした。
「っ………………!」
叫びかける。
11年以上、植物状態であろうと……。25年前の記憶データには19歳当時の心の病みの状態も記録されていたらしい。だが、ポケットに安定剤はない。
岡部のなかで、るかの死が、かつて、くりかえされたまゆりの死と重なる。

腕のなかで、まゆりは冷たくなっていった。何度も、何度も……。そして、るかもまた……。
みな……みんな死んでしまう。何度でも……。
「戦争をきっかけに、たくさんの人間が死んだ」
　至は独白のように語った。
「――小学校の友達も、中学高校の友達も、大学の友達も……親戚も先生も知りあいも、大人も子供も、大切な人も……」
「………っ」
　耐えきれずという感じで鈴羽が嗚咽（おえつ）する。
阿万音由季はもういない。政府軍の無人機から娘を庇（かば）って亡くなった。ふたりは家族を失った。
「たくさんの……本当に、たくさんの人間が死んだんだ」

　わかっていた。
いや――わかっているつもりだった。
理想の世界線（シュタインズゲート）にたどりつかなければ。β世界線にとどまれば、いずれは戦火が、岡部にかかわるすべてを焼きつくすのだ。さんざん鈴羽に聞かされたことだ。
でも、それは……心を病んだ青年にとっては、思いやりようのない遠い未来の話だった。
　現実。

想像。
リアリティのないイメージ。かつて経験した悪夢のようなタイムリープのくりかえし。あれよりも最悪な地獄はないだろうと……信じこもうとした。
こうして実際に、この目で見て、見せつけられて、この耳で、鼻で、肌で、すべてが現実だと実感させられ、はっきりと記憶させられたとき、岡部はやっと思い知ったのだ。
知ってはいても、わかってはいなかった。

屍(しかばね)の山。
野犬の群れ。
連なる銃声。
燻(いぶ)された肉の臭い。腐った内臓の臭い。手のひらに残された、るかの血のぬくもり。まゆりの血のぬくもり。紅莉栖の血のぬくもり。まゆりだけは救ったつもりだった。紅莉栖を見殺しにして、ほかのすべてから目を背けて、やれることだけをやって、逃げて……それでも、まゆりだけは救えたつもりでいた。
でも——岡部が救おうとしていたのは、どこまでも、あのときの自分自身だけだった。
救ったのだとしたら己だけだ。
ただひとり自分だけを救った。誰ひとり——そして結局は、こうして自分自身さえ救うことはできなかったではないか。

「〝紅莉栖（クリス）〟をアマデウスの呪縛から解放してやってくれ」
　おもむろに、至が告げた。
「…………？」
「伝言。２０２５年のオカリンから」
「俺の……伝言……？」
　過去の、未来の自分からのメッセージ。
「シュタインズゲート世界線への道は険しい。一度や二度、やりなおしたところで、たどりつける道ではないだろう。けれど、まずはそこからはじめることが〈運命石の扉（シュタインズ・ゲート）〉へとつながるんじゃないか」
　いくつもの未来の先が、過去へとつながっているんじゃないか。
　そこに理想はある。拓（ひら）かれる。
「──11年前、オカリンはそう言ってた」
　だから〝いま〟から目を背けるな。
「紅莉栖（クリス）を、アマデウスから解放する……」
「だからさ。僕たちがいる、この世界もムダじゃない。きっと必要な世界なんだ。少なくともいまの僕はそう思ってる。もちろんだからって、このままでいいってわけじゃない」
　だから橋田至という男は、いつだって戦っていた。
　どの世界線でも、どこに跳ぼうとも、まるで自身の右腕のように、いつも傍らに立って支えてくれた。

「ダル……」

「だからさオカリン。もう一度、もどって考えてみてもいいんじゃね？　オカリンの記憶の途切れた時間……そこに、さ」

「2011年にか……？　でも、そんなこと……」

棚のガラスには老いた自分の姿が映っていた。

タイムマシンでもどれたとして、この姿のままで、なにができると……。

『──できるわ』

地下室のスピーカーから響いたのは、覚えのある声だった。

「……………」

『ひさしぶりね、岡部さん』

「比屋定さんか……！」

「ひやじょう……？」鈴羽が口を挟んだ。「父さん、さっきの〝マホ〟ってクリスのことなの？」

「うん。あー……そう」

至は通信機のむこうの彼女の本名を娘に教えた。

比屋定真帆は、その後〈ワルキューレ〉の活動に身を投じた際に〝クリス〟という偽名を用いたらしい。

真帆もまた先祖から継いだ名を捨て、タイムマシンをめぐる闘争に身を投じた戦士だった。しかし〝クリス〟とは……。

天才とサリエリ。

真帆は、その関係に、自分と紅莉栖をなぞらえたことがあった。

望むと望まざるとにかかわらず、おなじ時代を、おなじ場所で生きたことによって、相手の人生をも決めてしまうほどの輝きを放った夭折の天才に対する想い——執着が、真帆にその名を名乗らせたのだろうか。

『岡部さん、部屋の奥を見なさい』

真帆の声にしたがって見ると、地下室の奥、照明のあたらない一角に至が移動していた。

スイッチを入れると照明がついた。

「『電話レンジ(仮)』……！」

岡部は目を見はった。

『あなたや橋田さんから話を聞いて、私が作ったものよ。ほら、ちゃんとVRヘッドセットもあるでしょう』

たしかに『電話レンジ(仮)』、そしてタイムリープマシンだった。

「こんなこともあろうかと、リフターも用意してある」

至が言った。大型ブラウン管テレビかどうかはわからないが、リフターとしての機能を果たせるなら装置はなんでもいい。

『改良を重ねた結果、タイムリープマシンの跳躍可能時間は336時間。一度の跳躍で2週間は遡ることが可能よ』

「2週間……」

『ただし、それは途中まで。マシンを改良して、それが可能になったのは10年ほど前だから……それより過去へは、以前とおなじく48時間しか跳躍できない。2011年までもどろうとするなら、単純計算で……3000回近く、タイムリープをくりかえさなければならない』



実際にはタイムリープ後、岡部が眠っているベッドから『電話レンジ（仮）』のある場所にむかうタイムラグもあるだろうし、それ以上の回数を重ねなくてはならない。そして状況は、過去を遡るごとに刻々と変わるはず。なにしろ戦争中なのだ。そのことについても至たちは、いつか岡部がタイムリープに挑むときのために下準備をしてきたという。

『とてつもなく辛い旅になるわ。それでも２０１１年にもどる気があるのなら……』

理想を求めるのなら。〈運命石の扉（シュタインズ・ゲート）〉をめざすというなら。

自問する。

いまの自分に、なしとげるチカラがあるのか。

「しんどくなったら途中で休めばいい」

「ダル……」

『大丈夫よ。どの時間にたどりついても、かならず私たちがいるから』

こうして岡部を頼るのだから、あなたも自分たちを頼れと。

「比屋定さん……」

『──私ね、後悔しているの』真帆は告白した。『アマデウスのせいで、紅莉栖（あのコ）は死んでもなお、多くの邪な人々に利用されようとしていた。だから私からもお願い……あのコを──〝紅莉栖（クリス）〟を解放してあげて。救ってあげて……！　それができるのは、岡部さん……あなただけよ』

〈リーディングシュタイナー〉を有する岡部倫太郎だけが。

未来の先を。

過去の、そのむこうだ。すべての世界線を、アトラクタフィールドを。〝いま〟を極大化し、すべての可能性を望み、幾千幾億の時を重ねようとも、ひとつながりの意思を以て――挑みつづけることができるだろう。

できるかどうかなんて、わからない。

ここからはじまる道が〈運命石の扉（シュタインズ・ゲート）〉につづいているという保証はない。それでも――

「もう一度、考える……か」

保証を求める者は、いつだって時間の犠牲になる。

ずいぶん休んだ。

長く……自分にできることを探してきた。

なにを為すべきか。

もしかすると、これも逃げなのかもしれない。

この腕のなかで死んだ、るかの死を。血で汚れた手を拭うように、なかったことにしたいだけなのかもしれない。

それでも――

「ダル、比屋定さん……ふたりとも、頼む」

岡部は告げた。仲間を頼った。
「っ……おじさん！」
鈴羽が声をあげる。
「オーキードーキー！」
至は親指を立てて、タイムリープの準備にかかった。

真帆が作戦の概要をレクチャーした。
記憶データの送信先は、あの地下室にあるベッドだ。植物状態の岡部は、もちろん携帯電話を受けることはできないが、頭についていたヘッドギアのような装置で自動受信できるようになっている。
１回目、３３６時間のタイムリープを実行後、岡部は『電話レンジ（仮）』のある、この〈ワルキューレ〉の地下アジトにむかう。合い言葉は「きみに萌え萌え」「バッキュンきゅん」——至と真帆に経緯を話す。即、２回目のタイムリープを実行。
『２０２５年までは、基本は、その工程のくりかえしでいけるはずよ。いつでもあなたの脳が受信できるように、絶えず環境を整えてきた』
もちろん注意点、リスクはある。
岡部が匿われていた場所、アジトの場所は戦局、状況によって移動してきた。電源が確保できなくなったり、危険を回避するため、やむをえずベッドごと岡部を避難させたこともあったという。

ただ、それらについても真帆と至は、自分たちの行動をふくめて、ことこまかに記録をつけていた。跳んだ先々で、ふたりに状況をたしかめながら、跳ぶ時間を調整したり、跳んだ先での行動をシミュレーションしてタイムリープすることになるだろう。

とにかく３３６時間遡った岡部が、それよりも短い時間で、その時代の『電話レンジ（仮）』にたどりつくことだ。たとえ数時間、数分ずつでも過去にタイムリープしつづければ〝詰む〟ことはない。

「待て……」岡部は重大なことに気づいた。「俺は２０２５年にストラトフォーに監禁されるんだったよな？　そのときは、どうするんだ」

『やっぱり、そこ？』真帆は息をついた。『まぁ気になるわよね』

「そりゃ……だって〝詰む〟んじゃないのか、そこで？　監禁中には頭に装置もつけてないし、スマホだって持ってはいないだろう……」

「あのときがいちばん大変だったんだ。真帆たんにタイムリープマシンの改良と準備を頼みつつ、僕らはオカリンを、３３６時間よりも短い時間内に救わなくちゃいけなかったからね」

至が思いだして言った。

『とにかく、なんとかできるように準備してあるわ。もちろん２０２５年が、この作戦の最大の山場になるでしょうけど。でも、安心して岡部さん。私たちはすご～く大変だったけど、あなたがやることは、基本おなじだから』

つまり……岡部はだいたい想像がついた。

ストラトフォーに監禁されていた時間——2週間よりは短い——をタイムリープで一気に跳ばすのだ。そして監禁される前に、さらにタイムリープして岡部の〝いま〟を、それ以前へと逃がしていく。

『2025年より以前は、岡部さんのスマホで受信することになるわ。そのころはそのころで、空襲とか、戦争が激しかった時期になる。跳躍できる時間も48時間になってしまう』

　そこからは……もう、気力との戦いになるだろう。そんな予感がした。

『——そうそう、大事なこと。あなたの靴や服は、ベッドの下とか、近くに用意してあるはずだから』

「………」

　ボロボロになった自分の足を見て、苦笑いを浮かべた。

『岡部さん。もしも次に紅莉栖に会えたら言ってやって。未来の私は、あなたの7倍もの時間跳躍を可能にしたわよ、って』

「わかった」

　紅莉栖に、また会えたなら……。

「オカリン、こっちの準備はOKだ！」

　至が告げた。

「早いな」

「メンテは怠ってないからね」

　ＶＲヘッドセットを装着する。ヘッドホンもレンジも以前とはちがっている。でも、それは、すべてのラボメンたちの運命のはじまりになった、あの『電話レンジ（仮）』だ。

「あ……まゆねえさんとは、話さなくていいの？」

「いま跳ばないと決心が鈍りそうだ」岡部は鈴羽に答えた。「それに、いま会えなくても……会えるさ」

　岡部は、どの時間でも。

「――それじゃあ、また。2週間前で、な」

　岡部は、その日のサヨナラを告げるように、みんなに言った。

「ああ、2週間前で」

「うん」

　再会を誓い、笑みを。

『しっかりね』

〝クリス〟の名とともに生きてきた真帆が、岡部を送りだす。

『電話レンジ（仮）』が稼働する。

　ＶＲヘッドセットが岡部の記憶を走査（スキャン）。２０３６年の未来を記憶した〝いま〟の岡部倫太郎を。

タイムリープ。観測者は跳躍する。

＊

長い、時の旅になった。

かがりから、紅莉栖の記憶を消したあとに見た世界。
そこには、紅莉栖がいて、まゆりがいて——みながいた。
それはあの夏の——ほんの少しのあいだだけの平穏な光景だった。
それでも、あの世界は異様なほどに冷たかった。
いまになってみればわかる。
あれはきっと、データとして眠っていたあいだの岡部倫太郎の世界だ。
0と1だけで構成された世界だ。
生きているのに死んでいるような。
死んでいるのに生かされているような。
そこには、たしかに大切な人たちがいた。
けれど、いっさいの温度は感じられない。
手をのばせばふれることもできる。
けれど、わずかなぬくもりすらない。
昏い昏い、光すら届かない、暗黒の宇宙のなかでひとり漂っている、そんな感覚だ。
そして——

アマデウスとなってしまった牧瀬紅莉栖は、いまでも、そのなかにいる。
わずかなぬくもりすら感じることのできない、冷たい世界で、ずっとひとり。

6章　盟誓のリナシメント・後

STEINS;GATE 0

1

――〝未来の記憶を思いだす〟。

タイムリープを経験した者であれば、そのとき脳内であざやかに想起された未来の記憶を、自分が『電話レンジ(仮)』を用いたのだろうという前提のもとで、整理することができるだろう。

岡部倫太郎は２０２５年に植物状態になり、２０３６年になって、19歳のときの記憶を脳に上書きされて覚醒した。

未来の記憶を思いだす――のではあったが、これは19歳の岡部が、それぞれの時代の自分の脳と体を踏み台に、もとの時代に帰還する……ふりかえればそんなイメージの旅だった。

いま――

9

20：58

岡部の説明を聞いた鈴羽は、悔しそうに歯噛(はが)みをした。

「かがりが洗脳にあっていたなんて……！」

あの電話のあと、岡部は、すぐに鈴羽だけを呼びもどした。さらに思いきって、桐生萌郁にもラボに来てもらった。

ふたりはプロだ。〈ワルキューレ〉の戦士とSERNのラウンダー。〝敵〟――ストラトフォーを相手にしたとき、ここから先は彼女たちのような人間でしか対処できない場面もある。

「率直に教えてもらいたい。仮に相手の要求にしたがったとして、かがりをかえしてもらえると思うか？」

「思わない」

萌郁がボソッと即答した。

「あたしもそう思う。相手は、洗脳なんて手を使う人間だ」

まちがっても、約束とか……信じてはいけない相手だ。

「最悪、あなたも殺される」

萌郁が警告した。淡々と。

わざわざ指名してきたということは、岡部倫太郎は〝敵〟にとって無視できない存在になったということだ。

ストラトフォーはシンクタンクだ。事実を収集し、分析する。そうして得られた包括的な情報をクライアントに提供して対価を得る。その情報の出し入れでパワーバランスを調整し、あやつる。知られてはまずい事実は隠匿する。端的には、この世から消し去ればいい。

連中は、どこまで知っている。

ストラトフォーはかがりを監禁していた。タイムマシンのこと、未来のことまで知っている可能性は充分にあるが……ただ、そうなるとラジ館のタイムマシンに手出しをしてこないのは不可解だ。かがりは、鈴羽のタイムトラベルの目的地が２０１０年の夏のラジ館であることくらいは知っていたはずなのだから。

事実から推測するしかないが、タイムマシンのことはストラトフォーには知られていない。

そして〝敵〟が紅莉栖のノートＰＣとハードディスクを要求してきたということは、ことの争点は『中鉢論文』と、そのオリジナルである紅莉栖の理論だ。

岡部がタイムリーパーであること、タイムリープマシンのことは、まだ漏れようがないはずだ。となると岡部の価値とは、せいぜい牧瀬紅莉栖が生前、死の間際まで親しくしていた相手であるらしい——という裏のとれない情報。そして遺品のノートＰＣを現在、所持していること。まぁ、そんなところか。

連中は〈リーディングシュタイナー〉という希有(けう)な能力を知らない。岡部が何者かを知らない。だから殺されても仕方がない。収束があるので死にはしないだろうが……。

とにかく紅莉栖のことを、これ以上、争いの種にされるのは許せなかった。

「こっちから乗りこんで、かがりをとりもどすしかないな」

危険だが、それしかない。

もう夜も遅いが、まゆりたちはいまも奮闘してくれている。

電話相手が指定した刻限は明日……。

ストラトフォーの連中は、岡部と真帆が未だに都内を転々として、逃げまわっていると思っている。だから見つからない相手を捕まえようとするのをやめて、逆に呼びだした。

「乗りこむって、そんな……相手が、どこにいるのかもわからないのに？」

「どこにいるかなら知ってるさ」

岡部は真帆に言った。

「知ってるって本当か……！　おじさん、いつの間に!?」

それは……未来で得た情報だから。

「鈴羽、手伝ってくれるか？」

「オーキードーキー」

鈴羽は親指を立てた。岡部は、次いで萌郁を見る。彼女は……首を横にふった。

「そこまではつきあえない」

だろうな……と。岡部はやむを得ないという感じで顔を伏せた。彼女はＳＥＲＮのラウンダーだ。
天王寺からの命令だけをこなすのだ。
「だめよ……！　ふたりで行くだなんて危険すぎる」
真帆が制止した。
「いや、大勢で動くよりも危険は少ないかもしれない」
岡部は、いま、ここでは死なない。
もちろん瀕死の重傷を負うかもしれないが……土壇場の決断では、覚悟が決まる。
「まゆりさんたちには言わないの？」
「言えば心配かけるだろうからな」岡部は苦笑を浮かべた。「ダル！　鍵フォルダのロックの解除を頼む。
それから、おまえのスマホは通話状態にしておいてくれ」
「オーキードーキー」
「おじさん、これを」
鈴羽が、なにかを差しだした。
「銃……本物……？」
萌郁がボソッとつぶやく。
「もしものときは、自分の身は自分で守るんだ、おじさん」
迷ったが、岡部は受けとった。はじめて手にした拳銃は、想像していたよりもずっと重たかった。

1台の街宣車が、拡声器を鳴らさず、人目を忍ぶようにビルの駐車場に停車した。

後部のスライドドアがひらいて数人が降りてくる。

外国人だ。彼らに囲まれた若い女性――状況だけ見ればただならない雰囲気ではあったが、女性は強要されている様子もなく、静かに巨漢の白人のあとをついていく。

街宣車は、また静かに駐車場を出ていった。

*

「――暑いな」

部屋に入るなり、白人の男はジャケットを脱いで投げた。

下はTシャツ1枚。真冬ではあったが、ここは地下で、熱源となる機器の類のせいで暖かい。それでも、さすがに半袖は彼だけだ。彼が、たっぷりと脂肪をまとっているからだったが。

「お疲れ様です」

部屋にいた、痩せぎすな白衣の日本人が迎える。

「まったくオツカレサマだ。どっかのマヌケがモルモットを逃がしたおかげでだ。なんか、そんな東洋の諺（ことわざ）があっただろう」
　肥満気味の白人は、白衣の日本人が首に提げたスタッフ証をつかんだ。
「はぁ…………」
「『大山鳴動して鼠（ねずみ）一匹』……ボンクラに再発行するIDカードがあったとはな。労働組合にかけあったか？　ストラトフォーも、ずいぶんと情け深くなったもんだ」
「申し訳ありません」その諺はちょっと用法がちがう、とは言えない雰囲気だ。「しかし、これで実験を継続できます」
　日本人スタッフは女性――椎名かがりに無造作にふれた。男の手で意図的にベタベタとさわられても、かがりは嫌がる様子もない。
「どうも、やはり記憶をなくしている」
　白人はピチピチのシャツの袖をまくり、かがりに見せつけた。
　天使の刺青（いれずみ）。
「――俺のことも覚えていない。こいつは俺の天使にいつも祈り、カミサマに縋（すが）っていたのにな。悲しいぜ」
「そうですか……」
「おまえら実験屋のせいだろうが。いいように、あっちもこっちも玩具（おもちゃ）にしすぎたんだ」
　やれやれと、白人――天使の守衛はイスに腰をおろした。

「……ですが、とくに不都合はありません。どのみち、これから記憶を上書きするのですから」
「他人の記憶を、だろ」と、そこで守衛は気づいた。「教授?」
奥の部屋にいた人物を見て、守衛が立ちあがった。
「オツカレサマ」
「今日は、和光にいらっしゃるのかと」
守衛は、そこからは英語で話した。
いろいろあった。先日の和光のオフィスの件も、やはりロシアが動いているらしい。そんな会話を交わす。
「やはり狙いは、『ナカバチ・ペーパー』のオリジナルですか」
守衛は奥の部屋に歩いた。
オフィス荒らしに見せかけていたが、和光で彼らが盗もうとしたのはアマデウス・システムではなく、遺品のノートPCとハードディスクだったようだ。ロシアの連中は、マホが形見分けで、それらを個人的に持っていたとは思わなかった。知っていたなら、マホのホテルも同時に荒らしたはずだ。
「――なにしろ、私も最近まで知らなかった」
教授が息をついた。
アマデウスのデータは、現在、鍵フォルダに移したままになっている。産業スパイ対策の緊急措置的なセキュリティ強化の一環と、クリスには説明している。
「相手がロシアであれば、すべての遺品を破壊することも選択に入りますね」

だから、のんびりとしていられなくなった。ことは記憶移植とか、AIによる軍隊とか、そういった枠組みの話ではなくなってしまった。マキセクリスの遺産……天才の理論が、この21世紀の運命を定めるはずだ。

「決定的に、ね」

教授が告げた。この天啓ともいえる情報に乗り遅れた者は、たとえ超大国であっても、たちまち、その地位から滑落するだろう、と。

「はい、まさに」

「それで……ノートPCとハードディスクは？」

「別働隊に追わせていますが……どうも妙です。マホとテスターのガキ……オカベでしたか。東京中をぐるぐると……」

岡部倫太郎はともかく、比屋定真帆はそんな無意味なことはしないはずだ。

「……そもそも、彼らがいまノートPCを持ち歩いているという情報源は？」

「たしかな筋ですが」

「…………」

教授は、そして、かがりを見た。

「シイナ・カガリの記憶喪失の状態は」

「施設にいたときのことは、すべて忘れているようです。ですが自分の名前は覚えていて……」

それより以前のことは覚えているのかもしれない。はっきりしない。

「ふむ」
「おい、カガリ」
守衛がうながすと、かがりは自分から歩いた。
「ハイ、カガリ」
教授が呼びかける。その声に――かがりは、たしかに小さく反応した。

――コンニチワ。カガリ、ちゃん。

「おいおい、反応薄いな……！　おまえが12年間、あんなに会いたがっていた相手だぜ」
守衛はおどけてみせた。
「『魔笛』の余韻か……昔の実験が、こんなふうに役に立った」
教授は微笑を浮かべた。
洗脳――あれは特定の音楽を聞いたとき、自発的に行動するようにしむける実験だった。複雑な命令がくだせるわけではない。単に「音楽の聞こえるほうにむかえ」というものだ。かがりは、どこかに匿われていたようだが、彼女に割りあてられた曲である『魔笛』の音楽を耳にして、音の源を捜して外に出たのだろう。そして街宣車にいた守衛たちに確保された。

千葉の施設からかがりが脱走したときは、そこにいる担当スタッフが、そんな昔の実験のことなどすっかり忘れていたのだったが……。

「ええと、なんと言っていたのだったかな、彼女は……申し訳ないが私はほとんど記憶がない」

人は必要のないことは忘れるのだ。教授は苦笑を漏らした。

「Jesus!」刺青の男は道化っぽく場を盛りあげた。「カガリ……ほら！　教授だ、おまえのカミサマだよ！」

顔に唾が飛ぶほど近くで叫ばれたが、かがりは身じろぎもしなかった。

その瞳の端から——ひと筋、涙が流れ落ちる。

——カミサマ!?　カミサマでしょ！

——声でわかる！　かがり、ちゃんと、ここに来たよ！　ちゃんと言われたこと守ったの！

涙の意味は。

「シイナ・カガリを千葉に移送する」

教授は守衛に命じた。

「…………？　こちらの設備でも記憶移植はできますが」

「ここは手薄だ。ロシアの動きも気になる……なにか不都合でも？」

「いいえ、ありません」

「では準備を」
教授は背をむけると、設備の操作盤（コンソール）の前に歩き作業をはじめた。他のスタッフたちは荷物をまとめはじめる。
刺青の守衛は、かがりを一瞥（いちべつ）した。
ホルスターに差した拳銃――12年前、かがりが持っていたグロック17を握り、そして、教授の背に――

銃声。

「ッ――――」
苦悶（くもん）の息を吐いて、まさか、とふりかえる。
赤く染まった視界に立っていたのは白衣の日本人スタッフだった。両手で、ぎこちない感じで拳銃を握っている。
銃弾は、背中から守衛を貫いていた。
「…………！　う……裏切り者！」
白衣のスタッフはふるえる声で叫んだ。
「このボンクラが……！」

銃をむけようとしたとき、２発目、３発目……すべての銃弾が、たっぷりと脂肪のついた守衛の脇腹、腕、全身に命中した。

グロック17が床に転がる。

白衣のスタッフは撃ちつくした38口径のレボルバーをとり落とし、ガチガチと歯をふるわせながら床にへたりこんだ。腰が抜けてしまっていた。

倒れた守衛を、教授が、ふりかえって見おろした。

「きみとは長いつきあいだったな……どこで道をあやまったのか。いくら積まれた……？　まぁ、きみが不摂生をしてぶくぶくと肥満しはじめたときから、ちょっと信じられなくはなっていたが」

守衛は、もう、自分の血だまりに倒れて、ことされていた。

そうなることがわかっていたように、その場にいた誰も動じた様子はない。

「きょ、教授……」

「ご苦労。きみのミスはひとつ帳消しだ」

「はい……あ！　彼が裏切り者であった以上、ノートPCの情報の件も……」

「ここを手薄にするためには好都合だったのかもね。彼の狙いはアマデウスと記憶データ、カガリの身柄、私の命……そのすべてだったようだ」

「はい……」

「ロシアの前に、星条旗と全面衝突になるとは……！　ノートPCを追っている部隊に撤退命令を。すでにシイナ・カガリは確保した」

白衣のスタッフに命じると、潮時と判断した教授は、かがりをふりかえった。

かがりは銃殺された守衛を前に、叫びたくてもできない様子で、ひっ、ひっ……と浅い息をくりかえしている。

「カガリ、大丈夫」

教授は日本語で告げ、かがりの頬（ほお）をやさしく撫（な）でた。

「…………！」

「ひとつ、質問していいかな。カガリ……きみは、以前、自分が未来から来たと言っていたね。私を教授と呼び、未来の私を〝カミサマ〟と呼んでいた。正直に告白すると……バカらしくて、いままで忘れていたよ。

だが、どうも事情が変わった。

ロシアが『ナカバチ・ペーパー』を入手し、ある理論を完成させようとしている。世界中の科学者が、あんなトンデモ論文――と笑いものにしているアレだよ。でもね……私は知っている。論文を書いたのは牧瀬（マキセ）紅莉栖（クリス）――天才である彼女だ。中鉢は娘を殺して論文を奪い、ロシアに自分を売りこんだ。

そう、タイムマシンだ……！

　ロシアの連中が、クリスの遺品であるノートPCとハードディスクに食指をのばしてきたことで、さらにタイムマシン理論が実在する信憑性は増した。リンターロがクリスの友人だったこと……そのリンターロのところに、脱走したきみが匿われていたこと。これらの事実を、私は……我々は、押さえてはいるが処理しきれないでいる。洗練されたインテリジェンスとしてね。このままでは情報として売り物にならないんだ。いや、話が難しくなってしまったかな……？　だからね、カガリ……きみは記憶喪失のようだが、子供のころのことは覚えているんだろう？　そうだね？」

「は…………い…………」

　かがりは掠れた声で答えた。

「つまり未来の……２０３６年、だったか？　そのころの記憶だね。私は、もう老人なんだろうね。なにか証拠はないのかな？　きみが未来人であることを証明できることは。たとえば――」

　教授は考えるそぶりをする。

　過呼吸気味に、息を吸うだけになりながら、かがりは必死に声を吐きだした。

「〝情報とは……〟」

「ん？」

　教授は耳を寄せた。

「正しく、正しく、正しく、正しく……それを正しく使える者が、正しく管理し、正しいタイミングで、正しい場所へ提供すべきである。正しく、正しく、正しく、正しく……」

　かがりはくりかえした。
「ほぅ……どこで教わったのかな、その言葉を」
　自身の所属するストラトフォーが掲げるスローガン、裏の社訓のようなものだ。情報を支配するものが世界を支配する。そして、それは正しき自分たちだけに任され、許され、認められた――特権意識。ゆえに彼らは国家には忠誠を誓わない。情報のコントロールによって世界に影響力を行使すること、そのものがストラトフォーの存在意義だ。
「あっ…………！」
「よく勉強しているようだが、それだけではね……その、決定的な証拠にならない。そこで寝転がっているデブに聞かされたのかもしれないし。ほら……そう、たとえばだ。きみが乗ってきたタイムマシンはどこにあるんだい？」
　教授はたずねた。
　かがりは……床に倒れた男を見た。
「刺青のおじさん……」
「ん？」
「かがりにやさしかったの。ひとりだけだよ……友達になってくれたの……」
　その言葉がひどく意外だったのか、教授は白衣のスタッフと目をあわせたあと、肩をすくめてみせた。
「トモダチ……きみは彼を、そう思っていたの？　ただ虐(いじ)めていただけのように思うが」

「ちがう……私の話を聞いてくれた。私は天使だって……その腕の天使とおなじだって」
「天使……」
「約束だって守ってくれた！　カミサマと会わせてくれたんだもの！　あなたと！」
「…………ふむ」
「私、わからなくなっちゃった……カミサマの言うことはぜんぶ守ってきた！　でも、タイムマシンのことは言えない……ママに言われたもの。オカリンさんに怒られる。そしたらオカリンさんが好きなママは悲しむ……！」
「…………？」
「オカリンさん……というのはリンターロのことかな……？　いや、しかし、それで充分だよ、カガリ」
「きみがタイムトラベラーだと信じたわけでは、まったくないがね。タイムマシンのこともリンターロの周辺を洗えばいいわけか」
　ストラトフォーがその気になれば、大学生ひとり、洗いざらい調べるのは容易なことだ。
「うっ…………！」
「ありがとう、カガリ。じゃあ――」
　教授は白衣のスタッフに目配せをした。
　スタッフたちが、かがりを拘束する。

かがりは、なされるがままになる。しかし、そのとき——言葉だけはあきらかな叛意（はんい）をもって、教授に言葉をかえした。
「私……思いだしたよ」
「うん。さっきから話を聞いていると、そのようだね」
教授は興味を示した。
かがりは床に倒れた男を見た。腕の、刺青（いれずみ）の天使は——顔を潰されて血まみれになっていた。
「私は天使だった。カミサマの天使だった。だからカミサマに褒められたかった」
「ふぅん」
「忘れていたのは12年間のことだけじゃない。私が忘れていたのは——」
かがりは教授を見つめた。
「…………?」
「あなたのことです——〝カミサマ〟……レスキネン教授（せんせい）。あなたのこと、ぜんぶ忘れていたの。かがり……教わったこと、守ったよ。ずっと……でも……」
「いいんだよ、カガリ」
教授——レスキネンが、彼を捜していたタイムトラベラーの少女を睨（にら）んだとき、

暗転。

照明が落ちた。
ドアのひらく音とともに、マズルフラッシュが闇を切り裂く。くぐもった悲鳴。レスキネンは頭を抱えて床に伏せることしかできなかった。彼には軍の経験などなかった。せいぜい指定されたプログラムにしたがい、数時間の銃の講習を嫌々ながら受けたことがあるだけだ。研究に没頭するあまり、それすらサボったのだが。
明かりが点く。
大きな体を投げだして伏せていたレスキネンが顔をあげると、そこには一変した景色が広がっていた。
血……流れだした血と血が、床の上で混ざりあった。
「！」
ドス黒く染まった白衣。日本人スタッフは体をあらぬ方向に曲げて倒れ、目玉をぶちまけていた。ほかのスタッフも、武器を抜く間もなかった様子で死体をさらしている。
「――Dumb Broad.」
くそマヌケ、と。学会では決して飛ぶことはないスラングが飛んだ。
暗視スコープが外された、フルオートのサブマシンガンを手に立っていたのは――
「ジュディ……!?」
「アレクシス、ご機嫌いかが」

ジュディ・レイエス教授だった。

11

22：39

「ここに、かがりが……？」

「ああ、そのはずだ」

東京電機大学の神田キャンパスを前に、岡部は鈴羽に答えた。

２０３６年の至の話では、ストラトフォーの支部は母校の地下にあった。そこに岡部の記憶データが保管されていたという。

電機大の神田キャンパスは複数のビルに分散している。

地下階があるのは11号館と15号館のふたつ。

そのうちストラトフォーの支部があるのは、この11号館だと思われた。ここはいちばん新しくて、設備が整っており、階層も17階まである。それだけ関係者も多い。外国人であっても、さして目立たずに出入りすることができるのだ。

とはいえ何十人という外部の人間が、毎日ぞろぞろと出入りしているということはないだろう。常駐するストラトフォー関係者の人数はかぎられるはずだ。基本はシンクタンクの人間だろうし、武装して荒事

にあたるような連中は、別にいるはず。そういう実動部隊みたいな連中はいま、陽動作戦にかかって出払っているはずだ。

ここは手薄になっている。

そして、こちらには鈴羽がいた。岡部は死にはしない。勝算はある。かがりを救出するのだ。

「こっちだ」

土地勘のある岡部が先に立ち、まっすぐ階段へむかった。

館内には3基のエレベーターがあるが、いざというときに身動きがとれなくなるエレベーターは危険だろう。

地下2階へ。

問題は、この先だった。地下2階には大小20以上の部屋があった。このなかの、どれが支部に使われているのか……。

「おじさん、こっち」

鈴羽が前に出た。

「わかるのか?」

「思いだした。ここなら昔、潜入したことがある」

昔……未来の、廃墟(はいきょ)となった東京での話か。

「――あたしが知ってる建物は、もう崩れかけてて外観も変わってたから……」

ただ、地下の間取りは変わっていなかったようだ。鈴羽は迷わず、奥へと歩を進めた。

自動小銃を手に、足音を立てず腰を落として走る。

その部屋の前で立ちどまると、鈴羽は視線で合図をした。

部屋にネームプレートはつけられていない。機械室か電気室だろうと、気にとめたこともなかったが……。

「あたしはかがりを救出する。おじさん、自分の身は自分で守ること」

「ああ」

岡部はベルトに挿した拳銃を手にした。

使いかたは教えてもらったが、あつかえるかどうかはわからない。拳銃というのは数メートル離れると素人では容易にあたらない、なんて、よけいな中二病知識だけはあった。

それでもハッタリにはなるだろう。敵にとっても、岡部倫太郎は正体不明の大学生のはずだ。

「いくよ……3、2、1……」

消音器のついた自動小銃で鍵を破壊し、鈴羽はドアを蹴破った。

*

鈴羽が突入。岡部は両手で拳銃を構えてあとにつづいた。

異臭。

むせかえるほどの錆（さ）びた鉄の臭いが充満していた。

血だ。部屋の床の、あちらこちらに血だまりができていた。そこに数人の人間が折り重なるように倒れていた。

「…………!?」

射殺体。

喉元に酸っぱいものがこみあげてきた。

いったい、なにごとだ……倒れているのはストラトフォーの人間なのか。では、敵対する組織が襲撃したとでも……？

奥に、さらに部屋があった。

半開きになった扉のむこうに、うつ伏せの姿勢で男が倒れているのが見えた。

まさか……岡部は目を疑った。

鈴羽につづいて、奥の部屋に侵入する。

血だまりに倒れていた大柄な金髪男性はアレクシス・レスキネン教授ではないのか……？

そういえば以前――別の世界線だが、この電機大のビルでレスキネン教授を見かけたことがあった。あのときは井崎准教授に会いに来たのかと思っていたが。

やはり、レスキネン教授はストラトフォーに関与していた……？

だが、岡部がいま注目しなくてはならない相手は、別にいた。ここで倒れている彼らを撃ち殺したであろう犯人、彼女は——

「思ったよりも、早かったわね、リンタロ」

艶っぽい外国語訛り（なま）りのある日本語。

岡部は彼女を知っている。

「レイエス教授……!?」

「元気そうでなによりだわ」

ヴィクトル・コンドリア大学のジュディ・レイエス教授だった。

彼女とも、この世界線で会うのははじめてだ。口ぶりからすると岡部とは面識があるらしい。

「どうして……？」

「捜しものをかえしてもらおうかと思って」

血で汚れた服を気にする様子もなく、レイエス教授は軽やかに身を翻した。

彼女のうしろに、かがりが坐（すわ）らされていた。

「かがり！」

かがりの頭には奇妙な帽子が被（かぶ）せられていた。ヘッドセットというほどスマートなものではなかった。電極と配線がむきだしになった装置だ。

「——かがり！　聞こえないのか!?」

呼びかけても、かがりは坐ったまま動かない。眠っているわけではなさそうなのだが……催眠状態のように、薄目を開けたままリクライニングのイスに横たわっていた。

「あら、せっかく気持ちよく眠ってるんだから、起こしたら可哀想よ」

レイエス教授は笑った。

岡部はレイエス教授について、いかにもアメリカらしい陽気で気さくな女性、といった程度の印象しかなかった。

けれども眼前の女性は、ふれれば切れるような鋭い氷の微笑を浮かべている。

「気をつけろ！　そいつ、軍人だ！」

鈴羽はレイエスに銃口をむけた。

「軍人……」

以前、天王寺が言っていた。かがりを捜していたのは西側の軍関係者だと。民間のシンクタンクの人員が、捕虜になるからといってみずから命を絶つものだろうか……とも。

そこで、思いあたった。

ライダースーツの女は、このレイエスだったのではないか？　ラボ襲撃のあった世界線の1月1日、彼女はレスキネンとともに秋葉原を訪れていた。

「そっちのあなた、何者？」

レイエスは鈴羽に興味を示した。

「かがりをかえせ」
「いい顔ね。日本にも、そういう顔をできる人間がいるなんて知らなかった」
　レイエスは賞賛した。
　やはり……タイムマシンやタイムトラベラーの存在までは知らないようだ。
「――とりあえず、銃をこちらに。でないとシイナ・カガリは死ぬわよ？」
「かがりを殺した瞬間に、あたしがおまえを殺す」
「あら、そう。ワタシは組織で動いている。ワタシひとりを殺したところで状況は変わらないわよ」
「…………」
〝敵〟――ここにいるのはレイエスひとりのようだ。
　しかし、こちらは、かがりを無事に救出しなくてはならない。そしてレイエスの言葉に嘘(うそ)はないだろう。彼女は軍人で、任務に失敗すれば自決できるようなメンタルの持ち主のはずだ。
　だが腑(ふ)に落ちない。このむごたらしい射殺体の山はレイエスの仕業だとすれば……倒れているレスキネン教授らしき男も。ふたりの教授は、どういう関係で、このストラトフォーの拠点にいるのか。
「鈴羽……」
「…………っ！」
　鈴羽もレイエスが本気と察したのだろう。悔しそうに自動小銃を足元に投げた。

「いいコね。ついでに、そこで両手を頭のうしろに置いて立ってなさい。それでリンタロ……約束は明日だったはずよ。それに、よくこの場所がわかったのね……どうして？」

「…………」

「いまも、どうやらアマデウスを使って小細工をしていたみたいね。ただの大学生じゃないみたい……まぁいいわ。交換条件は提示したはずだけど、ちゃんと持ってきてくれたの？」

「…………」

「あらあら、いけない子ね。持ってきていないならシイナ・カガリはわたせないわ」

　レイエスは、かがりは眠っていると言っていたが、瞼は閉じきっていない。意識が混濁しているようだった。

「かがりに、なにをした……」

　ジュディ・レイエスとは何者なのだ。彼女はストラトフォーだったのか……あるいは組織を裏切った……？

「残念だけど、まだ、なにもしていないわ。彼らが使っていた子守唄を、ちょっと聴かせてあげただけ。でも、あなたが交換条件に応じる気がないみたいだから、これからはじめてしまおうかしら」

　レイエスはなぜか恍惚とした表情で、拳銃の銃身でかがりの頬を撫でる。

「紅莉栖のノートPCとハードディスクは、特別な場所に隠してある。かがりをわたさないなら、こっちも教えるつもりはない。先に、かがりを解放しろ」

「交渉はムダよ、リンタロ。そっちがわたす気がないなら、こっちはこっちのやりかたをさせてもらうわ」
凄むでもなく、レイエスは淡々と告げた。靴の踵を血で濡らしながら、それが日常だといわんばかりに平然と。
「これは……あなたがやったのか」
岡部はレイエスの足元に倒れたレスキネンらしき男をチラッと見た。
「ええ。彼らもよけいなまねをしなければ、もう少し長生きできたのに……残念ね」
彼ら……ここで撃ち殺されたストラトフォーの連中を、さっきからレイエスは他人のように言っている。だが紅莉栖の遺品を要求している以上、その目的はおなじ──タイムマシン論文だ。
「どうして、こんなまねを」
「簡単なことよ。ワタシの正体に気づいたから」
「正体……？」
「そこの彼女が言ってたでしょう？」
レイエスは両手を後頭部で組んで立たされた鈴羽を示した。
「軍……か」
ストラトフォーは民間のシンクタンクだ。そこに米軍が関与……レイエスの言葉を信じれば、彼女は米軍のスパイとしてストラトフォーを探っていたとか……？
「同時に研究者でもある。ＤＵＲＰＡ……ダーパって言っても、どうせわからないでしょうけど」

と、通話状態で保持されていたスマホを介して、岡部が耳につけていた小型無線インカムに声が入った。

『——ＤＵＲＰＡ……！』ラボにいる真帆の声だ。『アメリカ国防高度研究計画局？　そんな……レイエス教授が⁉』

【Defense ultimate Research Projects Agency】——岡部の中二病知識によれば、アメリカ国防総省、米軍のなかでも新兵器の開発などにあたるセクションだったはずだ。

『オカリン……もう少しだけ時間を稼いでくれ』

至が声を飛ばした。

この状況で時間を稼げと……無茶を言ってくれる。でも、これまでにも至にはさんざん無茶ばかりを頼んできた。今回は岡部が、その無茶に無茶で応えるべきだ。

状況をたしかめる。

鈴羽は銃をとりあげられてしまった。レイエスは軍人で、素人など簡単にひねられてしまうだろう。実力行使は難しい。

「その軍の人間が……どうしてヴィクトル・コンドリア大学に」

動揺を装いつつ、岡部は話をつないだ。

「大学教授をしているのは表向き。もともとＤＵＲＰＡでワタシが所属したチームは洗脳（ブレインウオッシング）の研究をしていたの」

「洗脳っ！」意図的にリアクションを大きくした。「それじゃあ、かがりは……！」

「言っておくけど、そもそも彼女を記憶喪失にしたのはワタシじゃない、彼らよ」

　レイエスは床に倒れた男たちを示した。

「どうだかな……！　ストラトフォーが――」

「ワタシは彼ら、としか言わなかった。ストラトフォー……その名前も知っているのね。本当に油断ならないわ、リンタロ」

「…………！」

「アレクシスの正体も最初から知っていたの？　まぁ、もういいけど」

　レスキネン教授は、やはりストラトフォーの関係者だった。つまりアマデウス・プロジェクト自体が、そもそもストラトフォーと共有されていたわけだ。

　民間会社であるストラトフォーは、アメリカの企業ではあるが、かならずしも合衆国のために働くわけではなかった。まさにタイムマシン論文のような歴史を動かすほどの情報があれば、CIAさえ出し抜き、超大国を相手に商売をする。

　鍵フォルダにアマデウスが移されているのは……もしかするとストラトフォーとDURPA、レスキネンとレイエスに水面下の争いが生じた結果なのかもしれない。

「そもそも、なぜ軍の人間が洗脳の研究なんてする必要がある？」

　岡部は叫んだ。

　そこは訊くまでもないことだったが、至がハッキングを成功させるまで時間を稼ぐのだ。

「決まってるでしょう」レイエスの言葉にあきらかな軽蔑が混ざった。「思いどおりに動く戦士を作るためよ。文句を言うこともなく、死を恐れることもない。国家のために身を捧げる最強の軍隊を作るため」

「…………！」

「別にめずらしいことじゃないわ。そんなの100年以上も前から、世界中でおこなわれているもの」

たしかにマインドコントロールに類することはおこなわれてきた。歴史上、プロパガンダなどによる民衆の扇動だって一種の洗脳だ。

「――でもね、洗脳なんて面倒なことをしなくても、最強の戦士を作りあげられるとワタシたちは気づいたの。それが〝AI戦士〟よ」

「AI戦士……」

言葉だけ聞くとSFじみた響きだが、岡部は、点と点が線でつながった思いだった。

アマデウス・プロジェクト。

レスキネンとレイエス……ふたりの教授、ストラトフォーとDURPA。

「なるほどな……！　学習済みの人工知能を、兵士の頭のなかに上書きするというわけか。そうすれば一様に高度な頭脳を持つ兵士を、大量に生みだすことができる」

「へぇ」

レイエスは感心してみせた。

「たとえば優秀な兵士からサンプリングした特殊技能についての記憶データをマニュアル化し、部隊の兵士全員にインストールすればいい。全員が、どんな高度なミッションもこなせる兵士にだってなれる」

「そのとおり！　リンタロ、理解が早いわね。しかも、ゆくゆくは共意識化することで、より綿密で高度な連係すら図れるようにもなる」

軍隊は急速にハイテク化が進んでいる。航空機、車両、軍艦……それを兵士ひとりひとりまでネットワーク化された一群としてとらえる。優秀な、能力のムラがない人員で構成された部隊。そこでは過酷な任務、劣悪な環境、まずいメシにも不平はゼロだ。人間関係やストレスからくるハラスメント、犯罪も起きない。

「――どう？　凄いでしょう？」

「給料も、補償も、年金だっていらなくなる。コストを極限まで削減し、かつ最良の部隊を編制できる。歴史上の為政者すべてが夢にまで見た軍隊の誕生だ……倫理的な問題を無視すればな」

まさに人形だ。人権などない。岡部はうなった。

「そんなの……許されるわけがない！」

鈴羽が声をあげた。

「陳腐な台詞（せりふ）ね」

「！」

煽られて、殴りかかるんじゃないかと岡部は緊張したが、鈴羽の目は冷静だった。時間稼ぎのために陳腐な台詞を吐いたのかもしれない。レイエスはかがりに拳銃をあてがっている。鈴羽は反撃のチャンスを待って神経を研ぎすましているはずだ。

「いいこと……？　ワタシたちは世界の治安を守っているの。我がアメリカ軍があるからこそ、世界の平和は保たれているのよ。合衆国に忠誠を誓い、そのための戦士になれるのなら、洗脳を受けた彼らだって本望のはず」

たとえ最終的には、AI戦士は軍の備品としてあつかわれることになっても。それがジュディ・レイエスという人間の思想、本性だ。

到底、納得できるものではなかった。

「ククククク……！　おもしろい！」

岡部は――盛大に、笑った。

「？」

「レイエス教授……いや、レイエス！　貴様、なかなかおもしろいじゃないか！」

テンションを切り替えていく。

鈴羽がチラリと岡部を見た。また、あの妙なやつか……と軽蔑する視線だったが、状況が状況だけにツッコミは飛んでこなかった。

一方レイエスは、これには、さすがに途惑わされた。

「リンタロ……？」

「倫太郎ではない！」

ならば、いまは演じよう。

——我が名は鳳凰院凶真！　世界の支配構造を覆し、混沌（こんとん）に陥れる男！



見得（みえ）を切って、白衣をひるがえす。

一世一代の大芝居だ。

「…………いったい、なんの冗談？」

「ククク……この狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真が認めてやろう！　貴様、なかなかにマッドだ！」

「ホーオー……なに？」

呆（あき）れるというより理解できないといった反応で、レイエスは岡部を眺めた。

「鳳凰院凶真だ！　岡部倫太郎とは世を欺くための仮の姿！　その正体こそ、この俺！　不死鳥の如く甦（よみがえ）るマッドサイエンティストだっ！」

「ぷっ……」レイエスは噴いてしまった。「ふふふ、なにそれ！　あなた、とてもユニークね！」

ぽかんと口を開けたレイエスだったが、すぐに余裕の笑みを浮かべる。

相手がまったくびびらなかったので、岡部はすっかり滑り気味だったが、ここでひるむわけにはいかない。

「ジュディ・レイエス……！　これまでに貴様がやってきたことは、すでに把握した。貴様はＡＩ戦士の研究のために、ヴィクトル・コンドリア大学に教授として潜りこんだ。そしてその過程で、アマデウス・プロジェクトにたどりついた……そうだな？」

「ええ、そのとおりよ。アマデウスは興味深いプロジェクトだったわ。でも、それよりもおもしろかったのは……」

　レイエスは足元の死体を踏みつけた。

「――アマデウス・プロジェクトの陰に見え隠れする、彼らの存在よ。案の定、ストラトフォーに探りを入れてみたら……ねぇ、アレクシス。とんでもないものが見えてきた。なにが出てきたかは、あなたも知ってるんでしょう？」

「タイムマシン……だな？」

　岡部は、ついに、その話題に踏みこんだ。

「『ナカバチ・ペーパー』とマキセ・クリスの父親のことまで、リンタロ……あなたは知っているようね。するとロシアのことも当然……あなた、まさかどこかの組織のスパイ？　アレクシスにとりいって、アマデウス・システムのテスターになったのも偶然じゃないのかしら」

　レイエスは警戒を深めると同時に、岡部倫太郎という人間に興味を示しはじめていた。

　岡部は雄弁に語った。

「なるほどな……人類の夢であり、不可能と言われていたタイムマシン！　その理論が記された論文の存在に気づいたか！　それを手に入れれば、世界の覇権をも手に入れることができると！」

　大仰なことを口走りながら、話を整理する。

椎名かがりをめぐる陰謀の中心にいたのは、レイエスの足元で倒れている男――アレクシス・レスキネン教授なのだろう。表の肩書きはヴィクトル・コンドリア大学の教授であり、裏ではストラトフォーに所属していた。

レスキネンは大学の脳科学研究所でアマデウス・プロジェクトを進めていた。その研究はストラトフォーでおこなわれていた記憶移植実験と表裏一体であり、かがりやその他の被験者によって、おそらく千葉にある拠点で人体実験がくりかえされていた。

そして昨年、新たな衝撃的情報がもたらされる。『中鉢論文』だ。ロシアが入手したタイムマシン理論について、軍事シンクタンクであるストラトフォーは総力をあげて調査、評価したはずだ。

ロシアは本気だった。発表された論文はフェイクであり、本物が存在する。

そして中鉢教授の娘が天才・牧瀬紅莉栖――自分の部下であったことをレスキネンは知った。紅莉栖の死亡推定時刻に、中鉢教授がラジ館にいたこと。彼の能力、性格、経済状況、直近の言動など様々な状況証拠から、『中鉢論文』のオリジナル――真のタイムマシン理論は牧瀬紅莉栖の手によるものである可能性が高いと結論づけた。

ロシアが保有する『中鉢論文』とは別に、牧瀬紅莉栖の遺産――アマデウスの記憶データからタイムマシン理論を掘りかえせないか。

アマデウス・プロジェクトは、そのときからタイムマシン理論のサルベージが目的となった。レスキネンの来日さえ、それが真の目的だったのではないか。

レスキネンは、第三者の脳に紅莉栖の記憶データをダウンロードし、その情報をひきだそうとした。現時点で、実際に実験がおこなわれたかどうかは世界線によって異なるようだが……結果的に、被験体である椎名かがりは千葉のストラトフォーの拠点から脱走、記憶喪失になってしまう。
β世界線のアレクシス・レスキネンという男については、おおむね、そんなところなのではないか。
問題はジュディ・レイエスだ。
彼女はアメリカ国防総省のDURPAに属する政府側の人間で、洗脳を研究していた。レイエスとレスキネンの関係は推測になってしまうが……『中鉢論文』とタイムマシン理論、牧瀬紅莉栖との関係がDURPAにも知られるに至り、最初こそ協力関係にあったものの、ついに米軍はアマデウス・プロジェクトを紅莉栖の記憶データごとストラトフォーから接収しようと動いた。
つまり、ライダースーツの女はレイエスだったのではないか。
ライダースーツの女のラボ襲撃にせよ、秋葉原の路地裏での誘拐未遂にせよ、DURPAはストラトフォーを出し抜いて、椎名かがりの身柄を横取りしようとしていたのではないか。この世界線ではいま、まさにDURPAのレイエスがストラトフォーのレスキネンを殺し、かがりを奪おうとしている。
世界線によるアマデウスの凍結などの微妙な差異もまた、米軍（DURPA）のレイエスが、民間（ストラトフォー）のレスキネンから、アマデウス・プロジェクトの研究成果を奪おうとする流れのなかで起きたことだろう。
世界線によって過程は変わる。
しかし椎名かがりをめぐって、ラボに脅威を与えていた真の敵は、この女だった。

岡部はレイエスを見下して、ふんぞりかえった。
「ふんっ、だが、くだらんな……貴様らの考えることは、みなおなじだ」
「くだらないですって……？」
レイエスは不愉快そうに眉をひそめる。
「ああ、実にくだらん！　世界の覇権？　国家のため組織のため機関のため……どれも矮小な目的だ。そんなもののために世紀の大発明を利用するなど、科学者として下の下！」
「ワタシは科学者である前に軍人よ」レイエスは興奮した。「国に命を捧げた者なの。我が国が世界の覇権を手に入れれば、それだけで抑止力になる。それは世界のためでもあり人類のためでもあるのよ！」
レイエスは岡部に負けないテンションで言いかえした。
彼女は本物なのだ。星条旗に１００％の忠誠を誓った、真のマッドサイエンティストだ。
「──だから決して、他の国に先を越されるわけにはいかない！　革命的な理論をワタシたちが手に入れることで世界の均衡は守られる！　世界の平和は保たれるのよ！　それを他の国に……ましてや、いち民間企業に手に入れられるなど許すものですか！」
彼女は、真に、そう信じている。
岡部は、レイエスの足元に横たわるレスキネン、そして隣の部屋で倒れている無残な死体たちを示した。
「それが、これだけの人間を手にかけた理由か……あえて、もう一度言おう。くだらないな！」

「あら、そう」レイエスはひるまない。「彼らには、わるいことをしたと思ってるわ。本当なら彼らを泳がせるだけ泳がせておいて、すべてを手に入れてからデータを頂戴するつもりだったの」

「なら、なぜ殺した？」

「スパイとして直接、ストラトフォーに潜り込ませていた部下が、ヘマをしでかしちゃったのよ」

DURPAがアマデウス・システムの簒奪(さんだつ)を狙っていることがバレてしまったのだ。

「──だから、それについてはこちらの落ち度だと思ってるわ。でもね……彼らだってわるいのよ。DURPA(うち)には民間の研究者も在籍しているの。そちらに席を用意するって提案したのに、欲を出して要求をつきつけてきたりなんかするから。才能のある人間を失うのは不本意だわ」

わずかに口角を上げて、レイエスは嗤(わら)った。

ひねくれた女の貌(かお)だ。

「さて、ここでひとつ提案。リンタロ・オカベ……あなた、DURPA(うち)に来ない？」

「なに……？」

思いがけない提案に、岡部は挙動不審になりかけた。

「あら、意外って顔ね。いったいなんのために、こんな話をしたと思うの。冥土のみやげに──なんて日本の時代劇(SAMURAI CINEMA)のなかだけの話でしょう」

「………」

レイエスはずいぶん日本通のようだ。どうしてなのか、その経緯を聞くことは……ないだろう。

「心配しなくていいわ。ワタシたちは国籍なんて問わないし、お望みならばグリーンカードだって用意してあげられる」

アメリカ合衆国の永住権とは、たいそうな大盤振る舞いだ。

「つまり、俺の……この鳳凰院凶真の才能を認めたというわけか」

「才能のない人間には声をかけたりなんてしないわ。あなたには才能がある。それに、マキセ・クリスの友人でもある」

実にわかりやすい。岡部に価値を見出した真の理由は、後者のようだ。

「牧瀬紅莉栖のタイムマシン理論について、俺が、彼女からなにか聞いているかもしれない……そう期待しているわけだ。だからこの俺が欲しい、と」

「役に立つ人間はひき抜く。正当な対価も払う。それがワタシたちの生きる世界のルールだもの」

「ということは、役に立たなくなったら、俺もそこに転がっている彼らのようになるわけだな」

「それは、あなたの働きと心がけ次第じゃないかしら」

捕虜になるくらいなら自殺するメンタリティの持ち主に、心がけ、とか言われても肝が冷えるだけだ。

レイエスは、かがりを坐らせたリクライニングシートのむこうにまわった。

鈴羽は動かない。隙らしい隙はないのだろう。

――ダル、まだなのか……？

焦る。時間稼ぎも、そろそろ限界だった。

「ま、そのことはゆっくり考えて……」
「クク……ククク……フゥーハハハ！」
　岡部──凶真は嗤う。
　首をかしげて、レイエスは眉根を寄せた。相手のキャラクターをつかみきれないようだ。
「この俺の才能に目をつけるとは、なかなかのハイエスト・アイの持ち主だ！」
「ハイエストアイ……？」
「目が高いという意味だ！　メリケン人なのにそんなこともわからないとはな！　だが、まあいい。科学者として下の下だと言った、さっきの言葉はとり消してやろう。なにせ、この鳳凰院凶真（おれ）の才能を見抜いたのだからな」
「あら、こちらの提案に乗ってくれるのね」
「断る！」
　岡部は声を被（かぶ）せて拒絶した。
「な……………？」
「なぜなら、この俺は、鳳凰院凶真だからだ！　狂気のマッドサイエンティストは、孤高の存在でなければならない！　いついかなるときも、なにものにも属してはならない。それが宿命……」
「…………」
　目を見ひらいたレイエスだったが、やがて大きくため息をついた。

「ま、それについては結論を急ぐ必要はないわ。彼女の処置が終わるまで、ゆっくり考えてもらってかまわない」

手強（てごわ）い。奇行めいた言動に出た岡部に、おなじテンションで冷静に対してくる。

もしかすると日本語のニュアンスまでは充分に伝わっていないのかもしれない。

「かがりを、どうするつもりだ」

鈴羽は、頭のうしろで両手を組んでレイエスを睨（にら）みつけている。

「わかりきったことでしょ。彼女の頭のなかに、マキセ・クリスの記憶を上書きするの」

「そんなことは……！」

「そんな顔しなくても大丈夫よ。このために今日まで、動物や人間を使って実験をくりかえしてきたんだから」

レイエスはかがりの頬（ほお）を撫（な）でた。

「──そもそも、これまでの記憶移植システムには致命的な不具合があったの。でも今回はそれも解消した。その上、彼女の高い適応力もある。きっと成功する……クリスの記憶が……頭脳が、カガリのなかで再現されるのよ。そうなれば記憶のブラックボックスなんて存在しなくなる。ワタシたちの言うがまま。彼女はきっとタイムマシンについても、ぜ～んぶ教えてくれる。もうクリスのノートPCもハードディスクもいらない。カガリ（カノジョ）さえいてくれれば、それでいいの……」

レイエスが唇をかがりの耳元に寄せた。

そして次の言葉に、岡部は、ひきこまれそうになった。
「ねえ、カガリ……あなただってクリスになりたいでしょう？」
うっすらと瞼をひらいているかがりの瞳には、意思が感じられなかった。
「だめだ、かがり！　そいつの言葉を聞くな！」
「天才と呼ばれた、あの頭脳があなたのものになるのよ。世界に革新を起こす存在になれるの……素敵だと思わない？」
「……………」
「お返事は？」
するとかがりの唇がほんのわずか、ふるえた。
「は……い……」
ただ朦朧としているだけではなく、なんらかの施術が施されているのか。洗脳で従順に――、思考力の麻酔をかけた者の脳に、他人の記憶を移植する。その下準備はできているのか。
「ふふ、いい子ね」
レイエスは満足した。
「かがり……！」
「リンタロ、これは、あなたの選択でもあるのよ？　素直にこちらの交換条件に応じていれば結果は変わったかもしれないのに。それに……あなただって本当は、クリスに会いたいんじゃないかしら？」

レイエスは色目を使った。岡部のなかにある紅莉栖への想いを見透かしたように。

「…………！」

かがりにダウンロードされた、牧瀬紅莉栖の記憶と再会したいのか。

世界線をいくつも越えた、いま。

岡部ははっきりと答えられた。あの瞬間、あの約束を、あのとき願った意味のままで輝かせるためには。

「人間を構成するのは記憶よ。記憶が、その人間をすべて創りだしているの。クリスの記憶を持ったカガリは、クリスそのものになるわ。そうなれば、あなただってうれしいでしょう……？　それにクリスだって、うれ……」

――ふざけるな。

大声ではなかった。でも岡部自身が驚くほど声が据わっていた。

絶対に許せなかったのだ。おまえが……紅莉栖を騙るな。レイエスの言葉は一線を越えたのだ。

「紅莉栖がよろこぶだと……？　そんなわけがあるかっ！　仮に、かがりの記憶が紅莉栖のものにとって代わったとしても、それは紅莉栖じゃない！　自分の記憶が、そんな目的のために使われたって、あいつは絶対によろこんだりしない！」

あいつを……牧瀬紅莉栖を馬鹿にするな。

「そう。残念だわ」レイエスは肩をすくめる。「いずれにせよ結果はおなじ……そこで、大切な人の記憶が、この子のなかに受け継がれるのを、おとなしく見守っていなさい」

レイエスは設備のＰＣを操作する。
鈴羽は――動かない。
そのときを、至のそのひと言を待っているのだ。
「……ダル。まだなのか」
ささやくほどの小声で、岡部は言った。
『すまん、オカリン……あとちょっと、もうすぐなんだが』
「おじさん」鈴羽がささやく。「場合によってはかがりを見捨てる。あたしが動いたら伏せて」
「…………っ」
鈴羽は躊躇しないだろう。
レイエスが被験体であるかがりにこだわっている以上、かがりの命だけは安全――のはずだ。しかし……相手は真性のマッドサイエンティストだ。
「はあい、準備オッケー」
レイエスはおどけてみせた。
どうする……？　助けるつもりで動くのと、見捨てる覚悟で動くのは、まったくちがう。
このままでは、どちらにしてもかがりは救えない。記憶が完全に上書きされてしまえば、人格は損なわれる。
「それじゃあ、サヨナラ、シイナ・カガリ……」

レイエスの指が操作盤(コンソール)にのびる。

そのとき――鈴羽が動いた。レイエスとの距離を一瞬で詰める。

銃声。

「ッ―!」

飛びかかった鈴羽の体が、弾かれた。

「鈴羽ぁっ!?」

「残念だったわね」

ふりむいたレイエスは拳銃を手に、笑う。

「やめろ―!」

制止を無視して、レイエスの指先が実行キーを押した。

……………………

どう……なった?

記憶移植のプログラムは実行されたはずだが、なにも起こらない。

岡部は途惑うばかり。

一方で、当のレイエスの狼狽(ろうばい)ぶりは、岡部以上だった。

「どういうことっ……!?　どうして反応しないのっ」

ヒステリックに何度も実行キーを叩き、乱打する。しかし、かがりに装着された装置は、いっさい反応しなかった。

「──まさか、こいつ！　Goddamn it! Shit!」

呪詛を吐き、叩きつける。

なにが起きているのかわからない。ただ〝敵〟にとって想定外のトラブルであったことはわかった。

「オカリン……さん……」

「かがり！」

虚ろだったかがりの瞳に、わずかな意識の光が灯っていた。

「Bullshit!」

レイエスは設備のモニターに釘付けになっている。チャンスだ。

「かがり！　来いっ！」

呼びかけに、かがりは頭の装置をふりはらうとシートから起きあがり、岡部に飛びついた。

「オカリンさんっ！」

岡部はかがりを受けとめる。だが、それに気づいたレイエスが拳銃を──

銃声。

撃たれた──かと思ったが、そうではなかった。
レイエスの手から弾かれた銃が、カラカラと床を転がった。
「動くな」
鈴羽が立ちあがった。手には──拳銃が握られていた。
「鈴羽！　無事か！」
「なんとかね」
肩口が血に染まっていたが、致命傷ではなかった。
かがりを保護し、鈴羽がレイエスを狙っている。
なぜ記憶移植のプログラムが実行されず、かがりの洗脳がとけたのかはわからないが……とにかく、これで形成逆転だ。
「ふ……参ったわね。まさかあなたみたいなコに、してやられるなんて」
レイエスは肩をすくめた。
「動くなと言っている」
「でもね……ここで、終わるわけにはいかないのよ」
制止を無視して、レイエスは、さっきまでかがりの頭に装着されていた、電極と配線がむきだしになったヘッドセットをつかんだ。

「ちなみにワタシ、小型の爆弾をポケットのなかに持ってるの」

「!?」

「奥歯をちょっとだけ噛みしめれば、それで起爆するのよ。この至近距離なら、あなたたちもまきこまれちゃうでしょうね」

「自爆する気か……!」

　息をのむ。

「敵に情報がわたるぐらいなら死を選べと教育されているの。悲しいことにね」

「ハッタリだ!」

　鈴羽が叫ぶ。

「そう思うなら撃てばいい」

　レイエスは冷たく言葉をかえした。

　岡部は知っていた。以前、かがりに扮した鈴羽を拉致しようとした連中が、天王寺に捕まりそうになり、自決を選んだことを。あれはDURPAの連中だったはずだ。

「待て、鈴羽!」

「………」

　岡部の気迫に、鈴羽はなにかを感じ、引き金にかけた指をとめた。

「いまは……ダルを信じろ」

その言葉に、鈴羽は自制した。

そんな鈴羽の躊躇をたしかめて、レイエスはニヤリと笑うと、ゆっくりヘッドセットを自分の頭に装着した。

「おまえ……なにをするつもりだ……？」

岡部は質（ただ）した。だが、もはやレイエスには、他人の言葉など耳に届いてはいなかった。

「あなたも、カノジョじゃなければいいんでしょう……？」

レイエスはモニターにむかって語りかけた。いったい誰に――

「まさか……！」

「言ったでしょ？　ここで終われないって……！」レイエスの瞳に狂気が宿った。「そうよ。簡単な話だったんだわ。わざわざ他人を使わなくても、最初からこうすればよかったのよ……！」

ＰＣに――そのむこうにいるシステムに。つまりアマデウスに話しかけている。

「…………！」

「これでワタシはマキセ・クリスの記憶を手に入れられるの！　タイムマシンの理論を得ることができるの！　世界に革新をもたらす存在になれるのよ！」

レイエスは――自分の脳に、紅莉栖の記憶をダウンロードしようとしていた。

「やめろ……！　紅莉栖の記憶を、そんなことに使うな！」

岡部が叫びかけたとき、インカムに相棒の声が響いた。

『――っしゃ、キタキタキタ！』

「ダル？」

「あはははは！　いまからワタシは時間をも支配できる存在になる！」

レイエスは高揚し、もはやなにも耳に入っていない。

『っしゃ！　ロック解除完了！　バッチリ中身までスケスケ丸見えだぜベイベー！』

「ダル！　早くファイルを！」

『ちょい待ち！　いま捜してる！』

再設定を終えたレイエスの手がキーボードにのびた。

「やめろっ！」

「大丈夫、リンタロ。心配しなくても、あなたの大切な女の記憶は、ワタシがちゃんと役立ててあげる」

なんならワタシを大切に思ってくれてもいいのよ、と。

『あった……見つけた、オカリン！』

「消せ、ダル！」岡部は叫んだ。「頼む！」

鍵フォルダのなかの記憶データ。

紅莉栖を……アマデウスから、解放する。

『オーキードーキー！』

「Come into me, Kurisu!」

同時に、至とレイエスの声が、

…………………………。

なにも起きない。

それは当然で、すべてはジュディ・レイエスの脳のなかで起きていたことだった。

「どうなったんだ……？」

鈴羽は、銃口をレイエスにむけたまま、判断しかねていた。

レイエスはキーボードの実行キーを押した姿勢のまま、動かない。

紅莉栖の記憶データは……このDURPAのマッドサイエンティストの脳にダウンロードされてしまったのか。

いいや……岡部にだけはわかった。

目眩（めまい）は、ない。世界線は変わっていない。

意を決して踏みだした、そのとき、レイエスがその場に膝をつく。体ごと崩れ落ちる。

その横顔に垣間（かいま）見えたものは――無。

なにも、ない。

あの瞬間、実行キーを押したときの、全知全能を体現した恍惚（こうこつ）とした表情のまま、レイエスの顔は硬直し、あらゆる意識を消し去られていた。

「オカリンさん……その人……」

　かがりが声をふるわせる。

「早かったんだ。ダルのほうが……一瞬だけ……」

　紅莉栖の記憶データをダウンロードするよりも先に、鍵フォルダの中身――アマデウス・システムは、ハッキングに成功した至によって消去（デリート）された。

〝からっぽ〟をダウンロードしたレイエスの脳には、たぶん〝なにもない〟という情報――空白（ブランク）の状態が上書きされた。喩（たと）えれば、ストレージに簡易的な初期化（フォーマット）が施された状態だ。

　ジュディ・レイエス自身の記憶も。

　野望も。彼女が主張したように、人格が記憶を基に構成されるなら。レイエスの記憶が空白に置き換えられた以上は、そこにあるのは人間のカタチをした抜け殻でしかない。

　鈴羽は、負傷した肩を押さえながら、やっと緊張を解いて、ふと……気づいたように手にした拳銃を検（あらた）めた。

　床に転がっていた拳銃だ。ここに倒れている誰かの持ち物だったのだろう。

　グロック17――

「…………？　あたしの？」

そこで射殺体になった天使の刺青（いれずみ）をした守衛（デブ）が、幼いかがりから没収した拳銃であるとは、このとき鈴羽が思いあたるわけもなかった。

『──オカリン?』

「ダル、よくやった。終わったよ。なにもかも……」

岡部が答えると、インカムから至と真帆の歓声が聞こえた。

「行こう、おじさん……いつまでもここにいるのはよくない」

レイエスが無力化したのをたしかめると、鈴羽は拳銃を納めて、自動小銃を回収した。

「そうだな……かがり、歩けるか?」

「うん」

岡部は、最後にもう一度部屋を見わたした。

屍（しかばね）の男たちと、生ける軀（からだ）の女が床に転がっていた。

アマデウスは──デジタルの匣のなかにいた紅莉栖（クリス）は、もういない。

消えてしまった。

しかし忘れることのない大切な人の記憶とともに──理想の世界線にいるはずの、その人にむかって、岡部は小さくささやいた。

「また会おうな、紅莉栖」…………

12

2011／2／6

未来ガジェット研究所。
大檜山(ひやま)ビルの2階には、今日も女子たちが集まって、賑(にぎ)やかだ。
「それじゃあマユシィ、私たち、また来るね。るかくんも、こんどいっしょにコスプレしようね」
ソファーからフブキが立ちあがった。
「うん、またね～」
「えっと……その、考えておきます……」
まゆりとるかが返事をかえす。
「オカリンさんやみなさんも、おじゃましました」
「ああ、またいつでも来るといい」
岡部はカエデに言った。
「うーん……」
と、そんな岡部を見てフブキが腕組みをする。
「……どうした？」

「オカリンさん、なんだか雰囲気、変わりましたね」
　女子高生の勘というやつだろうか。
「そうか……？」
「うん。なんだか前よりもずっと、とっつきやすくなった感じ」
「もう、フブキちゃん。本人にむかって失礼だよ」
　カエデがフブキをたしなめる。
「えー、カエデちゃんだって、さっき言ってたじゃん」
「ちょ、ちょっと！」
　フブキとカエデのやりとりを聞くと、まゆりは、えっへへー♪　という感じで、ニコニコと表情をほころばせた。
「やれやれ、だな」
　岡部は肩をすくめた。
「あ、それじゃあ、私もそろそろ失礼しますね」
　由季も、つづいて席を立った。
「あ、今日もバイト？」
　至が声をかける。
「はい。終わったら連絡します。週末の予定、決めましょ」

「おk。じゃあ連絡待ってるおー」
フブキとカエデ、そして由季がラボをあとにした。
「なになに、なんだニャ。ダルニャン、ユキニャンと、かなりよい感じだニャ」
留未穂は興味津々だ。なんだか会話が、ずいぶん、ふたりだけの以心伝心というやつで成立していた。
「そ……そう？　あ、でもフェイリスたんへの愛も、もちろん変わらないのだぜ」
「もう、父さんったら！　また！」
鈴羽がむっとなった。
あれから数日。
アマデウスと牧瀬紅莉栖の記憶データをめぐる事件は、ひとまず決着し、ラボには平凡な日々が訪れていた。
東京電機大学の地下で起きた〝出来事〟については、未だに、いっさいの報道がされていない。
DURPAのレイエスと対決した翌日、岡部がおそるおそる大学に行くと、11号館の地下フロアは「事故」により封鎖されていた。
ストラトフォー、米軍、あるいは合衆国政府の意向によって、ジュディ・レイエスの凶行は闇に葬られたのだろう。
以降、椎名かがりの周辺で、不穏な気配は感じられなくなった。
ラボを包囲していた危機感のようなものが失せた。霧のように、むしろ不自然と思えるほど。

大学の現場には、岡部倫太郎という在学生につながる痕跡は、いっさい残していない。ジュディ・レイエスというＤＵＲＰＡの科学者が、ストラトフォーの職員を殺害、自分を被験体にして記憶移植実験をした――という猟奇的な惨事の構図しか浮かびあがらないはずだ。

ラボにいるのは、あの日の作戦に参加したラボメンだけになった。

「それにしても、あれは、なんだったんだろう」

鈴羽が思いかえした。

「あれって？」

「あの女……レイエスが、最初に、かがりに牧瀬紅莉栖の記憶をダウンロードしようとしたとき、うまくいかなかったんだよ」

あのときレイエスは、こう叫んだ。

――まさか、こいつ！

そして母国語で「糞（くそ）、畜生！」と、あらんかぎりの罵声を吐いた。

こいつ、とは。レイエスは誰にむかって言ったのか。

「ただ、システムがうまく作動しなかっただけじゃないん？」

「ダルニャンの言うとおりだニャ。考えすぎることないニャ」

至と留未穂はそう言うのだが、鈴羽はどうもひっかかるようだ。

「そういえば、あのとき……」ふと、かがりが口をひらいた。「ううん、でも」

「ちょっと、かがり。言いかけて途中でやめないでよ。気になるだろ」
　鈴羽は話すようにうながした。
「うん……。実は、あのとき私、声が聞こえたような気がするの」
「声？」
「うん。頭の奥で……。誰だかわからないけど、ダメーっ！　って」
「おまえの〝カミサマ〟か？」
「ううん、ちがう……あ……でも、あのときのこと、ほとんど覚えてないから、ただの夢だったのかも」
　あのときのかがりは、洗脳によって意識が混濁していた。
「アマデウス……」真帆がつぶやいた。「もしかしたらアマデウスじゃないかしら？」
「どういうこと、真帆たん？」
「アマデウスのクリスが、最後の最後で、自分の記憶をかがりさんに上書きされるのを拒んだのかもしれない」
　人工知能のクリスは鍵フォルダのなかにいた。岡部たちが電機大の地下の実験室にいたときはアマデウス・システムが起動していた。つまり、あの場面をアマデウスのクリスは見ていたのか。
　もっとも、それは真帆にしては論理的（ロジカル）でない見解だった。
「まゆりちゃん……」
「うん」

真帆の言葉に、なぜか、るかとまゆりが顔を見あわせた。

「どうした？」

岡部が話をむけた。

「その……ボクたちが最後にアマデウスのアプリを起動したときなんですけど。途中で通信が切られたんです」

「オカリンのボットさんが話してるのに、なんだかすごく慌てたみたいに切れちゃったんだ～」

るかとまゆりは中央線沿線で陽動作戦にあたっていた。時間は、だいたい岡部が大学の地下に突入したときとおなじタイミングだった。

「でも、そんなことありえるの？」

鈴羽が言葉を投げる。

ＡＩが、自分の判断でレイエスを妨害したということだ。

「わからない。けど、アマデウスにも人間とおなじ自己防衛本能はあるはずよ。だから、自分の記憶をよからぬことに利用されようとしているのに気づいて……ということも考えられなくはないわ」

真帆が言った。とはいえ、それはたしかめようもない。ディスプレイやマイク、スピーカーがなければ、人間は、あのＡＩの存在や行動を感じることはできない。

岡部は回想する。

以前の世界線では、かがりは柳林神社にひきとられた時点で、すでに紅莉栖の記憶データを移植されていた。

この世界線では、アマデウスの紅莉栖(クリス)が、自分の記憶データを悪用されることを防ぎ、かがりを守ってくれたのかもしれない。もちろん本物の紅莉栖なら、そんな科学者の倫理に反する実験、絶対に許さないだろう。

だが、そんなことが本当にあるのだろうか。

アマデウス・システムとＡＩのクリスが消失したいま、たしかめる術はなかった。ただ岡部は、なんとなく──そう思いたかった。

「なあ、オカリン。僕も、いっこ、わからんことがあるんだけど」

「なんだ？　ダル」

岡部は至を見た。

「オカリンの話だとさ、これまでアマデウスが原因で何度か世界線の変動があったんだろ？　でも……僕たちがあのときのことを覚えてて、それがオカリンの記憶とも完全に一致してるってことは、今回は世界線が変動してないってことだよな？　それは、なんでなんだろ」

それは岡部も考えていたことだ。

今回、アマデウス・システムを削除したにもかかわらず、目眩は生じなかった。〈リーディングシュタイナー〉は発動しなかった。

「おそらくだが……」岡部は仮説を立てた。「これまでの世界線の変動は、アマデウスに対してアクションを起こしたことで、紅莉栖の記憶データが何者かの手にわたった、そのことが原因だと思われる」
紅莉栖の記憶データを手中にした何者かの手により、タイムマシンに類するものが開発され、そして過去の事象が大きく書き換えられるなりしたのだろう。それは第３次世界大戦へと至るアトラクタフィールドβ内の、過程の、歴史の全体としてはささいな相違ではあるだろうが。
「──だが今回は、その世界線変動の原因である、紅莉栖の記憶データそのものを消去した。原因がとりのぞかれたから、もう、それによる世界線の変動は起きない……そういうことだろう」
アトラクタフィールドは未知の理論だ。いまの岡部たちには、そこまでの推測が精一杯だった。
紅莉栖の遺品であるノートＰＣとハードディスクは、すでに真帆の手で廃棄した。
ＤＵＲＰＡとストラトフォーは、牧瀬紅莉栖の記憶データから『中鉢論文』のオリジナルをサルベージすることに未来にわたって失敗した。
紅莉栖の遺産の存在によってつながる、危うい未来の可能性は断たれた。おそらくアメリカはタイムマシン開発競争から大きく脱落することになるのだろう。
鈴羽とかがりがラボにいて、ラジ館の屋上にはタイムマシンがある。ということは、未来──世界人口の半数が失われ、ロシアの勝利で終わる第３次世界大戦という収束は、ゆるがぬものであるということだ。
もちろん、わかっていた。
アトラクタフィールドを束ねる収束は、β世界線そのものを離脱しなくては覆せない。

『中鉢論文』。
２０１０年７月28日、あの日の収束を回避し、『中鉢論文』がロシアにわたらないようにしなくてはならない。それは牧瀬紅莉栖を救うことと、ほとんど同義だった。
行きづまる。
それでも今回の件は無駄ではなかった。きっと……岡部の頭は少しだけすっきりしていた。
最悪の２０３６年の世界で得た、かすかな閃き。

——世界を騙せ。

今回の作戦は、岡部倫太郎の記憶をシュタインズゲートにつなげるための布石となったはずだ。
「で、これからどうするん？」
至が言った。
「そうだな、いろいろやるべきことはあるが、その前に……」岡部は白衣のポケットから用意したものを手にする。「さて、みなに俺からプレゼントだ」
「これは？」
「ラボメンバッジ。俺たち全員が、このラボのメンバーである証だ」
——OSHMKUFAHSA

ピンバッジには全員のイニシャルが刻印されている。

岡部倫太郎、椎名かがり、橋田至、牧瀬紅莉栖、桐生萌郁、漆原るか、秋葉留未穂（フェイリス）、阿万音鈴羽、そして比屋定真帆、椎名かがり、さらに阿万音由季を加えた。

定まらぬことこそ意味はある。

この仲間たちと、過去と未来に臨もう。

すべてを〝いま〟として、できることを──過去をあきらめないことは、未来をあきらめないことだ。

それが岡部倫太郎の、精一杯だったから。

「ラボメン……」かがりはバッジをうけとると、うれしそうに胸に押し抱いた。「私の宝物、ひとつ増えちゃった」

歩む道は、さらなる茨（いばら）の道かもしれない。

でも、かならず光はある。

「私、紅莉栖とオカリンさんがなかよくなれた理由、なんとなくわかる気がするわ」

真帆はバッジを受けとった。

「あたしも。父さんたちが、どうしてあんなにもオカリンおじさんを頼りにしていたのか、やっとわかった」

６年後に生まれることが約束されたタイムトラベラーは彼女の運命をつないだ。

「私も、ママがオカリンさんをずっと好きなの、わかるな……」

「かがりちゃん……！　ちがうよ、まゆしぃはオカリンの人質で。だからそういうのとは……」

「ちょっ、なん、これ？　オカリンだけモテまくり許せん！　リア充爆発しろ！」

「父さんには母さんがいるでしょ！」

いくつもの未来、いくつもの過去。

すべては〝いま〟――

００１と００４のラボメンバッジを握った。

理想――仲間たちの想いが重なり収束する場所で、きっと逢（あ）える。

「ああ、俺だ」

スマートフォンを耳にあてる。

「――なに？　いつになったら助けに来るのか、だと？　あわてるな。いまは、まだそのときではない。ククク…………俺を誰だと思っている？　……いいか？　狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真に二言はない！」

つながっていない携帯電話に語りかける。かならず世界線を越えて届けと。

「だから、しばし待つがいい。おまえを搦めとる、その刻の呪縛から、いつか、かならず俺が助けだしてやる。ああ…………かならずだ紅莉栖。いつか会える、そのときまで」

約束だ。

生きるということのすべてを、おまえに捧（ささ）げよう。信念の言葉を唱えるのだ。

――エル・プサイ・コングルゥ。

季節はめぐり、また次の冬。

2011／12／18

未来ガジェット研究所のラボに、ひさしぶりの来客があった。
「お？　来た来た」
橋田至が顔をあげた。
玄関口に現れたのは比屋定真帆だ。
ほぼ1年ぶり──なのに、羽織っていたコートはおなじで、昨日もこのラボに来たような印象を受けた。
「わぁ、真帆さんだぁ。すごく会いたかったよ～、トゥットゥルー♪」
「おひさしぶりです、真帆さん」
「元気そうでなによりだニャ」
椎名まゆり、漆原るか、秋葉留未穂──いつものラボメンたちが出迎える。
「ふふ。みんな、あいかわらずで安心したわ」
「そっちこそ変わってないね」

あとがき

『STEINS; GATE 0』ノベライズ下巻をお届けします。

本作の執筆は昨年中には終えていました。著者校正を終えて原稿が手を離れ、このあとがきを描いているのはTVアニメの放送直前だったりします。筆者はアニメ版の内容をまったく知らないので、また一ファンとして視聴できることになりそうです。

上巻のあとがきでも述べましたが、この本は『盟誓のリナシメント』へとつながるルートを描くと企画段階で決まっていました。つまり「鳳凰院凶真の復活」です。さて、ついに再起した岡部の活躍は、紅莉栖は……これは、いまの私から見れば未来にいるファンの皆様のほうが詳しいかと思いますが。TVアニメ、そしてフルアニメで再構成された新作ゲーム『STEINS; GATE elite』で、ぜひ『ゼロ』からつながるトゥルーエンドをご確認ください。きっと新発見があるんじゃないかなぁ、と(期待)。

ありがとうございました。

2018年4月某日　浜崎達也(はまざきたつや)

カバーイラスト／huke
口絵・本文イラスト／huke　池田靖宏（MAGES.）
カバーデザイン／木村デザイン・ラボ

STEINS;GATE 0-シュタインズ・ゲート ゼロ-

盟誓（めいせい）のリナシメント 下

原作　志倉千代丸（しくらちよまる）／MAGES.
著　浜崎達也（はまざきたつや）

2018年9月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『STEINS;GATE 0-シュタインズ・ゲート ゼロ-　盟誓のリナシメント 下』
2018年9月1日　初版発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社KADOKAWA

KADOKAWA　カスタマーサポート
［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）